

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成20年度 —

川 辺 遺 跡 第 9 次 確 認 調 査

太田・黒田遺跡第60次確認調査

鳥 井 遺 跡 確 認 調 査

神 前 遺 跡 第 5 次 確 認 調 査

釜 山 古 墳 確 認 調 査

2010

和歌山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成20年度国庫補助事業として和歌山市教育委員会が計画・実施するとともに財団法人和歌山市都市整備公社に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は5,200,000円であり、国1／2、県1／8、市3／8の補助率である。
- 3 本年度の財団法人和歌山市都市整備公社委託事業は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
川辺遺跡第9次確認調査	和歌山市里字五段6番地他	平成20年5月1日～5月29日	90㎡	井馬好英
太田・黒田遺跡第60次確認調査	和歌山市黒田字池ノ首75番1・3地内	平成20年5月22日～6月6日	40㎡	藤藪勝則
烏井遺跡確認調査	和歌山市府中宇高井田20-1、22-1、22-3	平成20年8月21日～9月11日	40㎡	北野隆亮
神前遺跡第5次確認調査	和歌山市神前馬乗免563番地1	平成20年9月10日～10月9日	50㎡	北野隆亮
釜山古墳確認調査	和歌山市梅原299-1番地 和歌山市木ノ本699番地	平成21年3月10日～3月27日	46㎡	井馬好英 藤藪勝則
平成20年度出土遺物整理 (第1次)		平成20年7月1日～7月14日		井馬好英
平成20年度出土遺物整理 (第2次)		平成21年3月16日～3月26日		奥村 薫

- 4 発掘調査に係る事務局は下記のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査（平成20年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 山田暢之

学芸員 益田雅司

学芸員 前田敬彦

【財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班】

埋蔵文化財班長 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

報告書作成（平成21年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 額田雅裕

学芸員 益田雅司

学芸員 大木 要

【財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班】

埋蔵文化財班長 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

- 5 本書のうち和歌山市教育委員会、財団法人和歌山市都市整備公社委託事業の発掘調査概要部分については文末に執筆担当者名を記載している。本書の編集は大木要が行った。
- 6 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

- 7 遺物整理事業については、川辺遺跡第9次確認調査、太田・黒田遺跡第60次確認調査、鳥井遺跡確認調査、神前遺跡第5次確認調査、市教育委員会が行った鳥井遺跡・宇田森遺跡立会調査等を対象として実施した。
- 8 本書の作成にあたり、関係諸機関の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1	位置と環境	1
2	埋蔵文化財発掘調査事業	
	(1) 平成20年度の概要	5
	(2) 平成20年度和歌山市調査一覧	5
	(3) 和歌山市教育委員会実施の確認・立会調査概要	
	① 六十谷遺跡	9
	② 宇田森遺跡	10
	③ 鳥井遺跡	11
	④ 太田城水攻め堤跡	12
	⑤ 川辺遺跡	13
	⑥ 宇田森遺跡	14
	⑦ 平の下遺跡	15
	⑧ 有功遺跡	16
	⑨ 高井遺跡	18
	⑩ 上黒谷遺跡	20
	⑪ 六十谷遺跡	21
	(4) 財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要	
	① 川辺遺跡第9次確認調査	23
	② 太田・黒田遺跡第60次確認調査	33
	③ 鳥井遺跡確認調査	42
	④ 神前遺跡第5次確認調査	48
	⑤ 釜山古墳確認調査	55

図版目次

- 図版 1 太田城水攻め堤跡立会調査 1区掘削状況、6区中央南壁、6区中央南壁
- 図版 2 太田城水攻め堤跡立会調査 5区中央部掘削状況、5区中央部掘削状況
- 図版 3 宇田森遺跡確認調査 1区東壁土層堆積状況、3区西壁土層堆積状況と落ち込み
- 図版 4 宇田森遺跡確認調査 4区北壁土層堆積状況、4区西壁土層堆積状況
- 図版 5 高井遺跡確認調査 1区全景、1区遺構と北壁土層堆積状況
- 図版 6 高井遺跡確認調査 2区遺構面、2区東壁土層堆積状況
- 図版 7 川辺遺跡第9次確認調査 第1～4区周辺調査前の状況、第5～7区周辺調査前の状況
- 図版 8 川辺遺跡第9次確認調査 第1区全景、第2区全景、第3区全景、第4区全景
- 図版 9 川辺遺跡第9次確認調査 第5区全景、第6区全景、第7区全景、第8区全景
- 図版10 川辺遺跡第9次確認調査 第9区全景、第1区南壁SD-1土層堆積状況、第2区SK-1、第4区北壁SD-3土層堆積状況、第5区SD-4・5細部、第5区南壁SD-4土層堆積状況、第1区南半部西壁土層堆積状況
- 図版11 川辺遺跡第9次確認調査 第2区北半部東壁土層堆積状況、第3区北半部東壁土層堆積状況、第4区東半部北壁土層堆積状況、第5区北半部東壁土層堆積状況、第6区中央部東壁土層堆積状況、第7区北半部東壁土層堆積状況、第8区東半部北壁土層堆積状況、第9区東半部北壁土層堆積状況
- 図版12 川辺遺跡第9次確認調査 出土遺物
- 図版13 太田・黒田遺跡第60次確認調査 調査前の状況、調査前の状況
- 図版14 太田・黒田遺跡第60次確認調査 第1区全景、第1区東半部北壁土層堆積状況
- 図版15 太田・黒田遺跡第60次確認調査 第2区全景、第2区東壁土層堆積状況
- 図版16 太田・黒田遺跡第60次確認調査 第3区全景、第3区西半部北壁土層堆積状況
- 図版17 太田・黒田遺跡第60次確認調査 第4区全景、第4区西半部北壁土層堆積状況
- 図版18 太田・黒田遺跡第60次確認調査 出土遺物
- 図版19 鳥井遺跡確認調査 調査前の状況、第1区全景
- 図版20 鳥井遺跡確認調査 第1区遺構一部掘削状況、第1区SK-1

- 図版21 鳥井遺跡確認調査 第2区全景、第3区全景
- 図版22 鳥井遺跡確認調査 第4区全景、第4区遺構一部掘削状況
- 図版23 鳥井遺跡確認調査 第4区SD-1、第5区全景
- 図版24 神前遺跡第5次確認調査 調査前の状況、第1区全景
- 図版25 神前遺跡第5次確認調査 第1区SD-3、P-10、第2区全景
- 図版26 神前遺跡第5次確認調査 第2区SD-3、第2区東壁土層堆積状況
- 図版27 神前遺跡第5次確認調査 第3区全景、第3区P-1~3
- 図版28 神前遺跡第5次確認調査 第3区SD-1、第4区全景
- 図版29 神前遺跡第5次確認調査 第4区北壁土層堆積状況、第5区全景
- 図版30 神前遺跡第5次確認調査 第5区SD-2、第5区P-5
- 図版31 釜山古墳確認調査 第1区機械掘削終了後の状況、第2・3区調査前の状況
- 図版32 釜山古墳確認調査 第1区全景、第2区全景、第3区全景、第3区全景
- 図版33 釜山古墳確認調査 第3区SV-1、第3区SV-2、第3区SV-2、第3区サブトレ
ンチ3、第1区西半部北壁土層堆積状況、第2区X=-192398m付近南西壁土層堆積状況、
第3区SV-1周辺南西壁土層堆積状況、第3区SV-2周辺南西壁土層堆積状況
- 図版34 釜山古墳確認調査 出土遺物
- 図版35 釜山古墳確認調査 出土遺物

1 位置と環境（太字は本書の調査概要掲載の遺跡）

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市、東は和歌山県岩出市及び紀の川市、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県と三重県との県境にある大台ヶ原を源流とする紀ノ川は、中央構造線の南側をほぼ真直ぐ西流し、紀伊水道に注いでいる。和歌山市の地形は、紀ノ川の北岸と南岸でその様相が異なる。北岸では、和泉山脈と紀ノ川の間に約3kmの幅で段丘及び扇状地が形成される。南岸では紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野の南端を竜門山系から派生した丘陵が断続的に取り囲んでいる。

旧石器時代の遺跡としてはナイフ形石器の出土地がある。紀ノ川北岸の西庄Ⅱ遺跡や園部遺跡、鳴滝遺跡など和泉山脈の山間部や山麓部で点々と出土するほか、市域南東部の山東地区の大池遺跡では50点に近いナイフ形石器に加え、各種の石器が多数採集されている。

縄文時代の遺跡には、鳴神貝塚、瀬宜貝塚、吉礼貝塚、川辺遺跡、岡崎縄文遺跡などがある。鳴神貝塚は明治28年（1895）に初めて報告され、昭和6年（1931）に近畿地方で最初に発見された縄文貝塚として国史跡に指定された。その後の発掘調査により、猿の撓骨の耳飾をつけ、上顎の犬歯2本を抜歯した女性人骨（推定18歳）が出土している。近年実施した発掘調査でも晩期の縄文人骨が多数埋葬された状況で確認されている。晩期を中心とする川辺遺跡では、竪穴建物とともに土器棺が多数発掘され、東北地方に起源をもつ亀ヶ岡系土器や遮光器土偶の腕の先端部分が出土している。また、土器棺に副葬された小形定角式磨製石斧は北陸地方から搬入された可能性が指摘されている。瀬宜貝塚、吉礼貝塚では遺構は不明確だが前期以降の土器・石器が多数出土している。

弥生時代の遺跡は、紀ノ川北岸では六十谷遺跡、府中Ⅳ遺跡、西田井遺跡、宇田森遺跡、川辺遺跡、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、山口遺跡、吉田遺跡、南岸では太田・黒田遺跡や神前遺跡、井辺遺跡、滝ヶ峰遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡では前期に小規模な集落が形成され、中期以降多数の竪穴建物や独立棟持柱建物からなる居住域、土器棺を中心とする墓域、水田域が形成される。また、石舌が内蔵された袈裟襷文銅鐸に加え、多量の土器・石器類などが出土する和歌山県を代表する大規模環濠集落として著名である。市内の銅鐸出土地には太田・黒田遺跡のほか、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、宇田森遺跡、有本銅鐸出土地、砂山銅鐸（紀の川銅鐸）出土地、吉里銅鐸出土地などがあり、外縁付紐式・扁平紐式・突線紐式銅鐸が出土している。

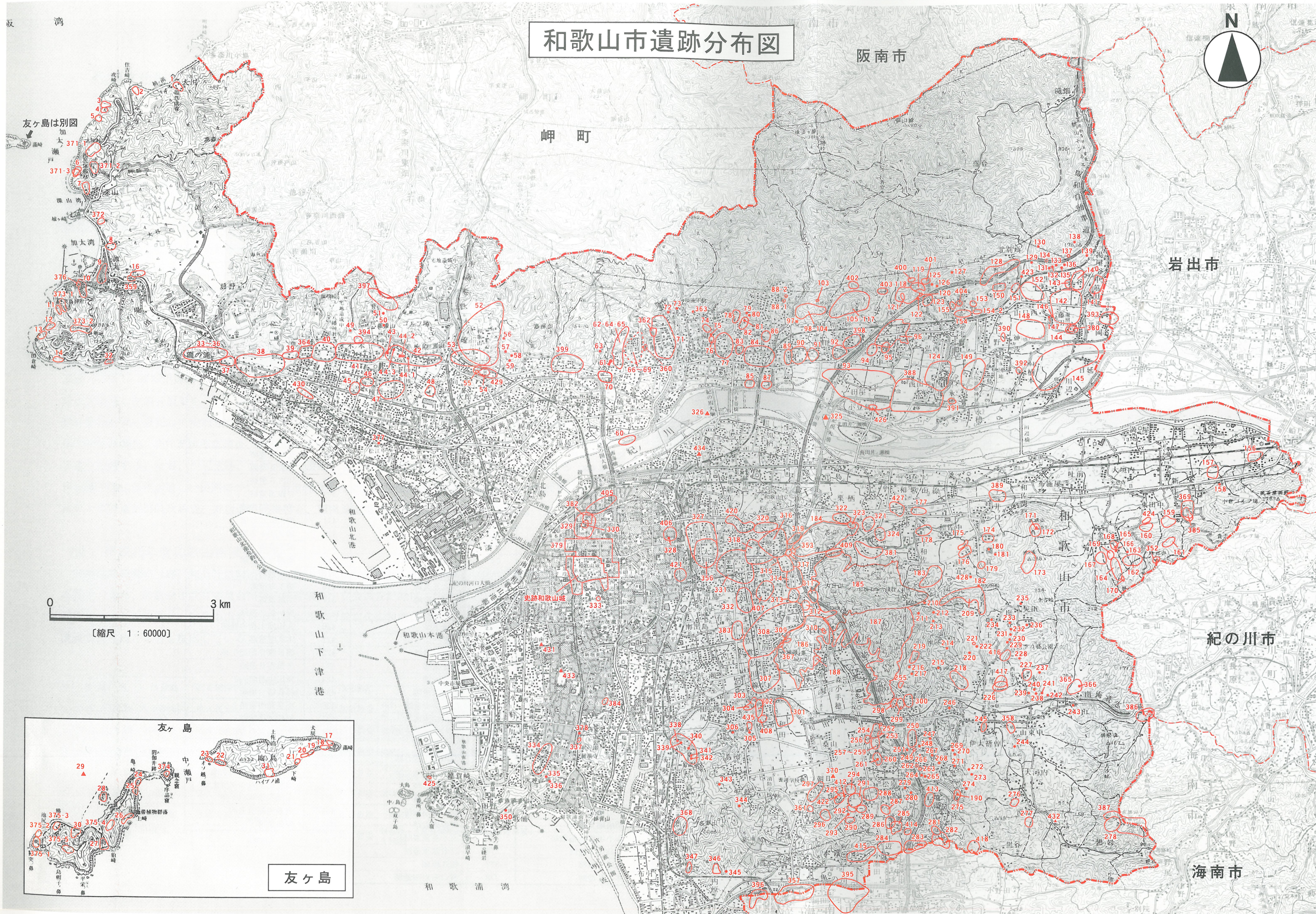
古墳時代の遺跡は、紀ノ川北岸西部において国内唯一の金製勾玉が出土した前方後円墳の車駕之古址古墳、それに先行する帆立貝式と考えられる茶臼山古墳、現状で約40mの大形円墳である釜山古墳、馬冑や馬甲が出土した大谷古墳など渡来系遺物を有する中期の有力古墳や県内では数少ない巨石を用いた横穴式石室をもつ園部円山古墳などの後期古墳も形成される。南岸では和歌山平野南東部の岩橋丘陵に700基を超える岩橋千塚古墳群が形成され、前期末から後期にかけて多数の古墳が築造される。特に後期には玄門部を狭く造る岩橋型横穴式石室を構築し、周辺地域にも影響を与えている。これらは紀ノ川河口の平野部を支配した紀氏集団の奥津城と考えられている。近年調査された大日山35号墳の造り出しからは、翼を広げた鳥形埴輪、両面人物埴輪、胡録形埴輪など全国的にも類をみない特徴的な形象埴輪が出土している。集落遺跡は西庄遺跡、田屋遺跡、西田井遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡、大日山Ⅰ遺跡、秋月遺跡などがある。西庄遺跡は竪穴建物とともに多数の石敷製塩炉が検出され、中期から後期の大规模製塩遺跡として著名である。田屋遺跡では5世

紀中頃の初期カマドをもつ竪穴建物や陶質土器が出土し、集落内に渡来系の人々が存在したと考えられる。鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡では竪穴建物や掘立柱建物などが検出され、岩橋千塚古墳群が存在する岩橋丘陵の西部に位置することから、紀氏集団の居住域の可能性が指摘されている。紀ノ川北岸の和泉山脈南麓の低位段丘上には、高井遺跡、鳥井遺跡、府中遺跡、上黒谷遺跡など広い面積をもつ遺物散布地が多数存在する。須恵器・土師器などが出土するが、実態は不明である。

飛鳥から奈良時代の古代寺院跡には山口廃寺跡、上野廃寺跡、薬勝寺廃寺跡がある。その他、古代瓦出土地に秋月遺跡、太田・黒田遺跡、関戸遺跡がある。上野廃寺跡は発掘調査が行われ、薬師寺式の伽藍配置をもつことが確認されている。上野廃寺跡出土の隅木蓋瓦はパルメット文様を施した類例の少ない優品である。山口廃寺跡は、緑色片岩製塔心礎が残されているが、伽藍配置などは不明である。律令期の遺構が確認された遺跡には、高井遺跡、川辺遺跡、山口遺跡、秋月遺跡、岩橋高柳遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡や鳴神遺跡群からは和同開珎・万年通宝などの古代銭貨や陶硯・土馬といった官衙や古代寺院を想定できる遺物が多く出土している。また、紀ノ川北岸の府中遺跡は調査例は少ないが、その地名などから紀伊国府の可能性が指摘されている。

中世の遺跡としては、紀ノ川北岸に鎌倉時代の館跡が検出された西庄Ⅱ遺跡、多数の石積み井戸が発見された木ノ本Ⅲ遺跡、平安時代から室町時代の集落が確認された西田井遺跡、南岸では鎌倉時代から室町時代の多数の遺構・遺物が確認された太田・黒田遺跡や秋月遺跡、鎌倉時代の建物遺構が検出された奥山田遺跡、多数の漁網用の土鍾類に加え、国産陶器・中国産陶磁器などが出土し、紀ノ川河口付近の外港的性格を併せもつ集落であった可能性も指摘されている関戸遺跡などが挙げられる。当地域は中世末に織田信長・豊臣秀吉の侵攻を受ける。天正5年（1577）の信長の紀州攻めに関係する遺跡と考えられているのが城山遺跡・中野遺跡で、城山遺跡は陣城跡、中野遺跡は『信長公記』に記載のある中野城跡と推定されている。天正13年（1585）に秀吉は根来を焼き討ちにし、雑賀を攻め、紀州を平定する。秀吉が水攻めを行った太田城は、太田・黒田遺跡内の南半部に存在した中世の環濠集落と推定され、出水に残る堤が太田城水攻めに関係する堤の残存部分と考えられる。

紀州を平定した秀吉は、岡山に和歌山城の築城を命じ、弟秀長を藩主としたとされる。慶長5（1600）年には関ヶ原の戦いで功のあった浅野幸長が藩主となり、近世の城下町として出発する。元和5年（1619）には徳川家康の十男頼宣が転封、55万5千石の御三家紀州藩が成立し、城・城下町の整備・拡張が行われた。国史跡である和歌山城跡では、修復工事や整備工事など様々な要因で発掘調査が行われ、徳川時代の二の丸、三の丸に相当する部分では建物、排水施設、坪庭にあった漆喰池、石垣構造などが確認され、当時の状況が解明されつつある。近年では、堀内で御橋廊下の基礎構造を解明し、文献資料、絵図資料と発掘調査成果の検討により、かつて二の丸と西の丸を繋いでいた御橋廊下の復元工事が実施された。また、鷺ノ森遺跡で城下町の発掘調査が行われ、武家屋敷地、町屋の様相が一部判明している。幕末には紀淡海峡周辺に海防のための施設（台場）が多数築かれた。近年調査で石垣や土塁、V字状の石積遺構が確認された雑賀崎台場跡もその一つである。昭和20年（1945）7月9日には和歌山大空襲を受け、旧国宝の和歌山天守閣を失い、市街地をはじめ中心部は焼野原となった。和歌山城跡や市街地中心部を発掘すると、戦災時の焦土層が厚さ数10cmも遺存しているのが確認され、その被害の大きさを物語っている。（大木要）



和歌山市遺跡分布図

阪南市

岬町

岩出市

紀の川市

海南市

和歌山下津港

友ヶ島

遺 跡 名 一 覧

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	報恩講寺遺跡	70	楠見遺跡	154	北野遺跡	245	伊太祈曾神社古墳群	314	鳴神Ⅱ遺跡	379	和歌山城跡
2	大川西方遺跡	71	鳴滝古墳群	154-2	北野Ⅱ遺跡	246	チショ古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	380	山口御殿跡
3	藻江遺跡	72	奥出古墳	155	若宮池遺跡	247～249	城ヶ森古墳群	316	鳴神Ⅳ遺跡	381	岩橋Ⅱ遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	73	有功経塚	156	上三毛遺跡	250	城ヶ森遺跡	317	鳴神貝塚	382	本願寺跡
5	水谷遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	157	下三毛遺跡	251	相坂古墳	318	鳴神Ⅴ遺跡	383	神前Ⅱ遺跡
6	男良の谷遺跡	75	園部古墳	158	小山古墳	252・253	千石山古墳群	319	音浦遺跡	384	高松焼窯跡
7	深山遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	159	寺山古墳群	254	菖蒲谷遺跡	320	鳴神Ⅵ遺跡	385	奥山田古墳群
8	大谷川遺跡	77	有功遺跡	160	東国山古墳群	255	吉礼Ⅲ遺跡	321	岩橋遺跡	386	大池遺跡
9	加太遺跡	78	池田遺跡	161	宮山古墳群	256	千石山遺跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	387	大旗山城跡
10	加太南遺跡	79	有功古墳	162	小倉古墳群	257～259	井戸古墳群	323	栗栖Ⅱ遺跡	388	西田井遺跡
11	平の谷遺跡	80	大同寺墳墓	163	小倉9号墳	260	馬場古墳群	324	高橋神社遺跡	389	井ノ口遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	81	大同寺古墳	164	明楽古墳群	261	馬場遺跡	325	紀の川銅鐸出土地	390	神波遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	82	大同寺遺跡	165	小倉神社1号墳	262～265	東池古墳群	326	有本銅鐸出土地	391	永穂遺跡
14	船出遺跡	83	法然寺遺跡	166	小倉神社2号墳	266	吉里銅鐸出土地	327	太田・黒田遺跡	392	楠本遺跡
16	加太駅北方遺跡	84	六十谷遺跡	167	モント古墳群	267	小山古墳	328	吉田窯跡	393	吉田遺跡
17	藻崎北浜遺跡	85	和田遺跡	168	小倉神社境内遺跡	268	奥須佐窯跡	329	鷲ノ森遺跡	394	城山遺跡
18	藻崎南浜遺跡	86	西辻遺跡	169	金谷遺跡	269	円満寺古墳	330	鷲ノ森窯跡	395	岡村遺跡
19	藻崎西浜遺跡	87	川口遺跡	170	奥池遺跡	270	峯古墳	331	秋月遺跡	396	室山古墳群
20	神前東浜遺跡	88	六十谷古墳群	171	高積山遺跡	271	西光寺窯跡	332	津秦遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
21	神前西浜遺跡	89	直川遺跡	172	薬徳寺跡	272	吉里1号窯跡	333	岡の里古墳	398	府中Ⅳ遺跡
22	屋敷浜遺跡	90	直川廃寺跡（明光寺跡）	173	城ヶ峯城跡	273	吉里2号窯跡	334	関戸遺跡	399	平井遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	91	高井遺跡	174	棚宜Ⅰ遺跡	274	頭陀寺古墳	335	関戸古墳	400	深谷池北遺跡
24	一谷色遺跡	92	鳥井遺跡	175	棚宜Ⅱ遺跡	275	頭陀寺遺跡	336	天神山古墳	401	名草池北遺跡
25	柏の浜遺跡	93	田屋遺跡	176	棚宜貝塚	276	大將軍窯跡	337	秋葉山貝塚	402	湯谷池西遺跡
26	深蛇池遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	177	河南中学校北方遺跡	277	有ノ木窯跡	338	アンドの鼻古墳	403	平野池南遺跡
27	垂水遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	178	和佐中遺跡	278	宝光寺跡	339～342	三田古墳群	404	北野池北遺跡
28	神島遺跡	96	府中遺跡	179	和佐寺跡	279・280	松原古墳群	343	吉原古墳	405	山吹丁遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	180・181	棚宜古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	344	広原古墳	406	友田町遺跡
30	野奈浦遺跡	98	北山1号墳	182	和坂古墳	282	滝ヶ峯遺跡	345	内原古墳	407	津秦Ⅱ遺跡
31	ハイブの浦遺跡	99	北山2号墳	183	和佐古墳群	283	薬勝寺南山古墳群	346	内原遺跡	408	和田Ⅱ遺跡
32	浜遺跡	100	北山3号墳	184	花山古墳群	284	仁井辺遺跡	347	名草貝塚	409	岩橋Ⅲ遺跡
33～35	磯の浦古墳群	101	北山4号墳	185	岩橋千塚古墳群	285	薬勝寺跡	350	高津子山古墳	410	前山B226号墳
37	磯脇遺跡	102	北山5号墳	186	井辺前山古墳群	286	薬勝寺遺跡	352	金谷廃寺跡	411	前山B227号墳
38	西庄遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	187	寺内古墳群	287	松原Ⅰ遺跡	353	興徳寺跡	412	城ノ前1号墳
39	平の下遺跡	104	北山6号墳	188	森小手穂遺跡	288	松原Ⅱ遺跡	356	太田城跡	413	境原遺跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	105～117	直川八幡山古墳群	189	寺内ナイフ形石器出土地	289	薬師谷遺跡	357	山崎山古墳群	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	118	八王寺山古墳群	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	290	江南遺跡	358	山東中遺跡	415	本渡遺跡
42	木ノ本Ⅲ遺跡	119	橘谷Ⅰ遺跡	209	山東古墳群	291	曾垣田遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	416	明王寺遺跡
43	木ノ本経塚	120	橘谷Ⅱ遺跡	210	山東16号墳	292	曾垣田Ⅱ遺跡	360	雨が谷遺跡	417	平尾遺跡
44-1	釜山古墳	121	橘谷Ⅲ遺跡	211	山東17号墳	293	曾垣田古墳	361	冬野遺跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
44-2	車駕之古址古墳	122	橘谷銅鐸出土地	212	山東18号墳	294	城の前Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	420	太田城水攻め提跡
44-3	茶臼山古墳	123	弘西遺跡	213	山東19号墳	295	城の前Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	421	木広町遺跡
45	木本小学校Ⅰ遺跡	124	北田井遺跡	214	山東20号墳	296	大池遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	422	朝日蔵骨器出土地
46	木本小学校Ⅱ遺跡	125～127	別所古墳群	215	山東21号墳	297	赤津古墳群	365	永山遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
47	榎原遺跡	128	上野古墳群	218	若林古墳群	298	吉礼貝塚	366	永山古墳	424	東田中遺跡
48	中野遺跡	129～139	山口古墳群	219	吉礼砂羅谷窯跡	299	西吉礼遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	425	雑賀崎台場跡
49	城山古墳	140	山口廃寺跡	220～222	平尾古墳群	300	東吉礼遺跡	368	紀三井寺遺跡	426	小豆島西遺跡
50	権現山1号墳	141	中筋日延遺跡	226	楠古墳群	301	和田遺跡	369	奥山田遺跡	427	岩橋高柳遺跡
51	権現山2号墳	142	山口遺跡	227	足守神社古墳群	302	和田岩坪遺跡	370	朝日石槍出土地	428	和坂南垣内古墳群
52	高芝遺跡	143	谷遺跡	228	赤山古墳	303	和田古墳群	371	深山要塞跡	429	栄谷遺跡
53	高芝古墳群	144	里遺跡	229～233	塩谷古墳群	304	和田4号墳	371-1	深山第1砲台跡	430	西庄Ⅲ遺跡
54	栄谷貝塚	145	川辺遺跡	234	新出古墳	305	竈山神社古墳	371-2	深山第2砲台跡	431	砂山南土師器出土地
55	貴志古墳	146	藤田古墳	235	明王寺経塚	306	坂田地蔵山古墳	371-3	男良砲台跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
56	川原崎遺跡	147	碓古墳	236	矢田古墳	307	神前遺跡	372	加太砲台跡	433	今福尖頭器出土地
57～59	川原崎古墳群	148	藤田遺跡	237	北池古墳	308	井辺遺跡	373-1・2	田倉崎砲台跡	434	有本土器出土地
60	国の本遺跡	149	宇田森遺跡	238～240	殿山古墳群	309	岡崎縄文遺跡	374	虎島砲台跡	435	坂田遺跡
61	大谷古墳	150	上野廃寺跡（紀井薬師寺跡）	241	土井山古墳	310	森小手穂埴輪窯跡	375	友ヶ島要塞跡		
62・64・65	晒山古墳群	151	上野遺跡	242	丸山古墳	311	大日山Ⅰ遺跡	376	行者堂東遺跡		
63	慶円寺裏山古墳	152	上黒谷遺跡	243	高岡古墳	312	井辺Ⅰ遺跡	377	松江経塚		
66～69	雨が谷古墳群	153	北野窯跡	244	桜山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	378	狛口石岩陰遺跡		

2 埋蔵文化財発掘調査事業

(1) 平成20年度の概要

平成20年度の文化財保護法第93・94条に基づく発掘の届出件数は169件、通知件数は23件である。届出・通知が多いのは、紀ノ川北岸では木ノ本Ⅰ遺跡（6件）、榎原遺跡（11件）、川辺遺跡（9件）、山口遺跡（6件）、南岸では井辺遺跡（10件）、太田・黒田遺跡（15件）、神前遺跡（10件）、曾垣田遺跡（11件）、薬師谷遺跡（13件）、和歌山城跡（10件）などである。開発は市街地縁辺部での宅地造成と造成後の個人住宅建設が活発化している状況にある。市街地では店舗建設に伴う届出などがある。公共事業としては、公共下水管敷設事業が市内各地で行われており、その傾向は今後も継続することが予想される。

平成20年度に和歌山市教育委員会に關係して実施した確認調査・立会調査・発掘調査は、以下の(2)の項の一覧に示した通り110件である。これらのなかには平成19年度に届出・通知のあった案件の対応も含まれている。紀ノ川北岸では宇田森遺跡（6件）、鳥井遺跡（9件）、有功遺跡（5件）、川辺遺跡（8件）、南岸では井辺遺跡（5件）、神前遺跡（4件）、太田・黒田遺跡（7件）、薬師谷遺跡（11件）、曾垣田遺跡（4件）などが多い。これらのうち確認調査を中心に立会調査で遺構・遺物を確認した調査概要を(3)の項で記述する。また、国庫補助事業として、財団法人和歌山市都市整備公社に委託して実施した5件の発掘調査事業（川辺遺跡第9次確認調査、太田・黒田遺跡第60次確認調査、鳥井遺跡確認調査、神前遺跡第5次確認調査、釜山古墳確認調査）の概要は(4)の項に記載する。なお、川辺遺跡、太田・黒田遺跡、有功遺跡、田屋遺跡については、設計変更等が困難で現状保存が難しい範囲について、事業者負担による本発掘調査（川辺遺跡第10～12次調査、太田・黒田遺跡第61次調査、有功遺跡発掘調査、田屋遺跡第2次発掘調査）が実施された。（大木）

(2) 平成20年度和歌山市調査一覧

実施機関の欄の(財)和公社は財団法人和歌山市都市整備公社、和市教委は和歌山市教育委員会を指す。また、和歌山市教育委員会関係の確認調査・立会調査記録は1件ごとに「発掘調査・立会調査カード」を作成し、和歌山市教育委員会生涯学習部文化振興課に備え、一覧表とともに県教育委員会にも同じものを提出している。（大木）

No	遺 跡 名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調 査 内 容	備 考
				内 容	調査面積(m ²)			
1	六十谷遺跡	六十谷357-2	個人住宅	文第24号(340) 浄化槽立会	080401 2.64	和市教委	弥生～鎌倉時代ビット1基検出。弥生土器・瓦器を含む包含層を確認。	本書(3)に掲載
2	井 辺 Ⅱ 遺 跡	鳴神47-2	宅地造成	文第24号(343) 確認調査	080404 12.00	和市教委	遺構なし。瓦器・土師質等微片少量出土。	
3	太田・黒田遺跡	太田489-4	集合住宅	文第24号(323) 工事立会	080407 18.00	和市教委	遺構なし。瓦器・土師質等微片少量出土。	
4	西 庄 遺 跡	西庄409-1他	店舗建設	文第24号(250) 工事立会	080408 5.30	和市教委	遺構なし。北から南へ傾斜する鎌倉時代の堆積層を確認。	
5	宇田森遺跡	宇田森76-37	個人住宅	文第24号(320) 浄化槽立会	080411 3.75	和市教委	遺構なし。土師質等微片少量出土。	
6	山 口 遺 跡	谷25-1他	宅地造成	文第24号(295) 確認調査	080411 17.50	和市教委	土師器細片を含む稀薄な堆積層を確認。	
7	川 辺 遺 跡	川辺32、33、34	宅地造成	文第24号(90) 確認調査	080414 27.60	和市教委	須恵器・土師器細片を含む稀薄な堆積層を確認。	

No	遺 跡 名	所 在 地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調 査 内 容	備 考
				内 容	調査面積(m ²)			
8	秋 月 遺 跡	太田22-6	個人住宅	文第24号(314) 工事立会	080423 1.00	和市委	遺構・遺物なし。	
9	宇田森遺跡	宇田森9-21	個人住宅	文第8号(335) 浄化槽立会	080424 2.52	和市委	遺構なし。鎌倉時代の包含層を確認。	
10	川 辺 遺 跡	里6他	店舗建設	文第85号(3) 確認調査	080501～0529 90.00	(財)和公社	弥生～中世の土坑・溝等検出。	本 書 (4) に掲載
11	鳴神Ⅳ遺跡	鳴神929-1	集合住宅	文第47号(21) 工事立会	080509 10.35	和市委	遺構・遺物なし。	
12	宇田森遺跡	宇田森17-1 他	個人住宅	文第24号(304) 工事立会	080512 11.00	和市委	中世の落ち込み地形を確認。羽釜、焼 土出土。	本 書 (3) に掲載
13	井 辺 遺 跡	井辺70	個人住宅	文第24号(332) 浄化槽立会	080514 4.60	和市委	遺構・遺物なし。	
14	曾 垣 田 遺 跡	朝日96-1	個人住宅	文第24号(113) 浄化槽立会	080519 3.75	和市委	遺構なし。土師質等微片少量出土。	
15	北田井遺跡	北97-15	個人住宅	文第24号(293) 浄化槽立会	080520 4.20	和市委	遺構・遺物なし。	
16	鷺ノ森遺跡	ト半町27-1	個人住宅	文第47号(51) 確認調査	080521 10.00	和市委	遺構・遺物なし。	
17	太田・黒田遺跡	黒田75-1	ホテル建 設	文第47号(10) 確認調査	080522～0606 40.00	(財)和公社	弥生～奈良時代の遺構・遺物検出。	本 書 (4) に掲載
18	鳥 井 遺 跡	直川668-2	個人住宅	文第24号(274) 浄化槽立会	080522 2.64	和市委	遺構・遺物なし。	
19	鳥 井 遺 跡	直川668-14	個人住宅	文第24号(306) 浄化槽立会	080526 3.25	和市委	遺構なし。土師器、瓦器を微量含む希 薄な包含層を確認。	
20	川 辺 遺 跡	川辺73、74	擁壁工事	文第47号(41) 工事立会	080527 33.60	和市委	奈良時代の土坑、古墳～奈良時代の土 坑、落ち込みを検出。	
21	鳥 井 遺 跡	府中20-1他	擁壁工事・ 廃棄物撤去	文第47号(40) 確認調査	080527 11.84	和市委	古墳～奈良時代の土坑1基と包含層を 確認。土坑より土師器7点出土。	本 書 (3) に掲載
22	鳥 井 遺 跡	直川668-15	個人住宅	文第24号(307) 浄化槽立会	080606 2.94	和市委	遺構・遺物なし。旧耕作土までの掘削。	
23	西田井遺跡	西田井353- 1他	集合住宅	文第47号(39) 確認調査	080616 27.96	和市委	遺構なし。奈良・平安時代と鎌倉時代 の2時期の包含層を確認。	
24	太田・黒田遺跡	太田377-3	個人住宅	文第47号(53) 工事立会	080617 76.00	和市委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
25	鳥 井 遺 跡	直川668-7	個人住宅	文第24号(305) 浄化槽立会	080617 3.13	和市委	遺構・遺物なし。	
26	平の下遺跡	西庄446番1 他	宅地造成	文第24号(342) 確認調査	080630 15.30	和市委	遺構なし。遺跡南隣接地で鎌倉時代の 稀薄な包含層を確認。	
27	鳥 井 遺 跡	直川650-7	個人住宅	文第47号(118) 浄化槽立会	080708 3.36	和市委	鎌倉時代とみられる土坑3基検出。土 師器少量出土。	
28	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本1048 番3	個人住宅	文第24号(341) 浄化槽立会	080709 4.19	和市委	遺構・遺物なし。	
29	太田城水攻 め堤跡	黒田・出水 地内	公共下水 管	文第56号(19) 工事立会	080711～0722 28.48	和市委	掘削壁面で大溝、石垣検出。遺物がな く時期不明確。	本 書 (3) に掲載
30	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本1037- 1他	個人住宅	文第47号(60) 工事立会	080718 5.00	和市委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
31	太田・黒田遺跡	黒田75-1	ホテル建 設	文第47号(10) 本発掘調査	080722～1111 1029.00	(財)和公社	弥生時代中期住居跡・井戸等検出。弥 生～鎌倉時代の遺物多数出土。	
32	宇田森遺跡	宇田森36-3 5	個人住宅	文第24号(312) 浄化槽立会	080723 2.86	和市委	時期不明の柱穴2基検出。遺物なし。	
33	川 辺 遺 跡	川辺174番1	分譲住宅	文第47号(24) 工事立会	080725 17.30	和市委	遺構なし。推定古墳時代包含層を確認。 須恵器、土師器、土人形出土。	本 書 (3) に掲載
34	和歌山城跡	六番丁24	ガス管理 設	文第47号(81) 工事立会	080730 1.40	和市委	遺構・遺物なし。	
35	榎 原 遺 跡	榎原3-2他	宅地造成	文第47号(70) 確認調査	080805 75.38	和市委	土坑3基（1基は江戸時代前期）検出。 須恵器、瓦器、土師器、近世陶磁器出土。	
36	車駕之古址 古墳	木ノ本地内	公共下水 管	文第92号(40) 工事立会	080805～0820 31.44	和市委	遺構なし。瓦器、土師器を包含する土 層確認。	
37	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本1124 他	宅地造成	文第47号(100) 確認調査	080807 36.75	和市委	遺構なし。瓦器、土師器を包含する土 層確認。	
38	和 田 遺 跡	和田542-1	擁壁工事	文第47号(26) 工事立会	080811 10.00	和市委	遺構・遺物なし。	
39	井 辺 遺 跡	井辺88-1	集合住宅	文第47号(119) 確認調査	080812 3.50	和市委	遺構なし。土師質等微片少量出土。	
40	神 前 遺 跡	神前626-1	擁壁工事	文第47号(74) 工事立会	080818 16.00	和市委	遺構なし。土師質等微片少量出土。	
41	鳥 井 遺 跡	府中20-1	社会福祉 施設	文第47号(105) 確認調査	080821～0911 40.00	(財)和公社	平安・鎌倉時代遺構面確認。須恵器、黒色土器、瓦 器、輸入陶磁器出土。浄設計変更により遺構面保護。	本 書 (4) に掲載

No	遺 跡 名	所 在 地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調 査 内 容	備 考
				内 容	調査面積(m ²)			
42	川 辺 遺 跡	川辺237、246-1	店舗建設	文第85号(12) 本発掘調査	080825～1104 409.70	(財)和公社	弥生時代住居跡、弥生時代土坑、溝検出。縄文時代後期土器出土。(10次調査)	
43	木ノ本Ⅰ遺跡	西庄117-15	個人住宅	文第47号(79) 工事立会	080825 2.80	和市委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
44	神 前 遺 跡	神前563-1	集合住宅	文第47号(85) 確認調査	080910～1029 50.00	(財)和公社	弥生～鎌倉時代の溝・ビット等検出。弥生土器、土師器等出土。	本 書 (4) に掲載
45	花 山 古 墳 群	岩橋1646-75	個人住宅	文第47号(84) 浄化槽立会	080924 3.75	和市委	遺構・遺物なし。	
46	鳥 井 遺 跡	直川651-7	個人住宅	文第47号(137) 浄化槽立会	081002 3.25	和市委	土坑より近世染付2点出土。中世包含層の堆積を一部確認。	
47	薬師谷遺跡	朝日945-1	個人住宅	文第47号(152) 確認調査	081003 3.75	和市委	遺構・遺物なし。	
48	三 田 古 墳 群	田尻775-23	個人住宅	文第47号(177) 工事立会	081006 7.00	和市委	遺構なし。土師質等微片少量出土。	
49	薬師谷遺跡	朝日929-3	個人住宅	文第47号(151) 確認調査	081010 3.75	和市委	遺構なし。土師質等少量出土。	
50	井 辺 遺 跡	井辺27-13	個人住宅	文第47号(136) 確認調査	081010 3.90	和市委	遺構なし。土師質等微片少量出土。	
51	山 吹 丁 遺 跡	西釘貫丁2-6-6	個人住宅	文第47号(188) 工事立会	081014 10.00	和市委	遺構・遺物なし。	
52	宇田森遺跡	宇田森13	分譲住宅	文第47号(189) 確認調査	081016 17.72	和市委	落ち込み状地形2ヵ所(奈良～平安?、鎌倉時代頃)検出。瓦器、土師器片出土。	本 書 (3) に掲載
53	和歌山城跡	一番丁14	停留所移設	文第47号(224) 工事立会	081017 2.70	和市委	遺構・遺物なし。	
54	木ノ本Ⅰ遺跡	西庄84-15	個人住宅	文第47号(43) 工事立会	081021 2.60	和市委	遺構なし。土師器1点のみ出土。	
55	川 辺 遺 跡	里5-1他	店舗建設	文第85号(12) 本発掘調査	081028～090204 1187.10	(財)和公社	弥生時代中期堅穴住居1棟、奈良時代の溝多数、平安時代建物検出。(11次調査)	
56	平の下遺跡	西庄490-1他	宅地造成	文第47号(156) 確認調査	081027 16.97	和市委	遺構なし。瓦器・土師器を包含する堆積を確認。	本 書 (3) に掲載
57	神 前 遺 跡	神前626-3	個人住宅	文第47号(144) 浄化槽立会	081031 2.99	和市委	遺構・遺物なし。	
58	高 井 遺 跡	直川1233番9他	分譲住宅	文第24号(318) 確認調査	081107 51.00	和市委	遺構・遺物なし。	
59	宇田森遺跡	宇田森17-1他	個人住宅	文第47号(164) 浄化槽立会	081110 4.05	和市委	遺構なし。床土相当層より瓦器1点出土。	
60	薬師谷遺跡	朝日947-8	個人住宅	文第47号(222) 浄化槽立会	081112 3.25	和市委	遺構・遺物なし。	
61	津 秦 遺 跡	有家144	個人住宅	文第47号(135) 浄化槽立会	081113 3.75	和市委	遺構・遺物なし。	
62	楠 見 遺 跡	大谷地内	公共下水管	文第56号(23) 工事立会	081113～1201 92.90	和市委	遺構なし。土師器、中世土師器出土。	
63	有 功 遺 跡	園部1544他	ガス管理設	文第47号(196) 工事立会	081115 3.50	和市委	遺構なし。土師器少量出土。	
64	有 功 遺 跡	六十谷1049-1他	集合住宅	文第47号(194) 確認調査	081119 21.71	和市委	中世遺構、弥生時代堆積(落ち込み)確認。	本 書 (3) に掲載
65	有 功 遺 跡	六十谷1049-1他	集合住宅	文第85号(21) 本発掘調査	081125～1219 191.41	和市委	弥生時代落ち込み、中世井戸、溝、建物検出。弥生前期土器、土製振り下げ、白磁、中世土師器等出土。	
66	岩 橋 遺 跡	岩橋1034-1	宅地造成	文第47号(168) 確認調査	081125 100.00	和市委	遺構なし。土師質、陶磁器等細片少量出土。	
67	三 田 古 墳 群	田尻818-31	個人住宅	文第47号(211) 工事立会	081127 8.50	和市委	遺構・遺物なし。	
68	木本小学校Ⅰ遺跡	木ノ本120-5他	店舗建設	文第47号(262) 工事立会	081201 3.00	和市委	遺構・遺物なし。	
69	神 前 遺 跡	神前573-8	個人住宅	文第47号(221) 浄化槽立会	081201 3.75	和市委	遺構・遺物なし。	
70	井 辺 遺 跡	津秦151	個人住宅	文第47号(131) 浄化槽立会	081204 3.25	和市委	遺構・遺物なし。	
71	薬師谷遺跡	朝日945-1	個人住宅	文第47号(153) 確認調査	081209 3.75	和市委	遺構なし。土師質細片少量出土。	
72	薬師谷遺跡	朝日929-3	個人住宅	文第47号(150) 確認調査	081210 3.75	和市委	遺構・遺物なし。	
73	薬師谷遺跡	朝日945-11	個人住宅	文第47号(261) 浄化槽立会	081210 3.75	和市委	遺構・遺物なし。	
74	田 屋 遺 跡	直川326-7	複合施設	文第56号(45) 確認調査	081211 19.00	和市委	古墳時代の溝等検出。土師器片等出土。	
75	井 辺 遺 跡	井辺131-12	個人住宅	文第47号(230) 浄化槽立会	081218 3.75	和市委	遺構なし。土師質細片少量出土。	

No	遺 跡 名	所 在 地	調査経緯	県指示文書番号 内 容	工事立会 調査面積(m ²)	実施機関	調 査 内 容	備 考
76	神前Ⅱ遺跡	有家363-7	ガス管埋設	文第47号(192)	081218	和市委	遺構・遺物なし。	
77	神前Ⅱ遺跡	神前163-1	ガス管埋設	文第47号(226)	081218	和市委	遺構・遺物なし。	
78	中筋日延遺跡	中筋日延338-1	個人住宅	文第47号(193)	081222	和市委	遺構なし。包含層より土師器2点出土。	
79	葉師谷遺跡	朝日929-22	個人住宅	文第47号(200)	081225	和市委	遺構・遺物なし。	
80	山口遺跡	谷84-7	個人住宅	文第47号(199)	090119	和市委	遺構なし。土師器細片をわずかに含む堆積層を確認。	
81	葉師谷遺跡	朝日945-10	個人住宅	文第47号(191)	090120	和市委	遺構なし。黒色土器、土師器の包含層を確認。叩石出土。	
82	葉師谷遺跡	朝日945-15他	個人住宅	文第47号(171)	090122	和市委	遺構なし。瓦器・土師器を包含する堆積を確認。	
83	山口遺跡	谷84-8	個人住宅	文第47号(238)	090126	和市委	遺構・遺物なし。下層は砂礫層の厚い堆積。	
84	曾垣田遺跡	朝日945-3	個人住宅	文第47号(231)	090130	和市委	遺構なし。土師質細片少量出土。	
85	太田・黒田遺跡	黒田71	ガス管撤去	文第47号(279)	090130	和市委	遺構・遺物なし。	
86	田屋遺跡	直川326-7	複合施設	文第56号(45)	090212～0318	(財)和公社	古墳～平安時代の住居跡・溝検出。土師器、須恵器、黒色土器出土。	
87	川辺遺跡	川辺229-4	店舗建設	文第85号(26)	090212～0224	和市委	弥生時代区画溝、奈良時代大溝検出。弥生土器、須恵器、土師器、瓦器出土。(第12次調査)	
88	曾垣田遺跡	朝日955-5	個人住宅	文第47号(260)	090213	和市委	遺構・遺物なし。	
89	山口遺跡	谷99-2	個人住宅	文第47号(304)	090216	和市委	遺構・遺物なし。	
90	高井遺跡	直川1218他	宅地造成	文第47号(284)	090218	和市委	奈良～中世の土坑、ピット。須恵器、土師器を多く含む落ち込みを検出。設計変更により遺構面保護。	本書(3)に掲載
91	太田・黒田遺跡	黒田108-1	専修学校	文第47号(326)	090219	和市委	遺構なし。土師質、黒色土器細片少量出土。	
92	鳴神Ⅵ遺跡	秋月186-1	集合住宅	文第47号(303)	090220	和市委	遺構・遺物なし。	
93	井辺前山古墳群	井辺229-5	埋設物調査	文第56号(77)	090224	和市委	遺構・遺物なし。	
94	六十谷遺跡	六十谷780-2他	個人住宅	文第47号(338)	090228	和市委	土坑、柱穴状の遺構検出。弥生土器？少量出土。	
95	上黒谷遺跡	上黒谷103	通信基地局	文第47号(311)	090302	和市委	遺構なし。斜面に堆積する瓦、土師器、須恵器包含層を確認。	本書(3)に掲載
96	有功遺跡	六十谷1047-1	個人住宅	文第47号(354)	090303	和市委	遺構なし。中世の稀薄な包含層を確認。	
97	有功遺跡	園部1522-12	個人住宅	文第47号(315)	090305	和市委	遺構・遺物なし。下層は砂礫堆積層。	
98	釜山古墳	梅原299-1他	遺構確認	文第110号(17)	090309～0331	(財)和公社	周濠外側の外堤葺石を検出。埴輪、瓦器、土師器出土。	本書(4)に掲載
99	花山古墳群	鳴神363-6	個人住宅	文第47号(295)	090309	和市委	遺構・遺物なし。	
100	中野遺跡	中野51-7	集合住宅	文第47号(372)	090310	和市委	近世以降の土坑検出。フィゴ片出土。	
101	中野遺跡	中野51-7	擁壁工事	文第47号(373)	090311	和市委	近世以降の土坑1基検出。かつては沼状地形か。	
102	葉師谷遺跡	朝日929-21	個人住宅	文第47号(239)	090311	和市委	遺構・遺物なし。	
103	曾垣田遺跡	朝日945-1	個人住宅	文第47号(263)	090312	和市委	遺構なし。土師質細片少量出土。	
104	太田・黒田遺跡	太田430-2	事務所	文第47号(344)	090316	和市委	遺構なし。土師質細片少量出土。	
105	川辺遺跡	川辺260-1	個人住宅	文第47号(255)	090317	和市委	中近世の土坑状遺構検出。床土直下に安定したベース層を確認。	
106	曾垣田遺跡	朝日955-2	個人住宅	文第47号(386)	090318	和市委	遺構・遺物なし。	
107	鳥井遺跡	直川680	集合住宅	文第24号(221)	090323	和市委	遺構・遺物なし。自然堆積のみ。	
108	鳴神Ⅵ遺跡	鳴神916-8	個人住宅	文第47号(324)	090323	和市委	遺構・遺物なし。	
109	本渡遺跡	本渡893	個人住宅	文第47号(357)	090324	和市委	遺構・遺物なし。	
110	本渡遺跡	本渡893	個人住宅	文第47号(371)	090327	和市委	届出に基づき立会調査予定が、設計変更により、急遽、確認調査実施。土坑2基、溝検出。	本書(3)に掲載

(3) 和歌山市教育委員会実施の確認・立会調査概要

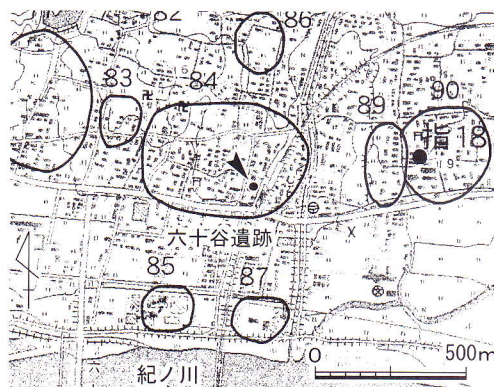
①六十谷遺跡（調査一覧1）

〔経緯〕 個人住宅の浄化槽設置に伴う立会調査

〔場所〕 和歌山市六十谷357-2

〔面積〕 2.64㎡（敷地面積 112.81㎡）

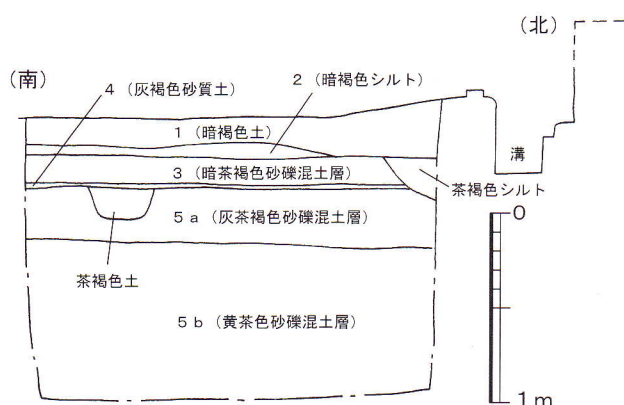
〔概要〕 遺跡推定範囲の南東部に位置する。1層は表土でレンガ・プラスチック等を含む。2層は暗褐色シルトで整地前の表土となる可能性がある。3層の暗茶褐色砂礫混じり土層が遺物包含層で弥生土器9点、瓦器1点を含む中世以降の堆積層である。3層下面に4層として薄い灰褐色砂質土がみられ、4層下面が遺構面で、西壁のやや南寄りの位置にピット状の落ち込みが確認された。埋土は3層よりも色調の薄い茶褐色土層である。機械掘削時には未確認であり、平面プランは確認できなかったが、遺構面での直径は約35cm、深さ17cmのピットになる公算が高い。埋土に遺物は包含されてなく、時期は不明である。5層は砂礫混じりの堆積土で当初、無遺物のベース層と考えていたが、灰茶褐色を帯びた5a層に土器の微細片が確認され遺物包含層と判明したため、黄茶色砂礫混じり土層の5b層がベース層とみなされた。第5図は包含層出土の弥生土器で、1は壺胴部で直線文と波状文が施され、2は壺の垂下口縁部で凹線文が施される。前記のように、3層は中世以降の堆積であるが、包含される遺物の比率・残存度よりみて、周辺に弥生時代の遺構が展開している可能性が強く感じられた。（前田敬彦）



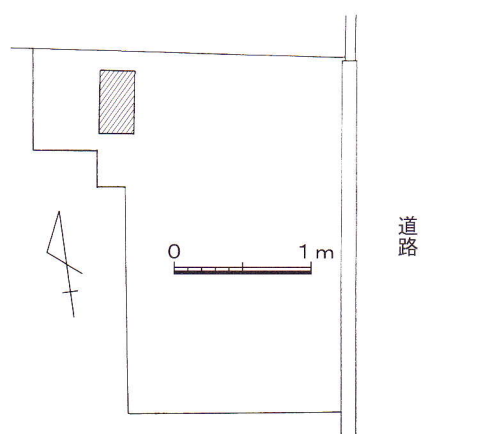
第1図 位置図



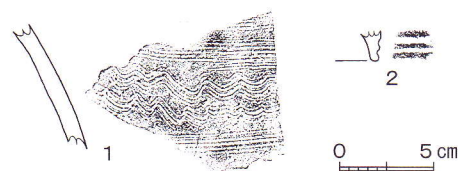
第2図 調査対象地



第4図 西壁土層図



第3図 調査場所



第5図 遺物実測図

②宇田森遺跡（調査一覧12）

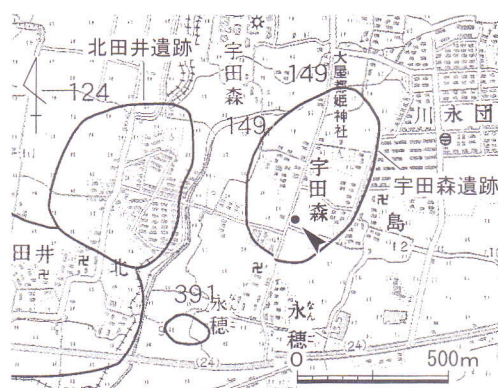
〔経緯〕 個人住宅の擁壁工事に伴う立会調査

〔場所〕 和歌山市宇田森17番1ほか

〔面積〕 11.00㎡（敷地面積 1118.00㎡）

〔概要〕 対象地は遺跡範囲の南東部に位置する。深掘される擁壁部分の立会調査で中世期の落ち込みを確認した。基本層序は1層が耕作土、2～4層は茶褐色系シルト、5層は灰黄色系シルトで、遺構検出面は2層下面である。また5b層から土師器片1点が確認されることから、5層も希薄な包含層と判断され、工事掘削深度内では無遺物のベース層は確認されない。落ち込み（4層）は、東側隣地のブロック塀より西へ6.0mの位置に肩があり、さらに西へ幅5.6mの範囲で確認される。落ち込みの東端では幅約1.0mの範囲で深さが30cm以上となり、炭・焼土塊を含んでいる（4b層）。上位の深さ20cm程度の浅く幅広い落ち込みと下位の落ち込みの東肩が共通し、ともに焼土塊を含むことから、上位を土坑1上層、深い部分を土坑1下層としたが、掘削幅が1mと狭く、遺構の展開を確認できず、厳密に一連の遺構かどうかは確定できなかった。土坑1上層より土釜（第5図）・瓦器片が出土、土坑1下層より土師器片数点が出土した。

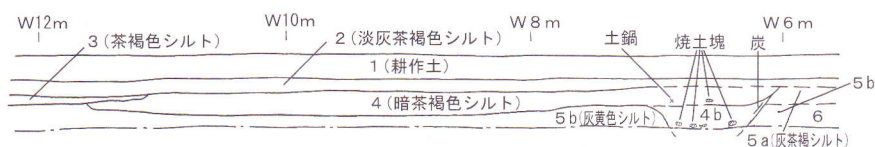
中世と判断される遺構は、耕作土表面から27～32cmの浅いレベルでの検出であり、今後、周辺の開発には留意する必要がある。また、土坑内の焼土塊・炭の存在より、周辺で鍛冶関係の遺構・遺物が検出される可能性も想定される。（前田）



第1図 位置図



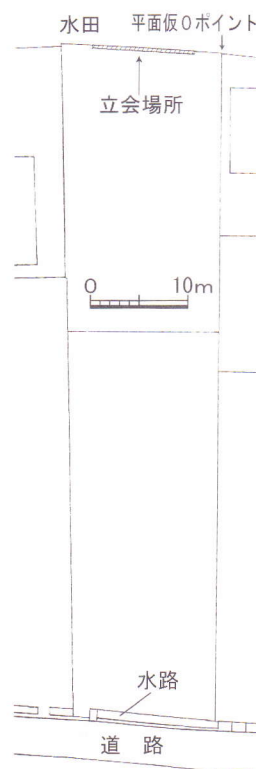
第2図 調査対象地



第4図 北壁土層図



第5図 遺物実測図



第3図 調査場所

③鳥井遺跡（調査一覧21）

〔経緯〕擁壁工事・廃棄物除去に伴う確認調査

〔場所〕和歌山市府中字高井田20-1、22-1、22-3

〔面積〕11.84㎡（敷地面積 2065.60㎡）

〔概要〕対象地は遺跡推定範囲の東端で、敷地西端に1区を設定し、事業者の協力により東側に2区、南西端に3区を設定した。調査面積は1区2.75㎡（2.5m×1.1m）、2区6.75㎡（1.8m×3.75m）、3区2.34㎡（0.9m×2.6m）である。

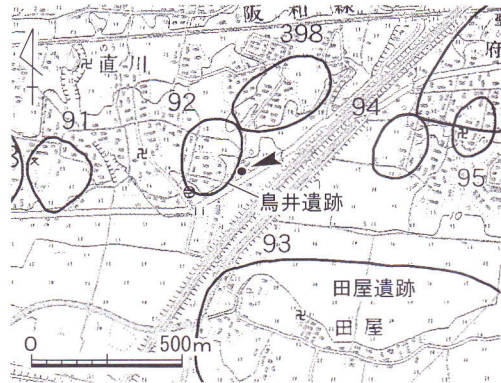
1区 厚さ70～80cmの盛土の下に旧耕作土（1層）があり、2・3層は耕作関係とみられる。4・5層の灰色系粘土から遺構・遺物は確認されず、6層は灰色砂礫層で湧水がみられた。

2区 現況地表は1区より約40cm低い。厚さ1.5mもの盛土があり、その下に旧耕作土（1層）があり、黄茶色シルト（3層）下に遺物包含層（4層）が確認され、4層下面から形成される土坑状の落ち込み（SK1）が確認できた。

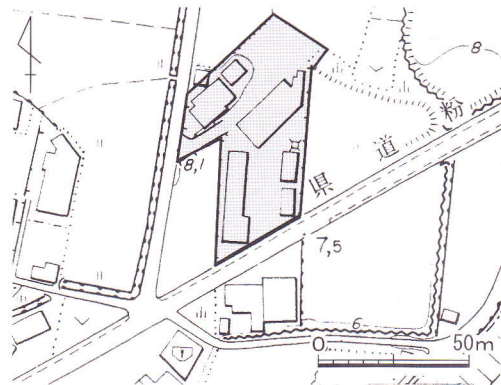
3区 擁壁近接地で確認調査を行ったが、現況地盤から1.2m下まで擁壁設置に伴う掘削が及んでおり、もとの堆積土は残されていないかった。

遺物は、2区4層で土師器4点、土坑（SK1）より土師器7点（ハケの密度、器厚よりみて少なくとも3個体はある）。土坑の土師器は、器厚が6～8mmで外面をハケ調整する甕が多い。胎土がやや雑で古墳～奈良時代の資料と考えられる。

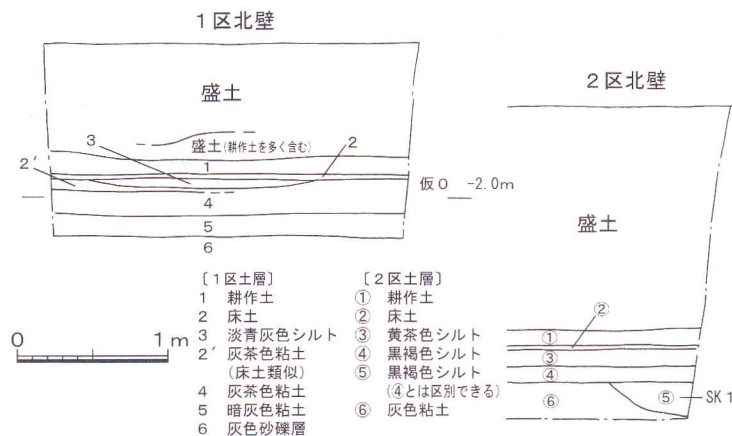
対象地は府中IV遺跡の立地する丘陵下に位置し、西には鳥井遺跡の立地する南へ伸びる低丘陵が存在する。2区で包含層・遺構が確認された。対象地のすぐ東側には、高速道路や建物で不明確にはなっているが、標高8～10mの微高地が存在したことがわかる。この微高地上に遺跡が展開した可能性も考えられる。1区と2区で旧耕作土の地表レベルで1.2mも差があり、東側が低くなっている。1区最下層の灰色砂礫層の下部に遺物包含層が存在した可能性は今のところ低いと思われ、旧地形が東側に傾斜していたものと考えている。（前田）



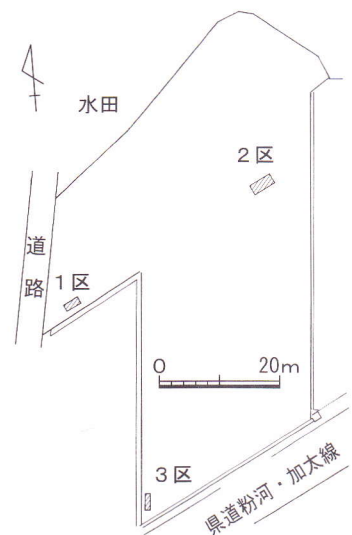
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 土層図



第3図 調査場所

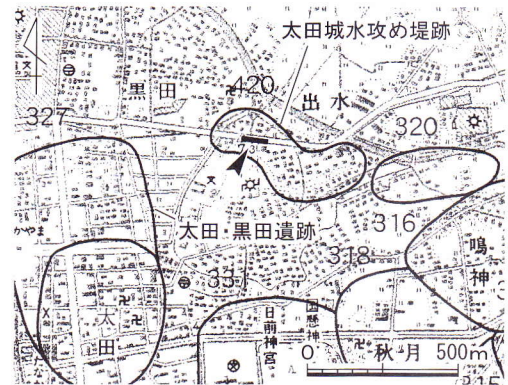
④太田城水攻め堤跡（調査一覧29）

〔経緯〕 公共下水管埋設工事に伴う立会調査

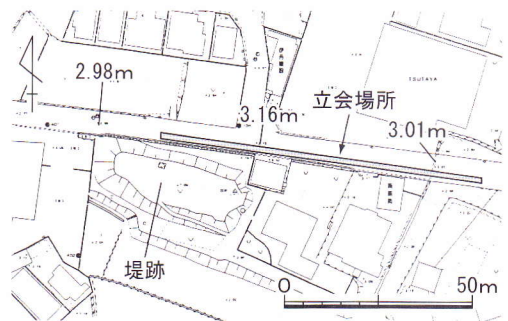
〔場所〕 和歌山市出水地内

〔面積〕 28.48㎡（対象面積524.00㎡）

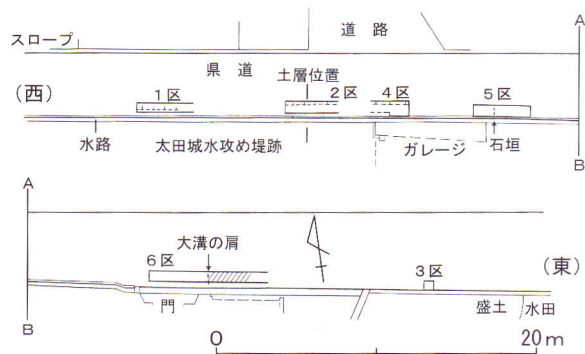
〔概要〕 立会調査は、埋設される下水管の長さにあわせて約5mごとの掘削・埋設を繰り返すものであった。幅1m前後で、深さ2mの垂直掘りで、しかも掘削部分の北面は先行する工事により埋め戻された地層であったため、壁面が崩壊しやすく、工事を長時間中断しての調査は困難であった。壁面が保持されている箇所については施工業者の協力を得て、短時間の作業で壁面を平滑にして、分層を試みたが夜間工事のため土層の識別も困難であった。立会箇所は6地点において行った。各調査区の面積は、1区4.0㎡（0.8m×5.0m）、2区4.0㎡（1.0m×4.0m）、3区0.72㎡（0.8m×0.9m）、4区5.38㎡（1.0m×1.3m+1.4m×1.7m）、5区5.0㎡（1.0m×5.0m）、6区9.36㎡（0.9m×10.4m）である。前記のように、土層は不明確ではあるが、概要としては上位よりアスファルト、工事に伴う埋め戻し土（濁った土やしまりのない砂層）がみられ、その下位に灰褐色や灰黄褐色系の粗砂層が厚く堆積し、最下層で鉄分の影響を受けた砂礫層に変わっていく。堤本体の調査で確認されたような粗砂とシルト層が多く形成されるような傾向は認められず、しまり具合も弱く感じられた。遺構としては、5区の壁面で下部に横木をもつ石垣とみられる遺構、6区で深さ約0.8mの溝肩部が確認されたが、いずれも伴出遺物がなく、時期は不明である。全体として堆積下部の灰褐色や灰黄褐色の厚い砂層は、太田城水攻め堤の構築の内部構造とは考えられず、最下部の砂礫層も含めて、堤構築



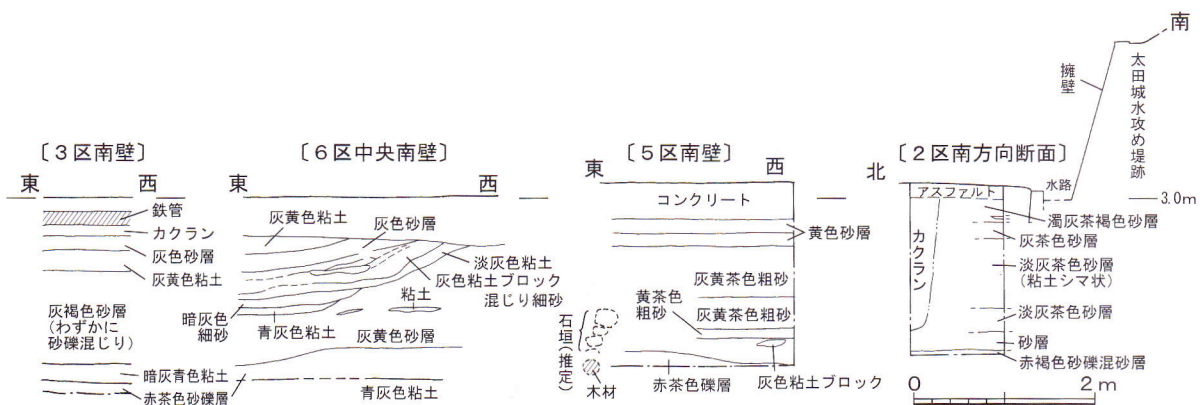
第1図 位置図



第2図 立会場所（『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅱ』和歌山井堰研究会（2004）に採筆）



第3図 調査場所



第4図 土層図（調査区相互のレベルは第2図の道路面標高を参照した推定値）

以前の河川による古い時期の自然堆積層と判断している。5区検出の石垣遺構は、胴木よりみて堤に直交に近い角度とみられ、堤に伴う石垣とは判断できなかった。深いレベルでの確認であり、堤構築以前の石垣の可能性を考えたい。6区検出の溝の肩部は、調査区内での方向性が不明である。仮に東西方向からやや北西方向に振るものとした場合に、堤北側の推定される裾位置に近く、堆積土中にブロックを含むことから、堤構築に伴い北側に掘削された溝状遺構の可能性がある。ブロック混じりの土は、堤構成土が流出し、溝内に堆積したのかもしれない。(前田)

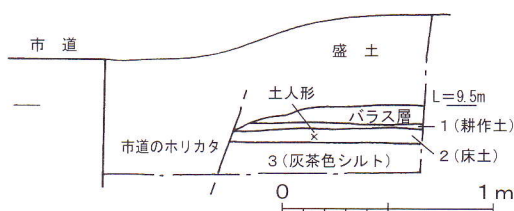
⑤川辺遺跡 (調査一覧34)

〔経緯〕 分譲住宅建設に伴う立会調査

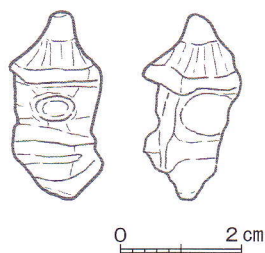
〔場所〕 和歌山市川辺174番1

〔面積〕 17.30㎡ (敷地面積402.18㎡)

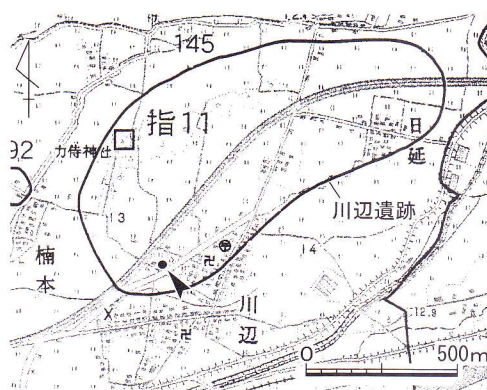
〔概要〕 対象地は遺跡推定範囲の南端である。擁壁工事に伴って立会調査を行った。各調査面積は1区1.4㎡ (1.0m×1.4m)、2区0.64㎡ (0.8m×0.8m)、3区0.91㎡ (0.7m×1.3m)、4区1.05㎡ (0.7m×1.5m)、5区13.3㎡ (0.7m×19.0m)である。東側の県道沿いの1・2・5区は既存の擁壁・道路敷設に伴うホリカタ・盛土であり、旧耕作土などの堆積土はほとんど残されていない。西側の市道に沿う部分の3・4区は盛土下位にわずかに旧耕作土(1層)以下の堆積が残され、2層(床土)は赤茶色シルト層、3層は灰茶色シルト層で、工事掘削は3層の途中までであった。4区床土(2層)から江戸時代の土人形(第5図)、3区3層より微細な土師器片(古墳時代か?)が出土した。市道は県道中央より約50cm低いレベルにある。3・4区の3層には古墳時代かと思われる土器細片が含まれており、確定はできないが、古墳時代の希薄な包含層である可能性が認められた。(前田)



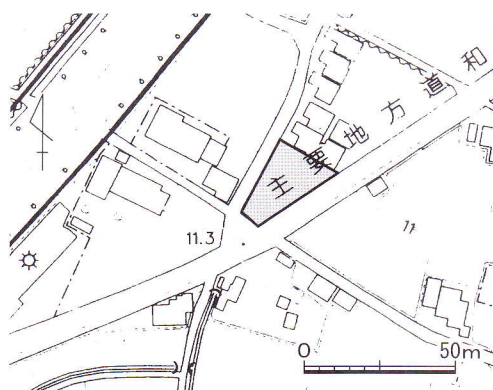
第4図 土層図〔4区北壁〕



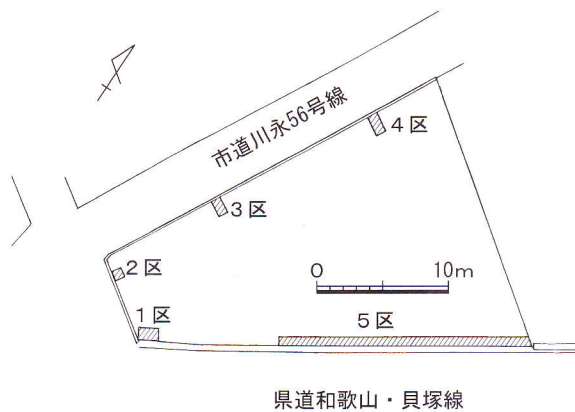
第5図 遺物実測図



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所

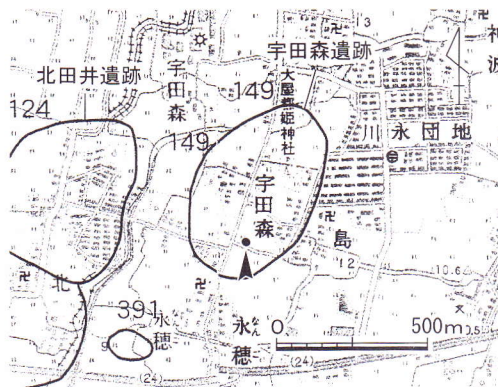
⑥宇田森遺跡（調査一覧52）

〔経緯〕分譲住宅建設に伴う確認調査

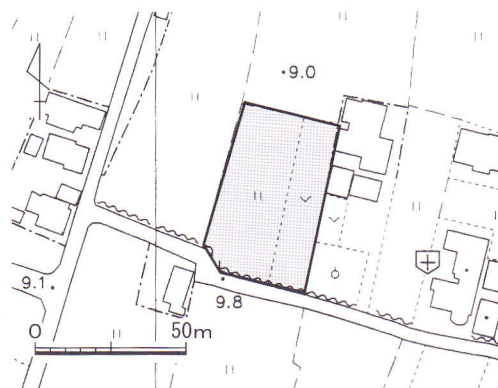
〔場所〕和歌山市宇田森13

〔面積〕17.72㎡（敷地面積1894.00㎡）

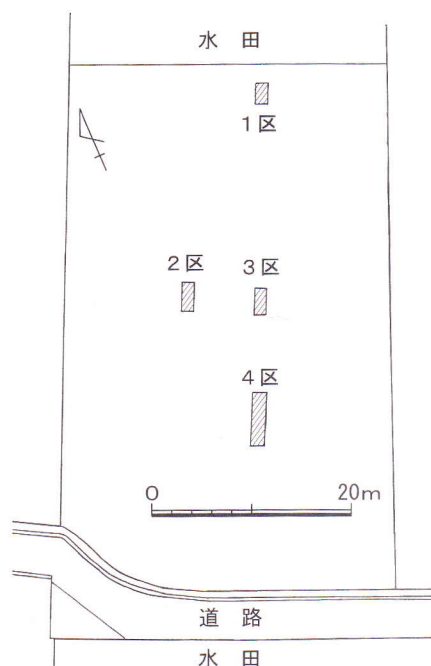
〔概要〕南北に細長い対象地の北端、中央、防火水槽設置予定など4ヵ所に調査区を設定した。西方については野菜を栽培中であり、敷地西端部に調査区を設定できなかった。調査面積は、1区2.86㎡（幅1.3m×長さ2.2m）、2区3.64㎡（幅1.3m×長さ2.8m）、3区3.12㎡（幅1.3m×長さ2.4m）、4区8.10㎡（幅1.5m×長さ5.4m）である。基本土層は耕作土・床土の下位に灰褐色系シルト層が堆積し（3～6層）、1区灰褐色系シルト層下部の3～6層からは瓦器・土師器片が出土し、それらは中世期の堆積層と判断された。3区で地表から約70cm下で無遺物層（13層）、4区では地表から約50cmより下位で無遺物層（8～10層）が確認された。耕作土から順次、機械掘削しながら遺構の確認を行ったが、明確に遺構と呼べるものは確認できなかった。ただ、3区では土師器羽釜の大振りな個体（第5図1）が中央部から出土し、壁際のサブトレンチで堆積層の落ち込みを確認し、羽釜もこの落ち込み内の遺物であった可能性がうかがわれた。また、4区では8層上面から炭混じりの茶褐色シルト層が緩やかに落ち込むのが確認され、落ち込み内の7層からは須恵器細片、土師器把手（第5図5）出土し、層位も考慮し古墳～奈良時代の堆積層である可能性が考えられた。この落ち込みが遺構かどうかを検討したが、傾斜がかなり緩やかであり、遺物の包含も稀薄であることなどから、積極的に遺構であるとの判断が下せず、当時の微地形の可能性を指摘できる程度であった。3区と4区で無遺物のベースと見られる地層が確認された。1・2区は無遺物層まで掘削していないので不明だが、4区第7層の古墳・奈良時代の堆積に含まれた甕（第5図6）のような弥生時代の遺物は極めて稀薄であり、鎌倉時代の瓦器・土師器片が優勢である。地盤は南側で高く、北に向かって傾斜し、その内部に鎌倉時代を中心とする堆積層が形成される場所で、柱穴・土坑の形成も顕著ではなく、古墳・奈良時代からと鎌倉時代頃の落ち込み地形が展開するようである。より南方で明確な遺構面が形成されるかどうか、今後注意する必要がある。（前田）



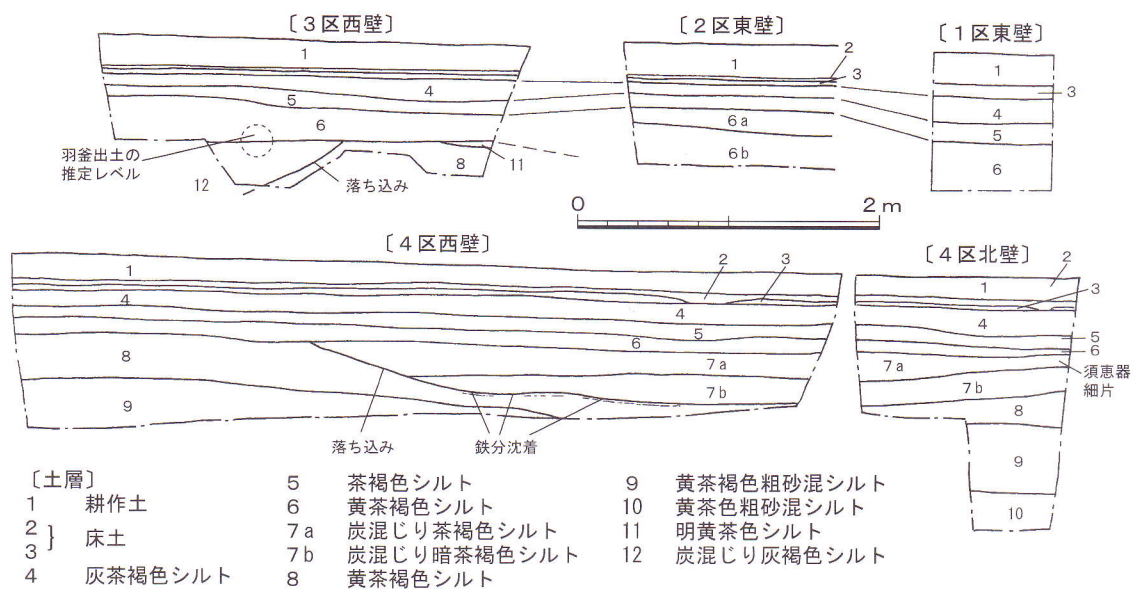
第1図 位置図



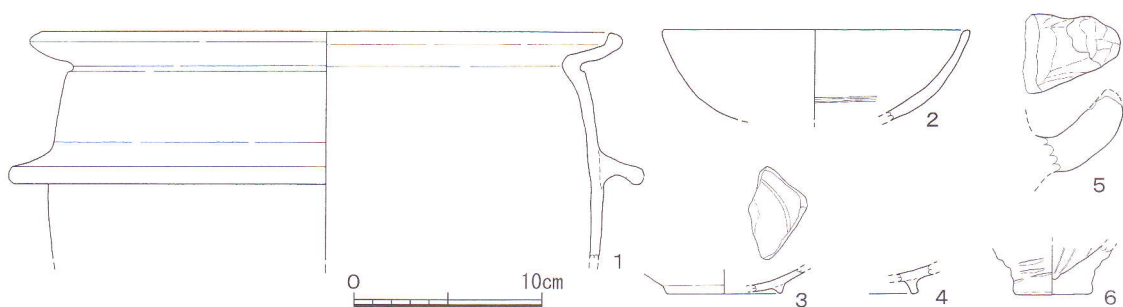
第2図 調査対象地



第3図 確認調査地区



第4図 土層図



第5図 遺物実測図 (1: 3区6層下か12層、2: 3区12層、3: 1区6層、4: 4区6層、5・6: 4区7層)

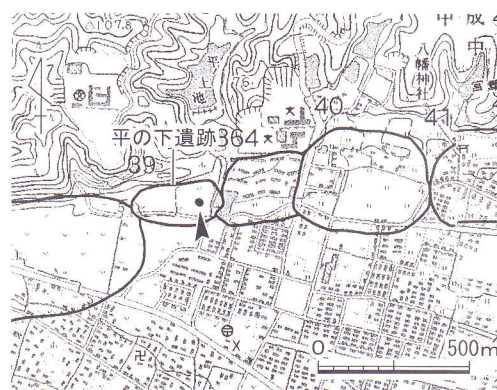
⑦平の下遺跡 (調査一覧56)

〔経緯〕 宅地造成に伴う確認調査

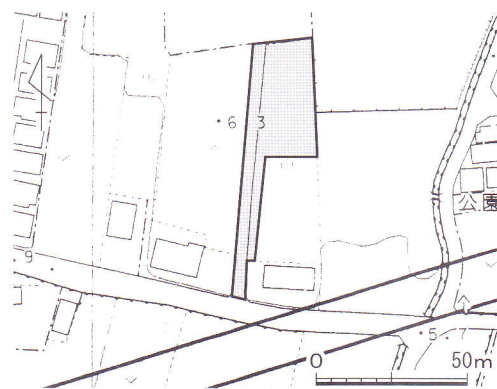
〔場所〕 和歌山市西庄490-1 ほか

〔面積〕 16.97㎡ (敷地面積 998.10㎡)

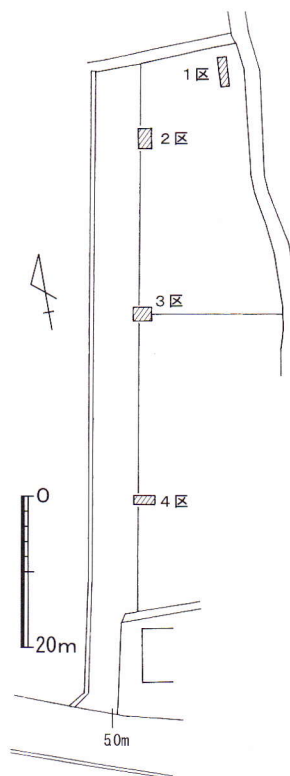
〔概要〕 進入路と宅地造成予定地内に4ヶ所の調査区を設定した。調査面積は1区4.63㎡ (1.25m×3.7m)、2区4.42㎡ (1.7m×2.6m)、3区4.68㎡ (1.8m×2.6m)、4区3.24㎡ (1.2m×2.7m) である。対象地は1m前後の盛土により平坦地となっているが、丘陵部に近い北側の1・2区で旧耕作土が高く、南側の3・4区で約30cm 低い。旧耕作土以下は各種の砂層堆積となり、土地測量図面を参考にするると仮レベルで3.7m～4.1mにみられた暗茶色・灰茶色系砂層より瓦器・土師器の出土が確認され、これらが中世期を中心とする堆積層と判断された。砂層堆積のため壁面が脆く、下面からの湧水も著しかったことと工事掘削深度との関係によって、1区を除いて中世包含層の下端は確認しなかった。1区を参考にするると、下層では遺物の少ない灰色砂層や無遺物の可能性のある礫混灰色砂層に変わっていくようだが、4区との比較ではこれらの灰



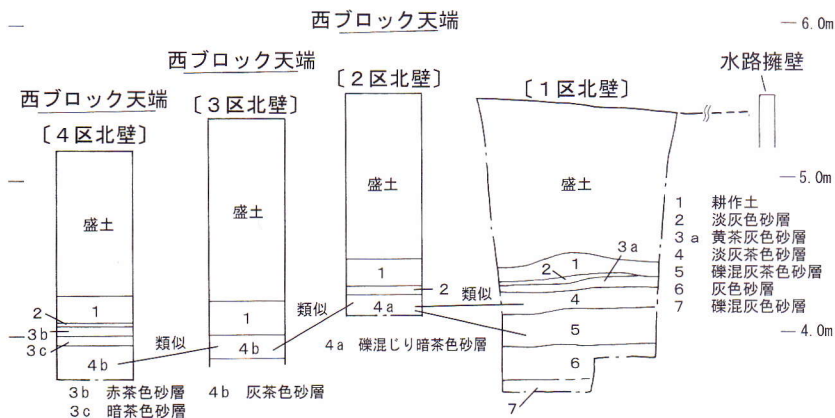
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 確認調査地区

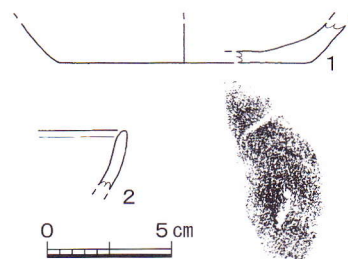


第4図 土層図 (レベルは南側の県道脇の仮B. M5.0m より)

色砂層は旧耕作土や遺物包含層と同様に南側に向かって下がっていくと推定される。遺構は確認されなかった。遺物は前記のように、瓦器・土師器がほぼ同量出土し、4区4b層からは中世とみられる瓦も1点出土した。第5図1は土師器杯の底部、2は瓦器椀口縁部である。

平の下遺跡では、東側隣接地の確認調査で対象地の一部において、鎌倉時代を中心とする遺構(溝・土坑)

が確認されている。地表から約44cm下と約56cm下の2面の遺構面があり、淡灰黄色シルトが基盤となっている。基盤となる土質は異なるが、今回調査区の1区と類似する様相を示している。今回の調査区では遺物は一定量存在するが、遺構は確認できず、下層まで砂層堆積が顕著であった。深掘していないが、遺跡の中心部ではなく、中心部からほど近い位置にある縁辺部と推定された。(前田)



第5図 遺物実測図 (3区4b層)

⑧有功遺跡 (調査一覧64)

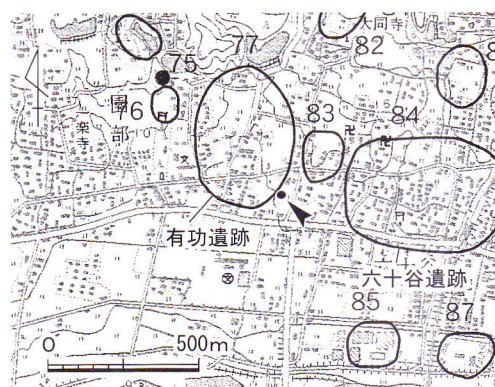
〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市六十谷字西ノ口1049番1、1049番3、1049番9

〔面積〕 21.71㎡ (敷地面積997.35㎡)

〔概要〕 対象地内で掘削工事が予定される範囲を中心に5ヶ所の調査区を設けた。それぞれの調査面積は1区5.75㎡ (1.15m×5.0m)、2区6.27㎡ (1.1m×5.7m)、3区3.0㎡ (1.2m×2.5m)、4区3.24㎡ (1.1m×2.9m)、5区3.45㎡ (1.15m×3.0m) である。

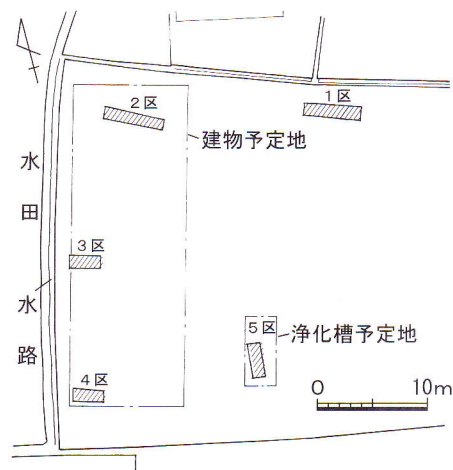
対象地のベース層(砂礫混じり黄茶色土層)は北側に高く、南側に低い傾向があり、特に南西方向で最も低いとみられる。基本層序としてはⅠ層(耕作土)、Ⅱ層(床土)、Ⅲ層(灰茶色系シルト層、中世包含層)、Ⅳ層(黒色粘質土層、弥生時代包含層)、Ⅴ層(砂礫混じり黄茶色土層、無遺物のベース層)となり、Ⅳ層



第1図 位置図



第2図 調査対象地

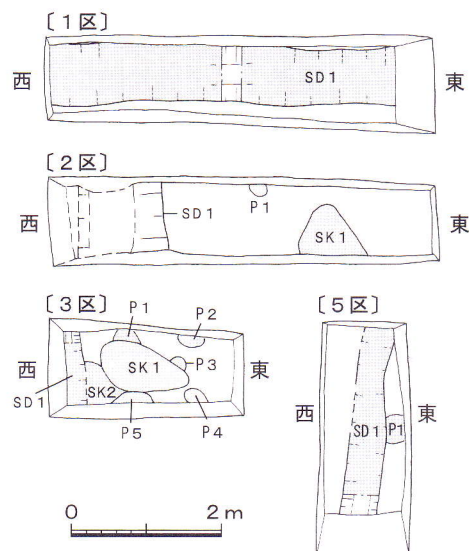


第3図 確認調査地区

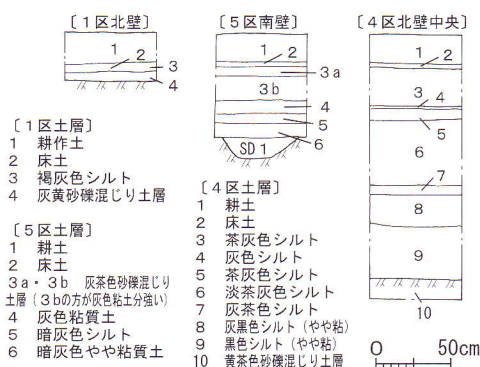
は南西部の4区のみで確認され、Ⅲ層が北に薄く、南側で複数の層に分けることができる。

遺構は1～3区、5区で中世期とみられる溝、土坑、ピットが確認された。特に3区では複数の土坑・ピットが切り合い関係をもって密集していた。複数の遺構に瓦器片が確認されること、遺構埋土がおおむね共通していることなどから鎌倉時代を中心とする時期と推定される。4区では厚さ55cmにもわたって弥生土器を包含する堆積土が確認され、3・5区ではまったく確認されない状況のため、4区周辺に弥生時代の落ち込み状の遺構かもしれない谷状地形が展開していると判断される。遺物は前記のように、包含層や遺構から瓦器・土師器片、4区のみ弥生土器（第6図参照。前期のへう描沈線文の甕や壺破片が多く、わずかに土師器とみられる破片が包含される）が複数確認された。

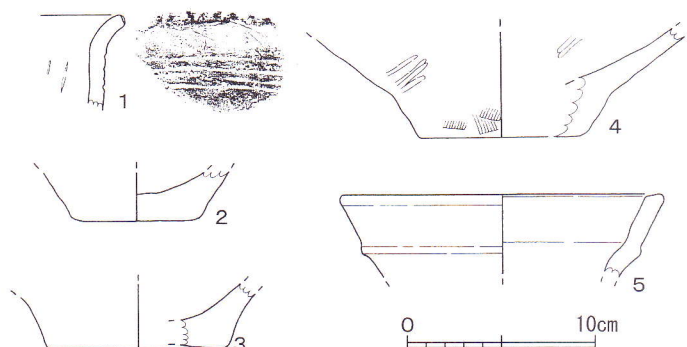
本調査地の南東部隣接地においてもピットが確認されていることより、周辺に中世期の遺構が展開している可能性が高い。また、4区で確認された弥生時代の落ち込み（谷状地形）は、前期に遡る公算が強く、弥生時代の早い段階から本遺跡が展開していた状況を示しており、重要である。（前田）



第4図 遺構平面図



第5図 土層図



第6図 遺物実測図

⑨高井遺跡（調査一覧90）

〔経緯〕宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕和歌山市直川字高井垣内1218番の一部、1219番の一部、1220番の一部、1221番、1222番の一部、1223番の一部、1224番の一部、1228番1の一部、1229番9の一部

〔面積〕40.45㎡（敷地面積4026.49㎡）

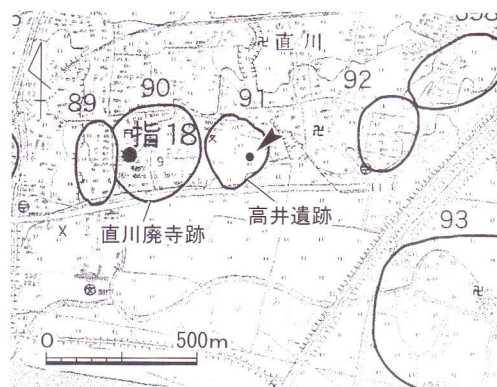
〔概要〕調査面積は、1区4.59㎡（南北1.8m×東西2.55m）、2区8.04㎡（南北2.4m×東西3.35m）、3区9.2㎡（南北2.3m×東西4.0m）、4区2.7㎡（南北1.5m×東西1.8m）、5区2.72㎡（南北1.6m×東西1.7m）、6区13.2㎡（南北1.65m×東西8.0m）である。

対象地は斜面地を段々に整形した土地であり、調査区ごとに堆積様相が異なり、共通の地層とはならないので調査区ごとに概要を記載する。

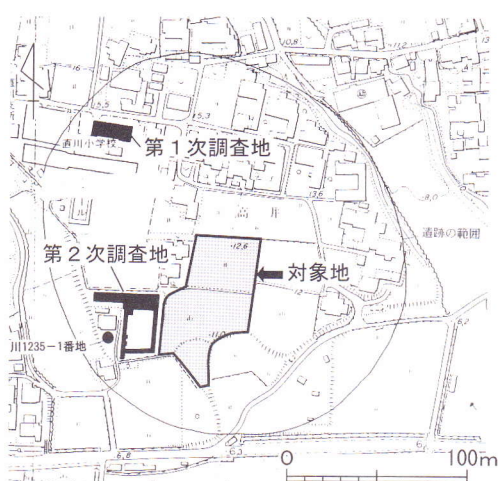
1区 床土の下にしまりのない灰茶色砂層（3層）の堆積があり、瓦器・近世磁器が包含される。3層は江戸時代以降の堆積となる。4層は須恵器が1点（第6図2）のみの出土であり、堆積の時期を確定できない。4層下面に土坑が3基形成される。灰茶色系シルトを埋土とするが、灰色の強いSK3・4と褐色の強いSK5に2分される。SK4の壁は垂直に立ち上がる。他地区の堆積土を参考にすると、灰色の強いSK3・4は中世期の遺構の可能性が認められる。

2区 2区は南側で地山がなだらかに傾斜する。下層に水分を多く含む灰茶色砂層（5層）があり、さらに下層に灰茶褐色系シルトの堆積（6層）がある。遺構は6層下面に土坑が形成される。埋土は6層と共通する。この地区の5層は西方の3区4層と類似することから、瓦器を含む中世の堆積と想定される。6層は3区の5層と類似するが、時期の決め手に欠ける。SK1・2の埋土から須恵器・土師器が出土することと中世堆積の下層堆積であることより奈良時代の可能性があるが、3区6層（奈良時代堆積）とは明らかに異なっており、あるいは中世期の堆積・遺構であるのかもしれない。

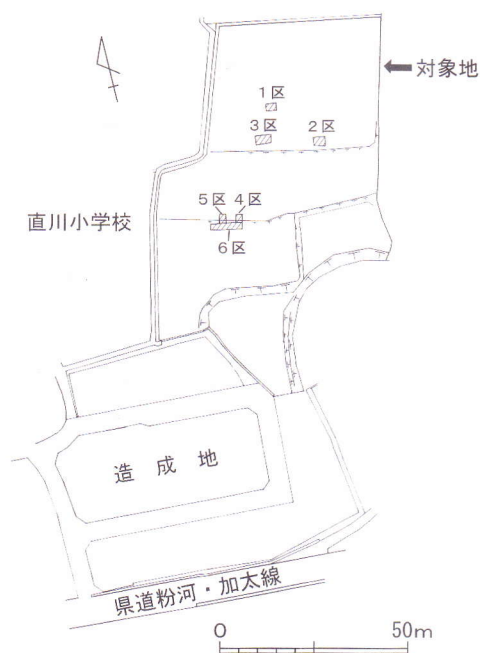
3区 4層のしまりのない灰黄茶色砂層からは瓦器が出土し、5層の灰茶褐色シルトからも瓦器が出土する可能性がある。6層は、よくしまった堆積で大振りな須恵器片を含んでいた（第6図1・3～6）。6層下



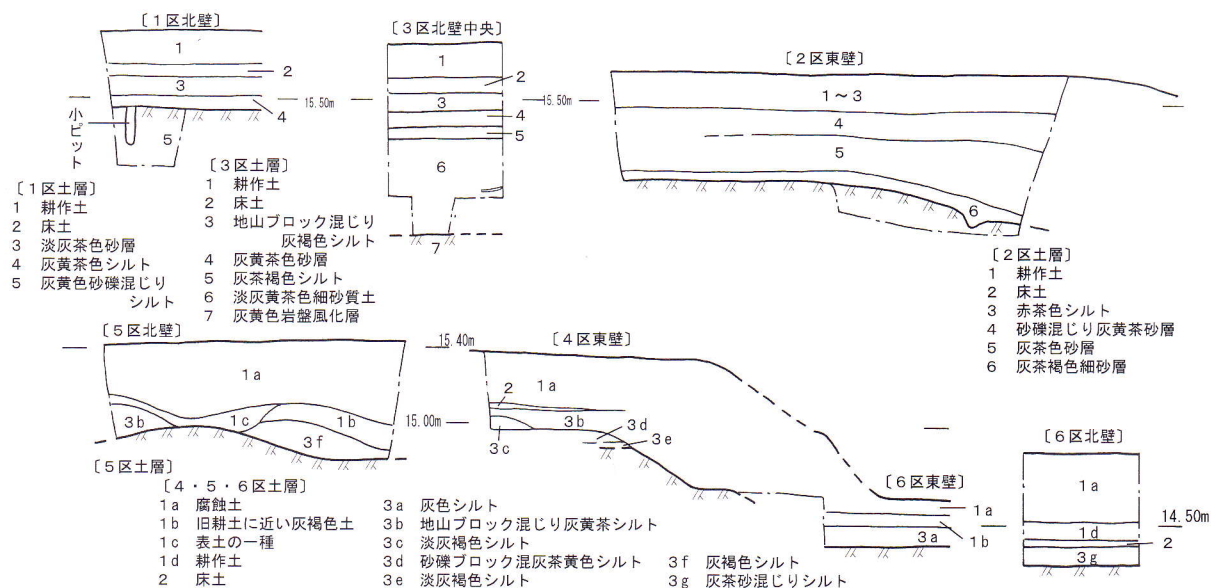
第1図 位置図



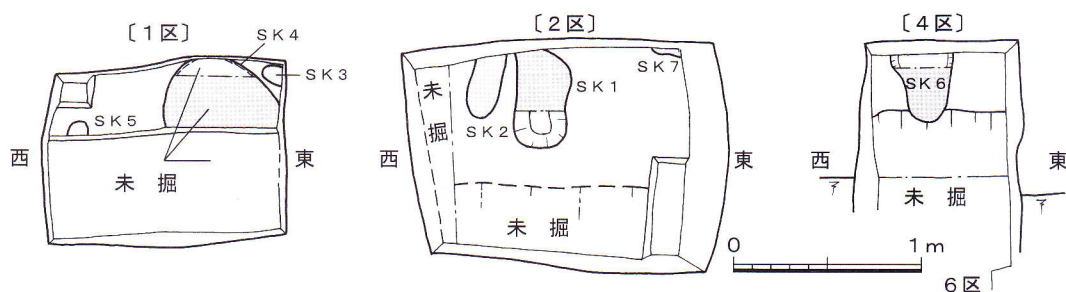
第2図 調査対象地（『高井遺跡第2次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団（2000）に加筆）



第3図 確認調査地区



第4図 土層図 (レベルは県道上の仮B. M10.0mより作成)



第5図 遺構平面図 (1・2・4区)

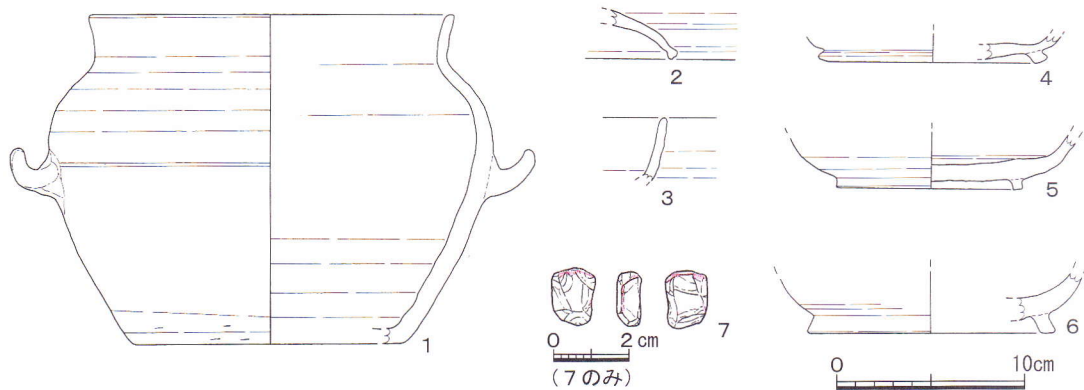
面は、2区ベース面より明らかに30cmほどは下っており、他地区で類似の堆積が認められなかったことや大振りな須恵器片を含むことより、落ち込み状地形の堆積か溝などの遺構埋土の可能性が考えられた。

4区 斜面地付近に設定した4区の南半は傾斜し、1層の腐食土のみの堆積となる。4区北側の3c層(灰黒色系シルト)の下面に土坑SK6が形成される。SK6の構築される3d層は地山ではなく、淡灰褐色シルト(3e層、土師器片1点)の下面が無遺物のベース層となるようである。3c層からは須恵器・土師器が出土するものの、瓦(律令期ではない)の包含もみられるため、明確に時期を確定できない。

5区 1層の堆積が不安定であり、地山レベルも水平ではない。遺構・遺物は確認されなかった。

6区 防火水槽設置予定地に東西方向に設定した。旧耕作土の下、32~38cm程度で岩盤風化層となる。遺物は東部の3a層より土師器2点、チャート製火打石(第6図7)が確認されたが、遺構は検出されなかった。本来は北から南へ傾斜する旧地形であったものが、平坦地をつくるために削平を受けたものと思われる。

全体として、大きく分けて奈良時代頃と中世(鎌倉時代頃か)の2時期の遺物が確認された。土坑のいくつかは、埋土よりみて中世期の可能性が高く認められた。3区の6層からは大振りな奈良時代の須恵器片が出土し、6層自体が遺構埋土、落ち込み地形内の堆積土の可能性があり、周辺に



第6図 遺物実測図（1・3～6：3区6層、2：1区4層、7：6区3a層）

同時期の遺構が展開している可能性が強く認められた。西側の直川小学校敷地内の調査では古墳時代の竪穴住居2棟、平安時代の掘立柱建物8棟、溝など多数の遺構が発見されている。本調査にも同様の遺構が展開しているものと判断される。ただし、東側については谷状地形となっており、遺構が展開するのは東側の谷状地形までの範囲と推定される。（前田）

⑩上黒谷遺跡（調査一覧95）

〔経緯〕無線基地局建設に伴う事前確認調査、立会調査

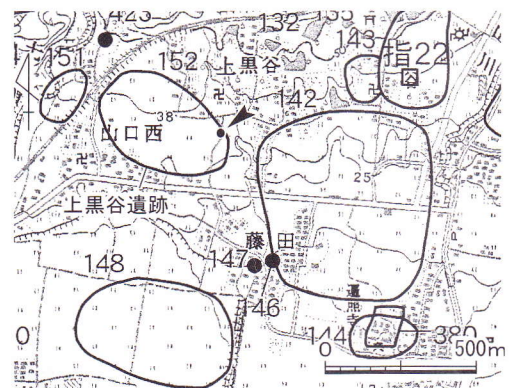
〔場所〕和歌山市上黒谷103

〔面積〕3.72㎡（開発面積177.44㎡）

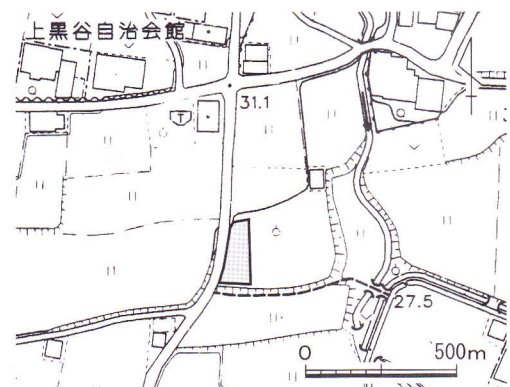
〔概要〕無線基地局建設予定範囲の北東隅付近（1区）と南西隅付近（2区）に調査区を設定した。

上層より耕土・床土の堆積があり、その下層は細砂や小礫の混じるシルト層の堆積層（3・4層）であった。褐色系の5・6層が主たる包含層であり、土師器・須恵器・瓦が包含されていた。5・6層は北から南に傾斜して堆積する。6層は2区で色調より分層して把握したが、5層の下部となるのかもしれない。遺物は5・6層ともに含まれていたが、1区での出土量は少なかった。灰色系の砂礫層（7層）がベースとなり、調査区の中では無遺物層とみなされた。遺物のうち5層出土の須恵器・土師器は細片ながら、古墳時代後期～奈良時代とみられる。瓦は細片であり時期を特定できない。

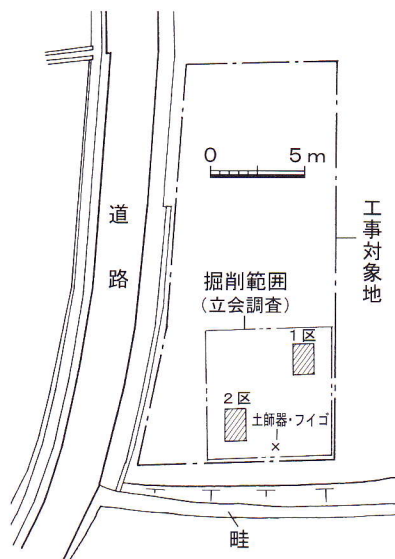
5・6層は周辺の地形と同様に北から南へ傾斜して堆積する。無遺物の7層は砂礫層で、湧水が著しく、不安定な堆積層とみなされ、5・6層の下面に遺構は確認できなかった。総合的に判断して、対象地に遺構が形成されている可能性は低く、より北側に形成されていると推測され、それらの遺物が斜面地に堆積した



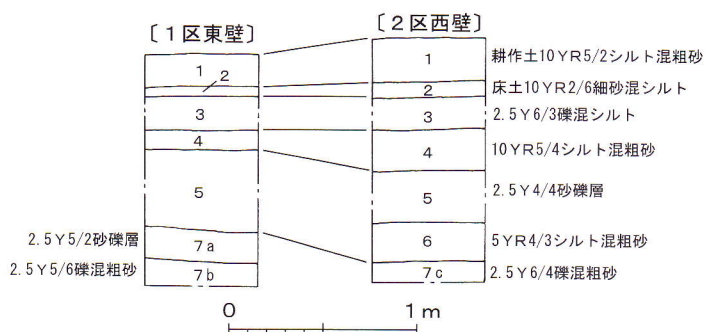
第1図 位置図



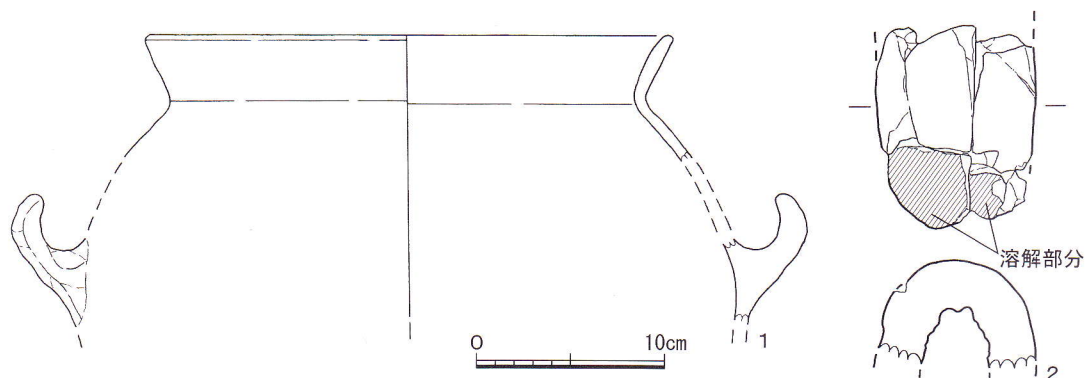
第2図 調査対象地



第3図 調査場所
(1区・2区は確認調査)



第4図 土層図



第5図 遺物実測図 (掘削範囲の南端6層出土)

ものと判断される。なお、立会調査時に遺構は確認されなかったが、対象地中央南端の5・6層から土師器把手付甕（埴）が出土した。把手は薄く、上方へ屈曲する形態で7世紀代に多くみられるタイプである。平成19年度の立会調査においても7世紀代の遺物が確認されており、本遺跡の主体となる時期が7世紀代である可能性が高まった。（前田）

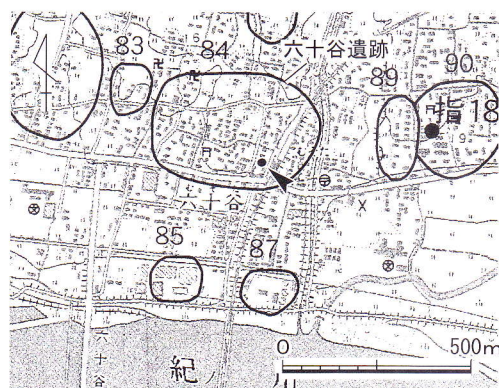
⑪六十谷遺跡（調査一覧110）

〔経緯〕 倉庫建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市六十谷357-3

〔面積〕 7.07㎡（敷地面積131.50㎡）

〔概要〕 JR六十谷駅の西方に広がる遺跡で、低位段丘上面に立地する。弥生時代の遺跡として知られるが、発掘調査事例は皆無に等しい。対象地は遺跡範囲の東端で、段丘上の平坦面の南端に近い。対象地中央北部に1区を設定し、調査を実施したところ、遺物包含層



第1図 位置図

が確認できたため、建物中央部に東西方向に長く2区を設けた。土層は、盛土の下に旧耕作土の1層、遺物包含層である2層、岩盤風化層のベース層と判断される5層が堆積し、5層上面が遺構面となる。2層は1区と2区西側では確認できるが、1区東側では1層の下が5層となり、2層は薄くなるか、もしくは存在しないようである。1区と2区で遺構面のレベルを比較すると南北方向では、やや南に向かって傾斜し、東西方向にはほぼ水平となるようである。

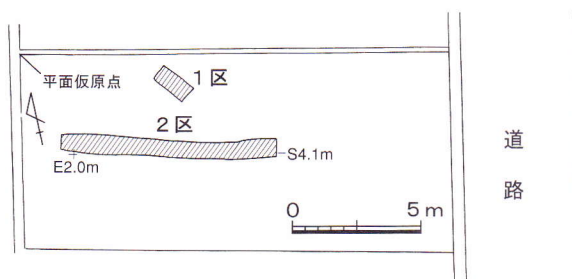
遺構は2区で土坑2基とピット1基が確認された。

SK1は浅い土坑で埋土は5cm程度。土師器小片とサヌカイト片(?)を含む。時期は確定できない。SK2は検出面から28cm以上の深さがあり、黒褐色系の埋土をもつ。サブトレンチ内では大振りな須恵器甕口縁部破片(7世紀前半頃)が出土し、遺構面上面では瓦器・土師器の小片が確認された。時期は確定できないが7世紀前半頃を想定しておきたい。ピットは深さ10cm程度とみられ、確認した範囲では遺物は出土しなかった。1区と2区の包含層(2層)からは土師器が複数出土するが、時期を確定できない。2区の機械掘削中、掘削後の盛土より庄内〜布留式期の甕口縁部、小型器台口縁部、高杯脚部の破片が確認され、古墳時代初頭頃の包含層や遺構が近辺に形成されている可能性も強く感じられた。

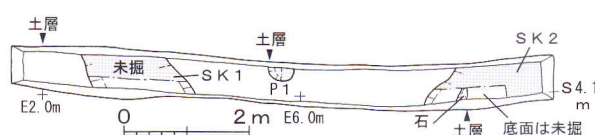
狭い範囲の確認ではあるが、遺物包含層と遺構が確実に存在する。土器は総数60点前後で、古式土師器と時期不明の土師器が多く、弥生土器、瓦器、須恵器が微量である。低位段丘の傾斜面に近いが、南側隣接地における立会調査でも遺構が確認されており、付近一帯に遺構が形成されていることも判明する。(前田)



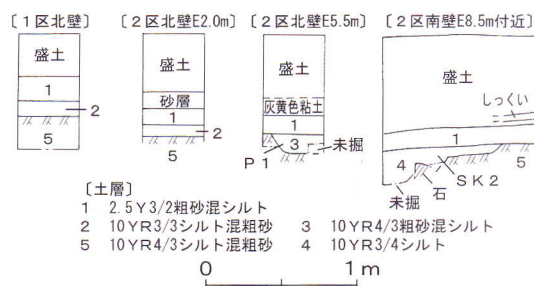
第2図 調査対象地



第3図 確認調査地区



第4図 2区遺構平面図



第5図 土層図

(4) 財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要

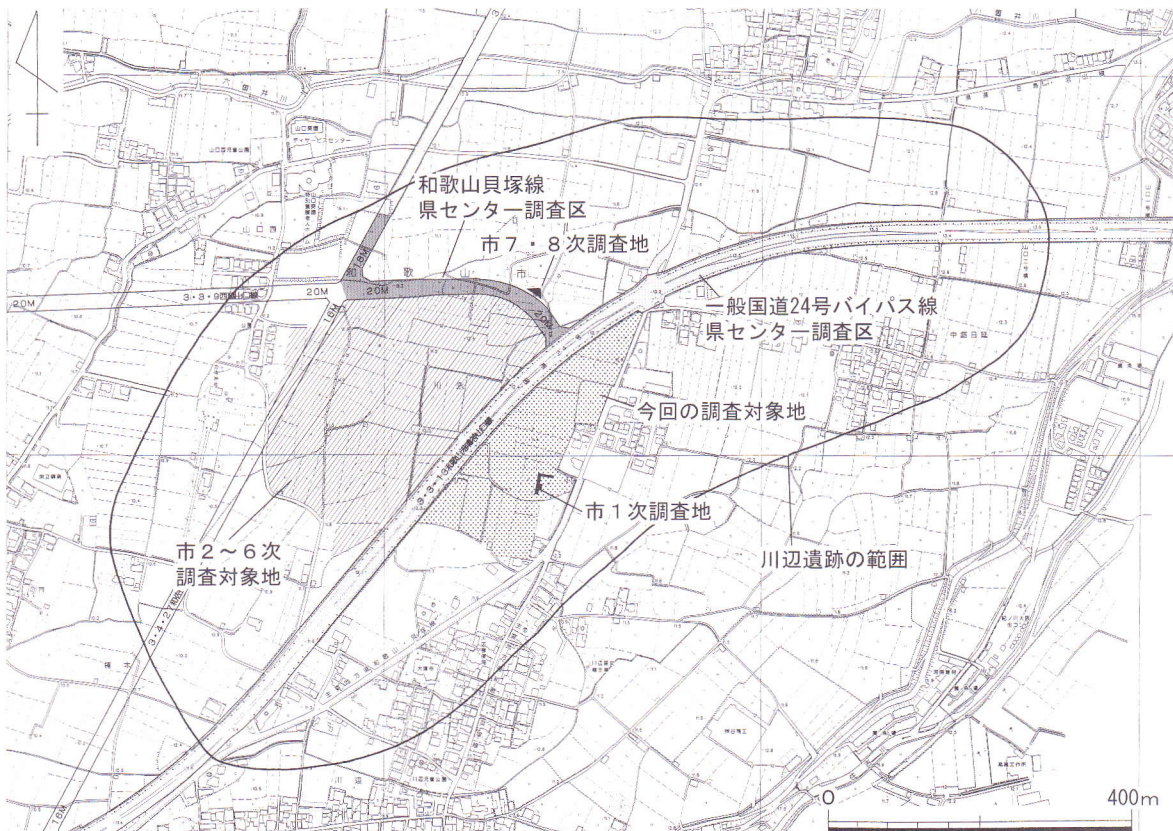
①川辺遺跡 第9次確認調査(調査一覧10)

1. 調査の経緯と経過

和歌山市域の東端部にあたる和歌山市川辺及び里周辺に所在する川辺遺跡は、紀ノ川北岸の標高11.50m前後の沖積平野に立地する遺跡である。この遺跡は東西約1km、南北約650mの範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている。

当遺跡の過去の調査には、昭和62・63年度及び平成3・4年度に財団法人和歌山県文化財センター(以下、「県センター」という。)が行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査(調査面積30,641㎡)及び、平成9・12・13年度に同じく県センターが行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査(調査面積約7,400㎡)がある。また、平成13年度には財団法人和歌山市文化体育振興事業団(以下、「市事業団」という。)が遺跡の実態解明を目的とした発掘調査(調査面積192㎡)を実施している。そして、平成18年度には大規模開発の事前調査として財団法人和歌山市都市整備公社が確認調査を行い、その成果をもとに平成18・19年度に開発計画に対処する本発掘調査を実施している。以上の調査成果から川辺遺跡の様相がかなり明確となりつつある。これらの調査では、縄文時代晩期の土器棺墓、弥生時代中期の竪穴住居や方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物、中世の掘立柱建物や土坑墓など多数の遺構を検出したほか、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土している(第1図)。

今回の調査は、昨年度調査を行った一般国道24号バイパス西側の水田及び畑地における大規模開発計画



第1図 調査対象地位置図

に伴う調査に続き、同国道東側の開発計画を起因とする事前の確認調査として行ったものである。この開発用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記された川辺遺跡（遺跡番号145）の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施することとなった。調査は、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が和歌山市から委託を受けて実施した。今回の調査地は、開発計画範囲の中でも東及び南縁辺部にあたる擁壁工事計画路線にあたる地点であり、県センターの国道バイパス線建設に伴う調査区及び市事業団が実施した平成13年度調査区に近接する調査区であったことから、調査の計画当初から内容等双方の調査成果を参考に調査を進めた。

現地における調査は、平成20年5月1日から同年5月29日までの約1ヶ月の期間を要した。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

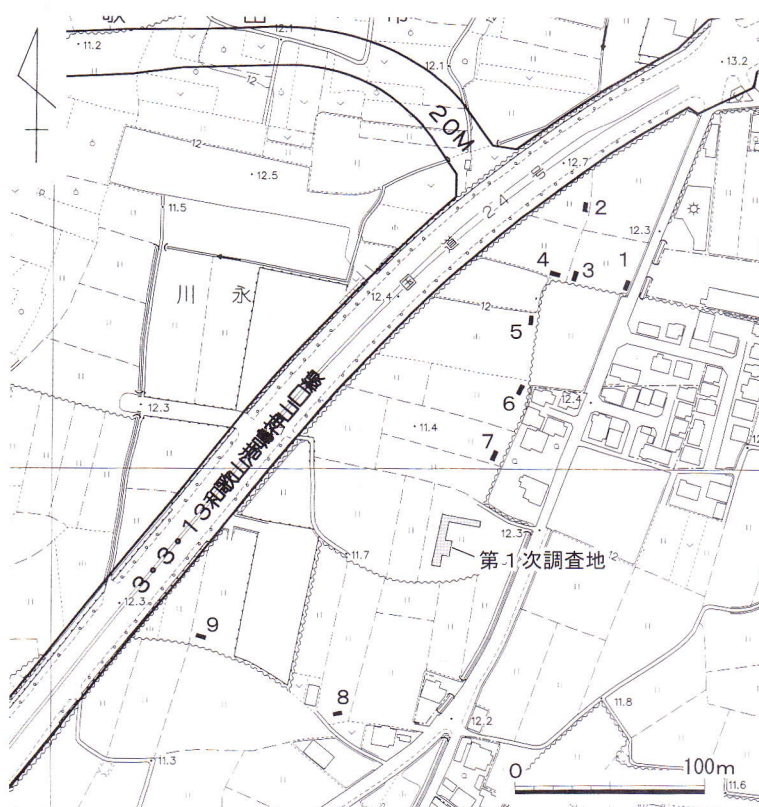
今回の調査は、開発計画範囲約 20,000㎡の内、東及び南縁辺部にあたる擁壁工事路線を対象に幅 2 m、調査区長 5 m の調査区を 9ヶ所設定して行った（第2図）。調査面積の合計は約90㎡である（第1表）。

調査地の現況は、大半が水田であり、一部に休耕田である荒蕪地が含まれている（図版7）。重機による掘削は、先述の2例の調査成果を基に遺構面直上の遺物包含層まで慎重に行い、検出した遺物包含層の掘削と遺構の検出及びサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。また、遺構掘削は、基本的に実施しないものとして計画していたが、遺構の時期など最小限の情報を得るため文化振興課担当者と協議して部分掘削を行った。

図面による記録は、各調査区に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（縮尺1/20）の作成を行った。各調査区の仮原点は、基準点測量を行い旧国土座標（日本測地系）の数値とした。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T. P. 値）を基準とした。

第1表 調査面積一覧表

調査区	長さ	幅	面積 (㎡)
第1区	5.0	2.1	10.5
第2区	5.0	2.1	10.5
第3区	5.0	2.0	10.0
第4区	5.0	2.1	10.5
第5区	5.0	2.0	10.0
第6区	5.0	2.2	11.0
第7区	5.3	2.1	11.1
第8区	5.1	2.0	10.2
第9区	5.0	2.2	11.0
合 計			94.8

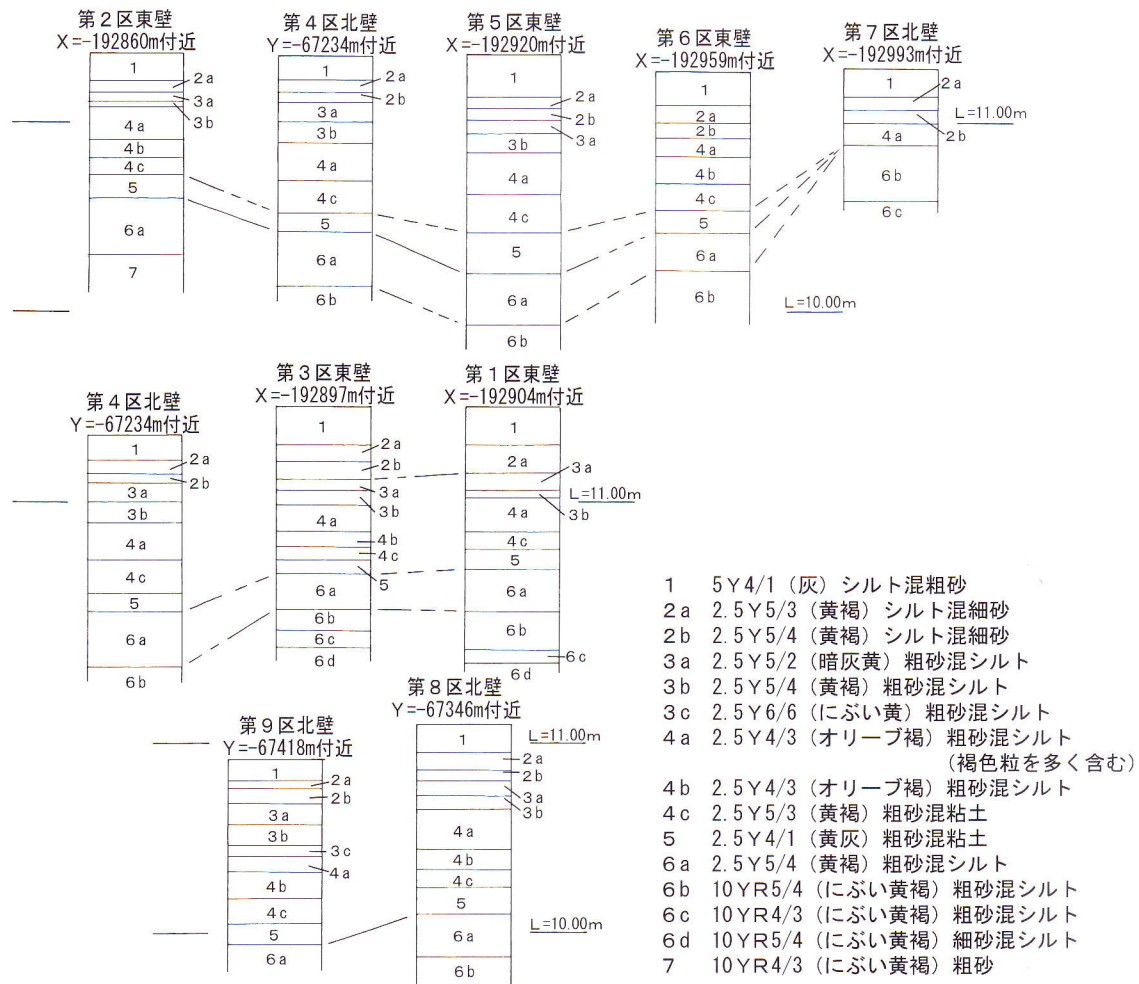


第2図 調査地区割図（数字番号は調査地区番号を示す。）

(2) 基本層序

調査地の基本層序については、当財団が行った第2～6次調査の層序を参考として褐色粒を多く含む鎌倉時代の堆積層（第4層）と飛鳥時代から奈良時代を中心とする遺構面のベース層（第6a層）を基準層ととらえてこれらの層位関係から堆積した時代を考慮し、各調査区の対応関係を考え、層位番号を付した。なお、各層位の堆積時期は、上位から現代の水田耕作土（第1層）、江戸時代の耕作土（第2層）、室町時代から江戸時代にかけての耕作土（第3層）、鎌倉時代の堆積と考えられる褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とするにぶい黄色系の粗砂混シルト（第4層）、飛鳥時代から平安時代にかけての堆積土（第5層）、弥生時代後期の堆積土（第6a層）の他、弥生時代中期と考えられる堆積土（第6b層）である。また今回の調査では遺物の出土は認められなかったものの、縄文時代晩期の堆積層と考えられる第6c層を第1・3・7・8区で検出し、さらに下層の状況を第1～3区において確認した。特に、第2区では、それまでのシルト質層とは異なるにぶい黄褐色系の粗砂層（第7層）を確認し、これまでの調査成果からみても無遺物層と考えられる。

なお、これらの土層対応関係を東西方向及び南北方向に分けて柱状模式図（第3図）に示した。また明瞭な遺構が検出できた調査区は、第1～5区及び第8・9区であり、その遺構面の対応も同図に示した。この状況から調査対象地を縦断する南北方向では、第4～6区にかけて谷状の地形が



第3図 調査地土層柱状模式図1

展開していることが分かり、対象地北半部の東西方向横断面図では先にふれた谷状地形が緩やかに東部に広がる傾向を示している。対象地南半部にあたる第8・9区の東西方向横断面図ではやや西に向けて下降する堆積を示しているものの、現地表面と平行する自然堆積の状況を示すものであり、比較的安定した状況であると思われる。

3. 遺構

今回の調査では大半の調査区において様々な時期の良好な遺構を検出した。

まず第1区では最も新しい時期である江戸時代の溝を第3層上面において検出した。また第2区では第5層上面及び第6 a層上面の2面の遺構面を検出した。この第6 a層上面の検出では、第4・5区においても溝を、第8・9区においても溝や土坑を検出した。また第3・4区では、下層の状況確認のために設定したサブトレンチ内部の第6 b層上面において弥生時代と考えられる遺構を検出した。

以下、調査区ごとに遺構等の概略を説明する。

〔第1区〕（第4図、図版8）

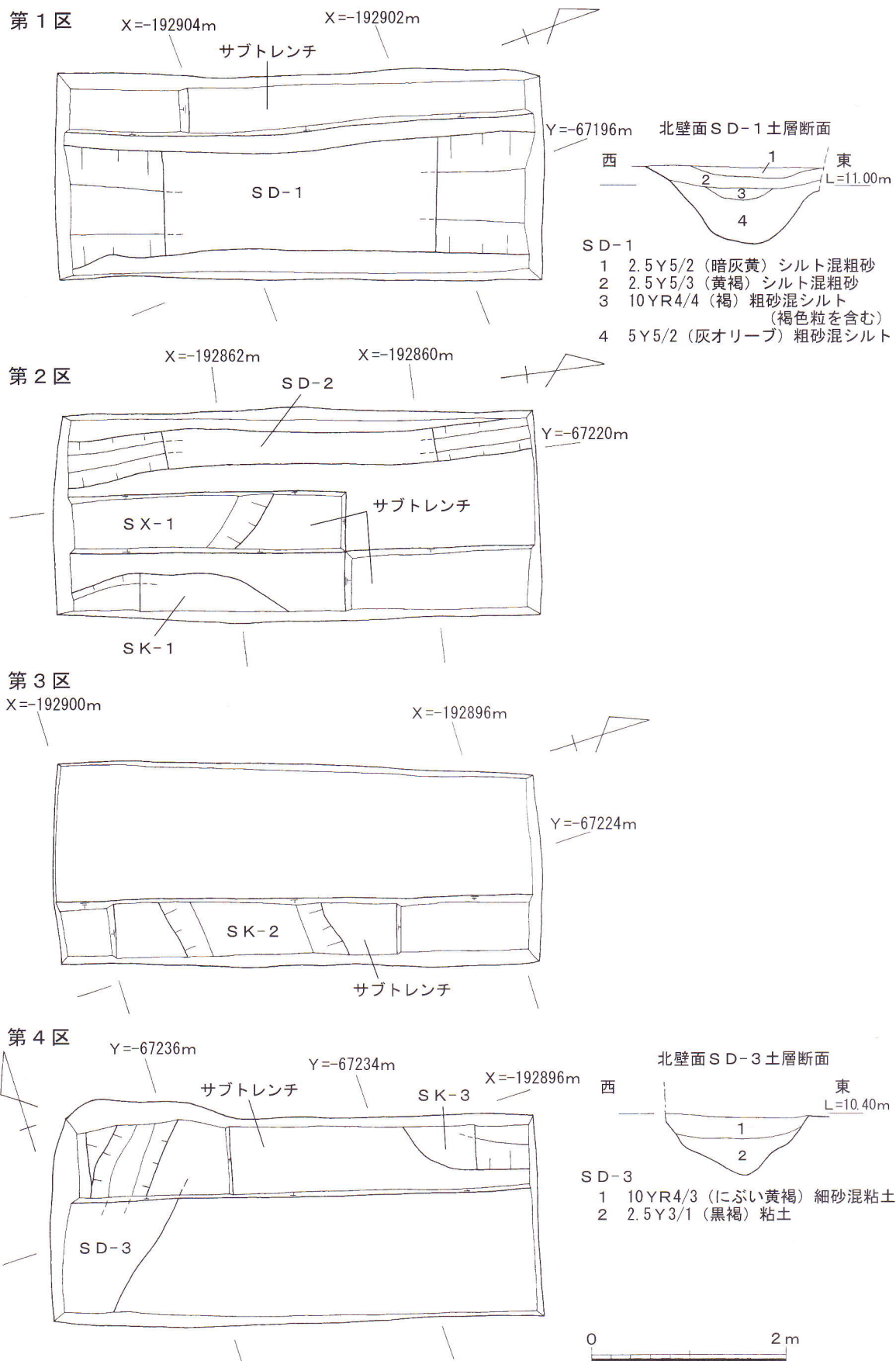
標高約11.20mの第3層上面において江戸時代に位置づけられる幅約1.2mの南北方向の溝1条（SD-1）を検出した（図版10）。この溝の調査は、南北両端部において長さ1m分を掘削して状況確認を行った。その結果、深さは0.75m前後のもので、底面の比高差から流路方向は北から南であると考えられる。また西壁直下に設定したサブトレンチにより、標高10.20mまで下層の状況確認を行ったが、遺構の確認には至っていない。

〔第2区〕（第4図、図版8）

標高約10.80mの第5層上面において鎌倉時代頃とみられる幅30～40cmの南北方向の溝1条（SD-2）と東壁直下に長さ2.2m以上の規模をもつ土坑1基（SK-1）を検出した（図版10）。SD-2は南北両端部において長さ1m分を掘削して状況確認を行った。その結果、深さは10cmのもので、底面の比高差ほとんどなく流路方向は不明である。SK-1は南東隅部約70cm程度を掘削したところ10cm前後の深さであることが確認できた。またこれらの遺構を回避して中央部に設定したサブトレンチ内部の第6 a層上面において落ち込み（SX-1）を検出した。SX-1はサブトレンチ内部全体の掘削を行った。その結果、緩やかに10cm程度落ち込み底面がほぼ水平となる遺構で、古墳時代頃のものと考えられた。また北東隅部に設定したサブトレンチにより、標高10.10mまで掘削を行った結果、標高10.30～10.40mの深さで今回の調査では最も古い堆積と考えられるにふい黄褐色系の粗砂層（第7層）を確認し、これまでの調査例からみて縄文時代以前の無遺物層と考えられた。

〔第3区〕（第4図、図版8）

第2区と同様の標高約10.70mの第6 a層上面において遺構検出を試みたものの遺構の検出には至らず、東壁直下にサブトレンチを設定して掘削を行った。その結果、標高約10.40mの第6 b層上面において幅1.4mの落ち込みと考えられる部分を検出し、土坑（SK-2）としてトレンチ内部の部分について掘削を行った。この結果、SK-2は緩やかに落ち込む20cm程度の深さをもつもので、出土遺物から弥生時代の範疇に収まるものと判断できた。またSK-2を避けその両端部をさらに掘削して標高10.10mの第6 d層上面まで調査を行ったが、遺構等の確認には至っていない。



第4図 第1～4区遺構平面図及び土層断面図

〔第4区〕（第4図、図版8）

第2・3区と同様の標高約10.50mの第5層上面において遺構検出を試みたものの遺構の検出には至らず、全体を第6a層上面（標高約10.40m）まで掘削を行い、再度遺構検出を行った。この状況においても確実な遺構の確認には至らず、北壁直下にサブトレンチを設定して掘削を行った。その結果、北西隅部に溝1条（SD-3）を検出した。このSD-3は、壁面観察等から第6a層上面からの遺構と判断でき、幅90cm以上、深さ60cm前後であることが判明した（図版10）。さらに標高10.10mの第6b層上面において長さ1.2m以上の土坑（SK-3）を検出し、東半部分を掘削した。この結果、SK-3は深さ15cm程度のもので、弥生土器が一定量出土した。

〔第5区〕（第5図、図版9）

標高10.10mの第6a層上面において幅0.7～1.0mの南北方向の溝1条（SD-4）とその溝に流れ込むとみられる幅30cmの溝（SD-5）を検出した（図版10）。SD-5は北端部において長さ0.5m分、南端部において長さ1m分を掘削して状況確認を行った。その結果、深さは約50cmで、底面の比高差から流路方向は南から北であると考えられる。覆土は、3単位に分けられ、下位層ほど粘性が強い。またSD-4は長さ60cm程度を掘削したところ15cm程度の深さであることが確認できた。ともに遺物の包含は少なく具体的な時期は不明であるものの、古墳時代から奈良時代までの範疇に収まるものと考えられる。また東壁直下に設定したサブトレンチにより、標高9.80mまで掘削を行ったが、遺構等の確認には至っていない。

〔第6区〕（第5図、図版9）

第6区は第1層の下面から掘削された近代以降の大規模な粘土採掘坑によって南北両端部が大きく攪乱されていた。中央部は、標高10.40mの第6a層上面において遺構検出を行ったものの遺構の検出には至らず、粘土採掘坑の掘削と東壁直下にサブトレンチを設定して掘削を行った。サブトレンチ内部は標高9.90mまで掘削を行ったが、遺構の確認には至っていない。

〔第7区〕（第5図、図版9）

第7区は今回の調査では最も掘削深の浅い調査区である。調査区南端部は第1層の直下が第6b層となり、この面が北側に向け緩やかに下降する状況が確認できた。この遺構面（第6b層上面）の標高は、南端部で11.10m、北端部で10.90mである。しかし、明確な遺構は検出されず南半部において近代以降の粘土採掘坑が存在し、また北端部において第4層の落ち込みを検出したに過ぎない。この両者を掘削した後、東壁直下においてサブトレンチを設定して掘削を行った。その結果、標高10.60mの第6c層上面まで掘削を行ったものの遺構の検出には至っていない。

〔第8区〕（第6図、図版9）

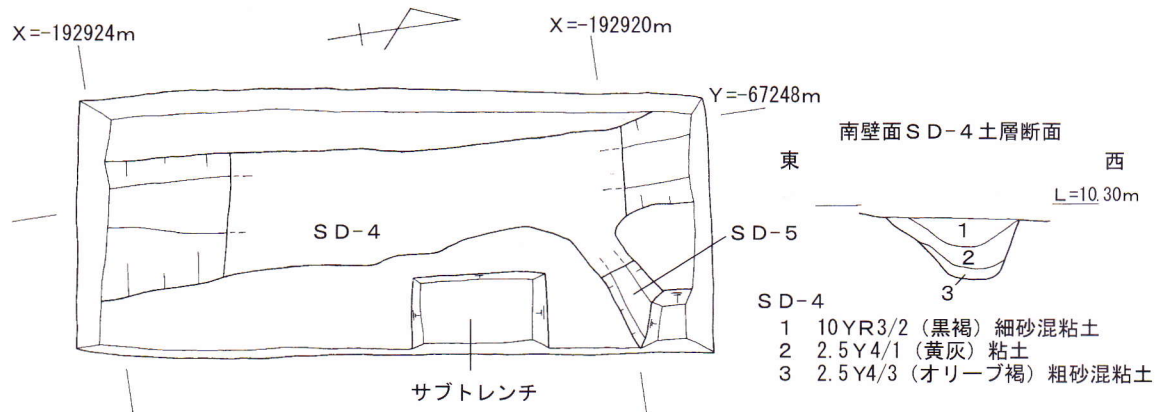
第8区は第5層上面において遺構検出を行ったものの遺構は検出されず、全面に第5層の掘削を行い第6a層の上面において再度遺構検出を行った。この結果、標高10.10～10.20mの第6a層上面において調査区を斜めに横切る幅40cm程度の東西方向の溝1条（SD-6）を検出した。SD-6は東西両端部において長さ1m分を掘削して状況確認を行った。深さは5cm程度と浅く流路方向は不明である。またSD-6を避け北壁直下及び西壁直下にサブトレンチを設定して標高9.70mまで掘削を行ったが、遺構等の確認には至っていない。

〔第9区〕（第6図、図版10）

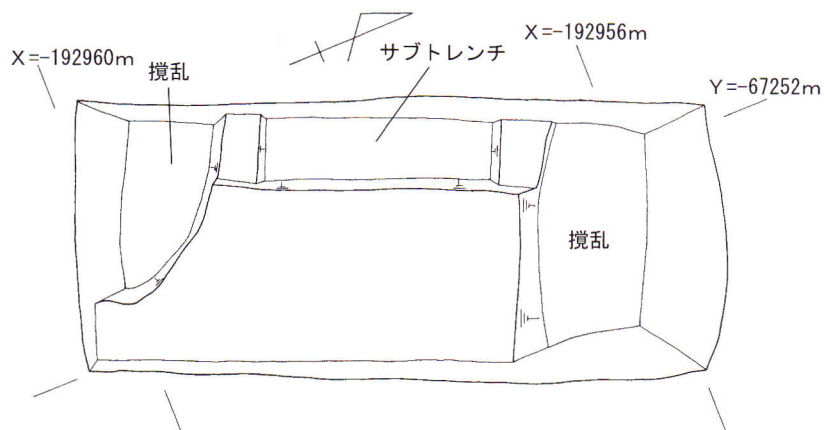
第9区は第8区と同様に第5層上面において遺構検出を行ったものの遺構は検出されず、全面に

第5層の掘削を行い第6 a層の上面において再度遺構検出を行った。この第5層には8世紀代を中心とする多量の土器が含まれていた。遺構検出の結果、標高10.00mの第6 a層上面において調査区南東隅に一边80cm以上の方形プラン（SK-4）を検出し、西側約1/2程度を掘削した。SK-4は5cm程度の深さで、底面はほぼ水平となる。出土遺物から平安時代の遺構と考えられることから第5層と前後する可能性があり、実際第5層上面からの遺構の可能性はある。

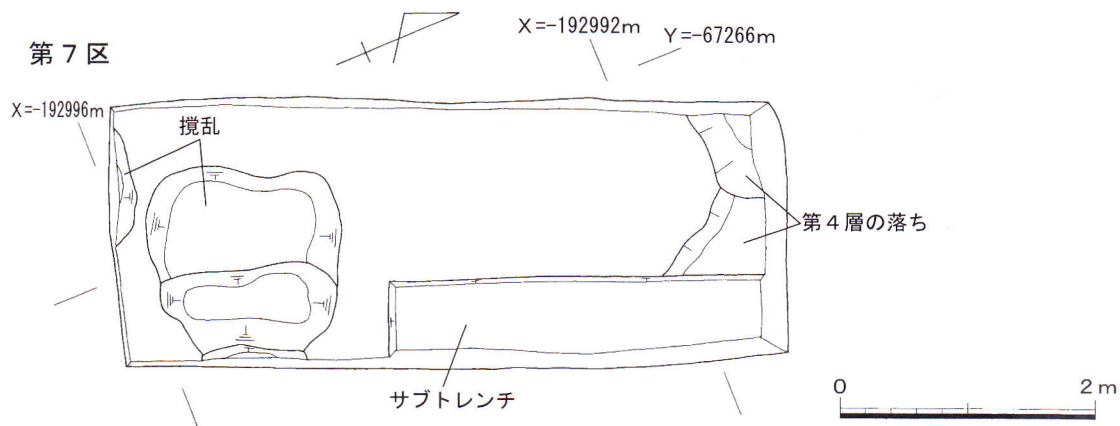
第5区



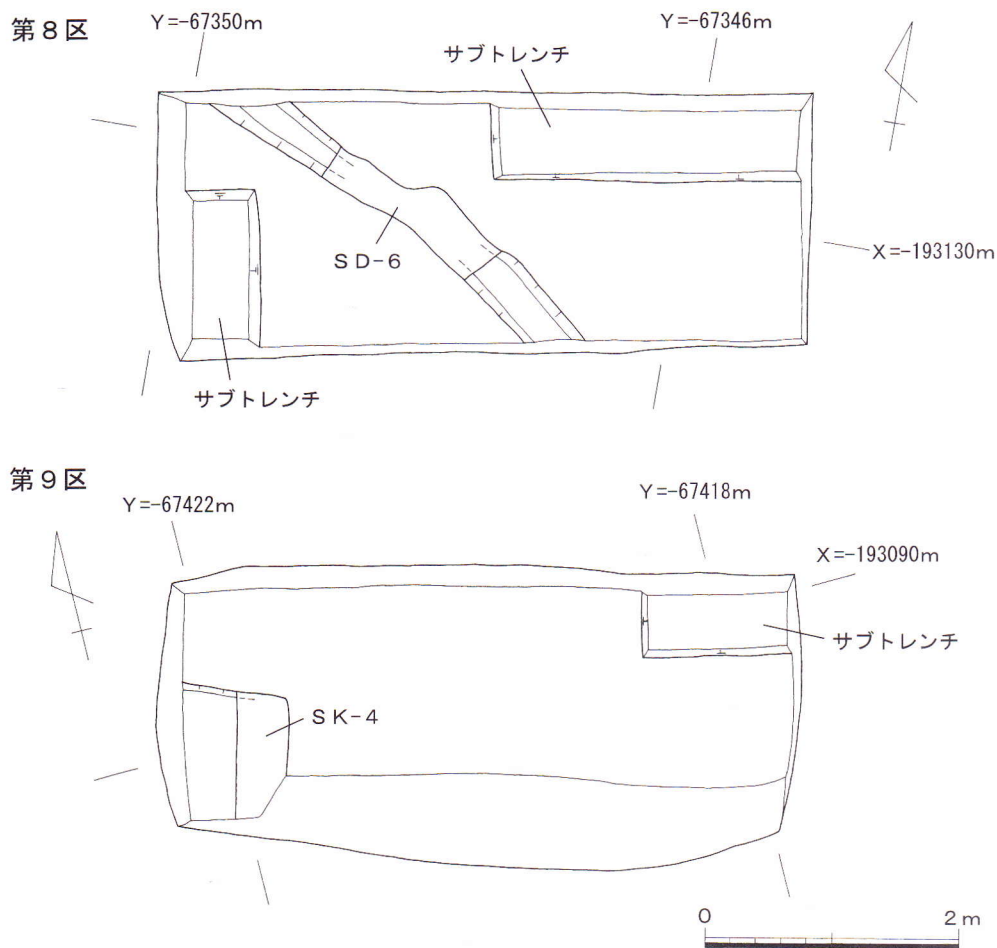
第6区



第7区



第5図 第5～7区遺構平面図及び土層断面図



第6図 第8・9区遺構平面図

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物収納コンテナ3箱分である。出土した遺物の種類には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世須恵器、中世土師器、中世陶器、近世陶磁器、瓦、土製品、石器、金属器などがある。これらの遺物は、各調査区の遺物包含層や遺構覆土から出土したものである。

遺物の出土傾向として、縄文土器及び弥生土器については第2～9区まで認められ、特に縄文土器は第9区が最も多く出土している。また石器の内、サヌカイト製の製品は出土していないものの、剥片は第1・3・4・7区で各1～2点出土している。礫石器は、砂岩川原石を用いた叩石が第9区で2点の出土がある。古墳時代から鎌倉時代までの遺物は、全区を通して一定量の出土が認められ、中でも第8・9区の第5層からの出土量が最も多い。江戸時代以降の遺物では、各調査区の上位層（第1・2層）及び第6・7区の粘土採掘坑に含まれていたものが一定量ある。

次に、今回出土した遺物の中で図示できるものとして、第2・3区第6a層から出土したものと第9区第5層から出土した土器・石器について説明する。

(1) 第2・3区第6a層出土遺物（第7図、図版12）

1・2は底部である。1は底径6.2cmの平底のもので、壺の底部と考えられるものである。2は底径4.7cmの平底で、甕の底部と考えられるもので、外面には平行タタキの痕跡が確認できる。と

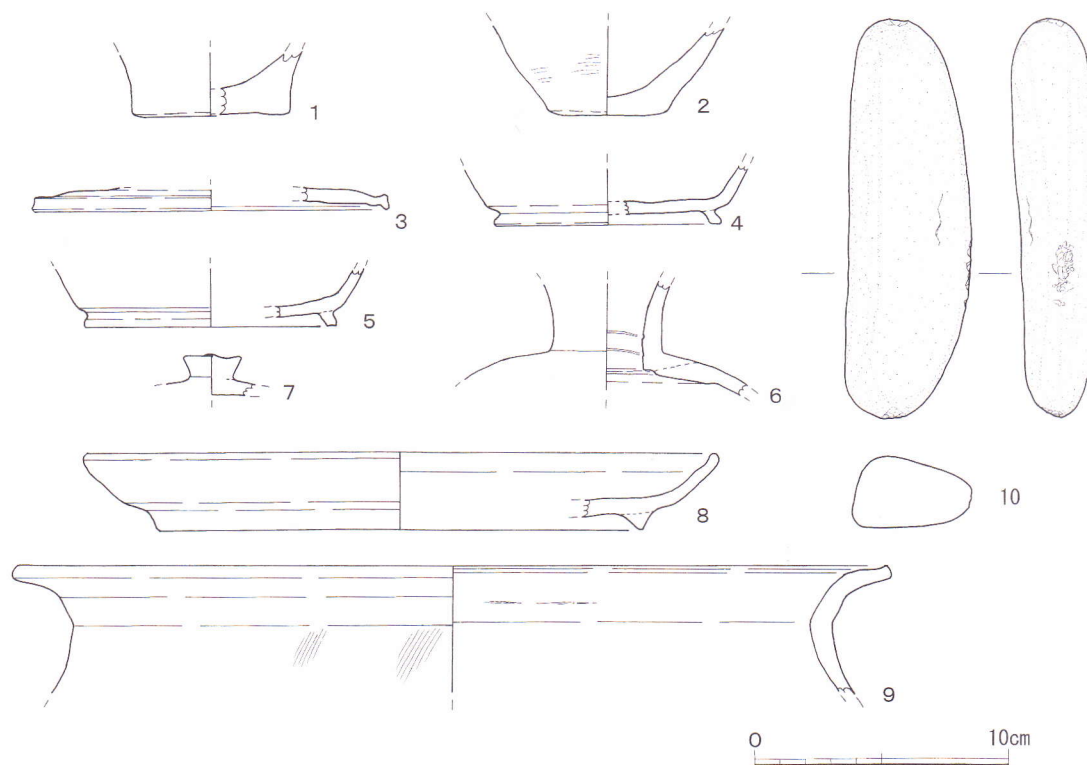
もに胎土は粗く結晶片岩が含まれ、赤褐色に発色している。時期的には弥生時代後期末頃のものと考えられる。

(2) 第9区第5層出土遺物(第7図、図版12)

3～6は須恵器である。3は杯蓋である。扁平な器形のもので口径14.0cmを測る。4・5は杯身である。双方とも底部周辺から大きく屈折して杯部を形成するもので、高台等の形状は類似する。底径は、4が8.8cm、5が10.0cmである。6は壺頸部の破片である。体部との接合痕が明瞭に観察できる個体で、頸部内面には成形時のマキアゲ痕とみられるラインが残る。焼成は4のみが軟質で、胎土は3がやや粗い。

7～9は土師器である。7は杯蓋のつまみ部であり、横断面が逆台形を呈するものである。8は口径24.6cm、底径19.0cm、器高3.0cmの法量をもつ大形の皿である。口縁部はやや屈曲しながらのび端部を内側に折り曲げる形状をもつ。9は口径34.2cmを測る甕口縁部の破片である。口縁部の形状は大きく外側に屈折させた後、端部を上方に肥厚させるもので、体部外面には不明瞭なもののタテ方向のハケ調整が観察できる。これらの焼成はすべて軟質で9の胎土には結晶片岩が含まれている。以上の土器は、すべて第5層出土の一括資料であり、8世紀代のものと考えられる。

このほか、砂岩川原石を用いた叩石(10)がある。この叩石は棒状の形状を呈するもので、上下両端部と側縁部に敲打痕が確認できるもので、法量は長さ15.7cm、幅4.6cm、厚さ3.0cm、重量380gである。



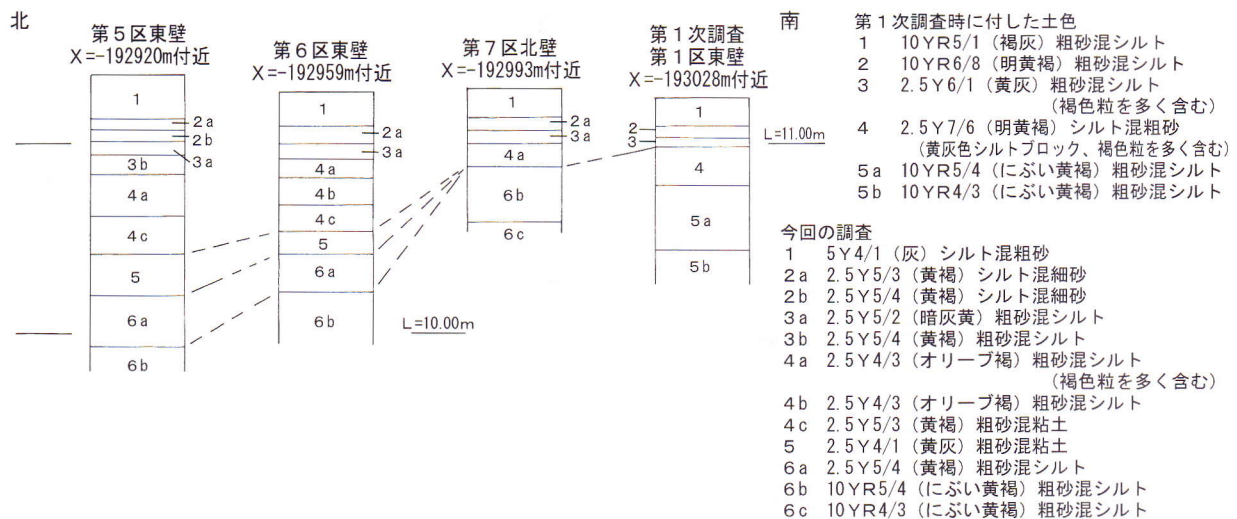
第7図 遺物実測図

5. まとめ

今回の調査目的は、開発計画範囲における遺構の有無等を確認するために実施した確認調査であった。その目的からみれば、第6・7区を除く7区画において様々な遺構を検出し、良好な成果を得たものといえる。また第8図に示した通り第5～7区の土層柱状模式図と第7区の約35m南側に位置する第1次調査時の土層柱状模式図を対比させると第6・7区の周辺にも図示した層位に遺構が存在するものと考えられる。また第3図の土層柱状模式図を踏まえると谷状地形にあたる部分には第5層上面（平安～鎌倉時代）、第6a層上面（古墳～奈良時代）、第6b層上面（弥生時代中期～後期）の3面の遺構面が存在することが明らかである。さらに、第1区で検出した江戸時代の溝は、第3層上面からの掘り込みであることからこの面を加えると4面となる。ただし、この溝の意味合いとしては、現在アスファルト敷となっている東側の道路の旧道路側溝とも考えられるもので、調査対象地全体に江戸時代の集落的な遺構が存在するものではないと思われる。また対象地南部の第8・9区で検出した遺構も、対象地北部と同様の第6a層上面から掘削された遺構であることから第6a層が遺構面としての基本層ととらえることができる。そして第9区で検出したSK-4から第5層上面にも遺構が存在する可能性が考えられよう。（井馬好英）

【参考文献】

- 『川辺遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター 1995年
「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ―平成13年度―』和歌山市教育委員会 2003年
『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書 ―県道と歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査―』財団法人和歌山県文化財センター 2005年
『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』財団法人和歌山市都市整備公社 2008年



第8図 調査地土層柱状模式図2

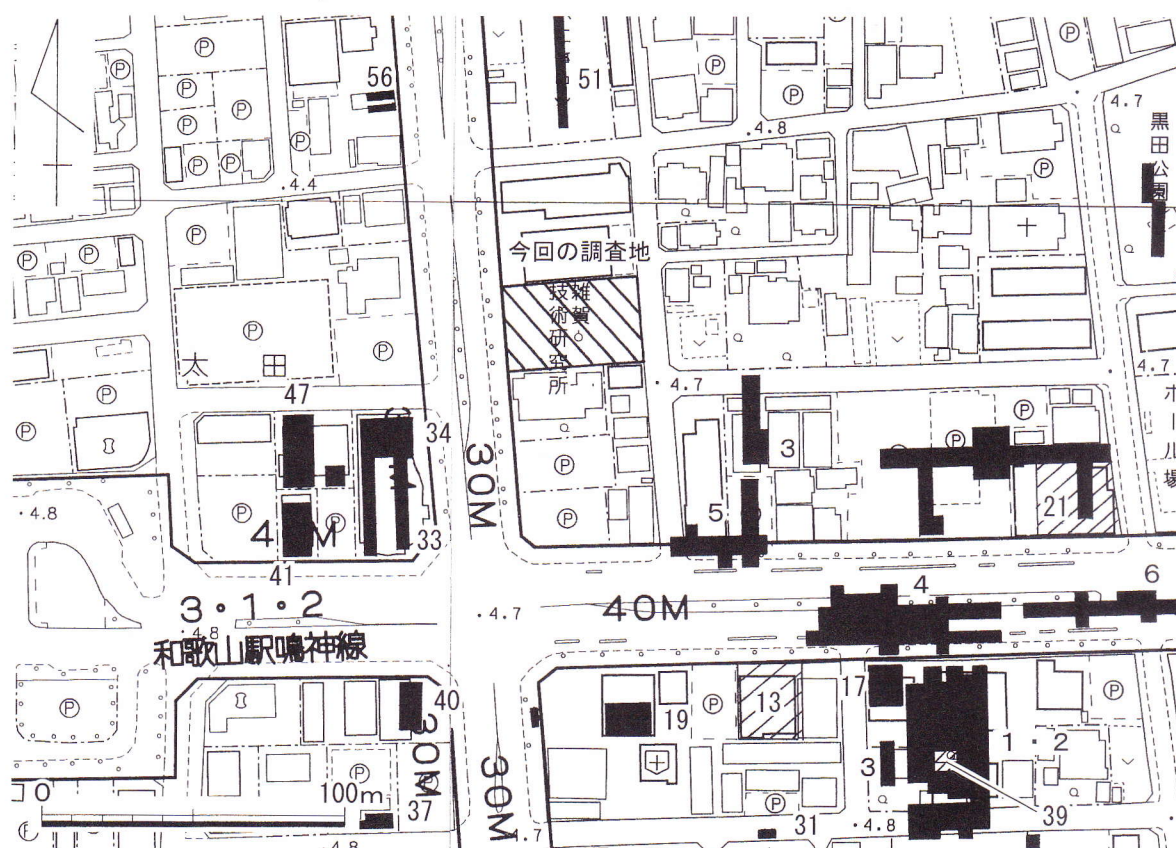
②太田・黒田遺跡 第60次確認調査（調査一覧17）

1. 調査の契機と経過

太田・黒田遺跡は、和歌山平野の紀ノ川南岸平野部に立地する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。太田・黒田遺跡が立地するJR和歌山駅の東側一帯は、標高4m前後を測る微高地にあたり、秋月や鳴神地区とともに平野部でも古くから人々が生活を営んできた地域である。そのなかでも太田・黒田遺跡は、東西500m、南北850mの範囲に広がる県内最大規模の集落遺跡であり、これまでに59次を数える発掘調査が行われている。

過去の調査では、弥生時代前期末の並走する2条の環濠や土坑、中期の竪穴住居及び井戸、同じく中期の水田や土器棺墓など弥生時代を中心とする遺構群のほか、古墳時代の竪穴住居や溝、井戸などの遺構群、奈良時代の溝や井戸、平安時代から江戸時代にかけての溝や土坑など多種におよぶ遺構群が検出されている。また遺物では、弥生時代のものとして絵画土器（高床建物・鹿）を含む多量の弥生土器、直柄広鋤及び一本平鋤などの木製農耕具、銅鐸や銅鏃などの金属器が出土しており、弥生時代以降では、古墳時代から江戸時代にかけての遺物も多量に出土している。さらに遺跡の南半は、日本三大水攻めのひとつとして室町時代に豊臣秀吉が水攻めを行った太田城跡の推定地にあたり、近年の調査研究によってその所在地についても明らかにされつつある。

今回の調査地は、奈良時代の大溝などが検出された第33・34次調査地の北東約60mに位置し、弥生時代前期の環濠のほか、古墳時代前期の竪穴住居や後期の溝、奈良時代の土坑などを検出した第51次調査地の南約60mに位置する（第1図）。



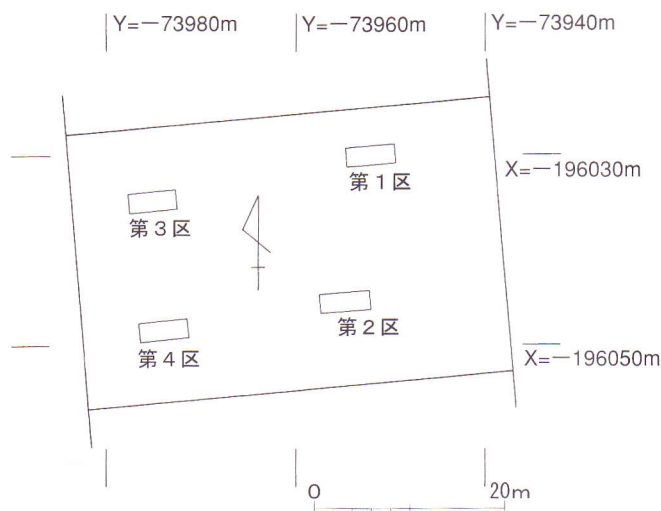
第1図 調査地位置図

調査は、和歌山市黒田字池ノ首75番地1・3地内におけるホテル建設に伴う開発計画に起因し、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡（遺跡番号327）の範囲内であったため、遺構の有無等を確認する目的で行ったものである。現地における調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて行った。また調査期間は、平成20年5月22日～平成20年6月6日までの約2週間で行った。

2. 調査内容

（1）調査の方法

今回の調査は、開発計画範囲約1300m²を対象に2×5m四方のグリッド調査区を4ヵ所設定して実施した（第2図）。重機による掘削は、第33・34次発掘調査成果を参考とし、遺構面直上まで慎重に行い、検出した遺物包含層及び遺構残存深を確認するための遺構掘削、並びにサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。なお遺構の掘削範囲については、和歌山市教育委員会と協議を行い検出範囲全体の一部とし、サブトレンチの掘削については遺構がみられない



第2図 調査地区割図

部分を対象として深掘りを行った。図面による記録は、各調査区に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（縮尺1/20）の作成を行った。各調査区の仮原点には、既存の3級基準点から基準点測量を行い旧国土座標（日本測地系）の数値を付した。そのほか土層の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T.P. 値）を基準とした。

（2）調査の概要

調査地の現況は、駐車場及び果樹園である（図版13）。調査地における基本層序については、現表土として調査地全面に40～60cmの厚さで造成土が堆積しており、この造成土を除去した下面が現代の耕作土（第1層）である。第2層は、厚さ3～13cmを測る暗灰黄色系の細砂混シルトである。第3層は、厚さ2～8cmを測る黄褐色系の細砂混シルトであり、鉄分の沈着面によって1～2単位に細分が可能である。

第4層は、厚さ3～12cmを測る黄褐色系の粗砂混シルトであり、鉄分の沈着面によって1～3単位に細分が可能である。この第4層は鎌倉時代の遺物を多く含む堆積土である。第5層は、厚さ最大13cmを測る黄灰色系の細砂混シルトであり、調査地の北東に設定した第1区では存在せず、南西に位置する第4区では厚く堆積することを確認した。この第5層は奈良時代から平安時代にかけての堆積土と考えられる。

次に、第6層以下の各堆積土については、第3区北壁際に設定したサブトレンチにおいて確認したものである。第6層は、厚さ14～18cmを測るにぶい黄橙色細砂混シルトである。この第6層は包含される遺物から弥生時代中期の堆積土と考えられる。第7層は、厚さ約25cmを測るにぶい黄褐色シルトである。この第7層には弥生土器の小片がごく少量含まれる。第8層以下の各堆積土は無遺物層である。第8層は、16～22cmを測るにぶい黄褐色シルトである。第9層は、厚さ28～37cmを測る黄褐色シルト混粘土であり、第10層は、炭を含む黄褐色系のシルト混粘土である。

3. 遺構

遺構は、第5層上面（第1遺構面）、第6層上面（第2遺構面）、第7層上面（第3遺構面）において検出した。このうち第3遺構面は、第4区サブトレッチ北壁面土層堆積状況の観察において、炭層の堆積を確認したことから遺構面と判断した。また、第2遺構面は各調査区において認められるもので、弥生時代から奈良時代にかけての遺構面である。さらに第1遺構面は、第3区北壁面土層堆積状況の観察において第5層上面から鎌倉時代の遺構が掘削されていることから鎌倉時代以降の遺構面と判断したものである。ただし、第5層が存在しない第1区では、第2遺構面である第6層上面において鎌倉時代の遺構が検出される状況となる。

以下、各調査区で検出した遺構についてその概要を記述する。

〔第1区検出の遺構〕（第3図、図版14）

第1区では、第6層上面において奈良時代から平安時代のものとみられる溝（SD-6）及び、鎌倉時代の溝（SD-5）のほか、ピット（P-7～29）や不定形の落ち込み（SX-2）を検出した。遺構検出面の標高は、2.80m前後を測る。

そのうち、SD-6は調査区のほぼ中央部を東西に横切るもので、幅60～80cm、深さ12cm前後を測るものである。遺構覆土は褐灰色粗砂混シルトの単一層である。遺構の時期は、覆土内に平安時代の土師器皿（第5図13）とみられるものが含まれることやSD-5との重複関係から、奈良時代から平安時代にかけてのものとみられ最終埋没が平安時代である可能性が高い。SD-5は調査区を北西から南東に横切るもので、幅0.6～1.1m、深さ17cm前後を測る。遺構覆土は黄灰色細砂混シルトの単一層である。遺構の時期は、覆土内に含まれる遺物から鎌倉時代のものと考えられる。そのほか、平面形が一辺30～40cmを測る隅丸方形を呈し、遺構検出時に柱の痕跡が確認できたものとしてP-8・13～17がある。

〔第2区検出の遺構〕（第3図、図版15）

第2区は、西半部が地表下約1.5mまで攪乱による削平を受けているため東半部のみ調査を行った。遺構は、第5層上面では認められず、第5層を除去した下面において弥生時代後期の落ち込み（SX-3）や古墳時代前期の溝（SD-7）とそれに先行するピット（P-30）のほか、平面形が円形を呈するとみられる土坑（SK-4）などを検出した。遺構検出面の標高は約2.70mを測る。

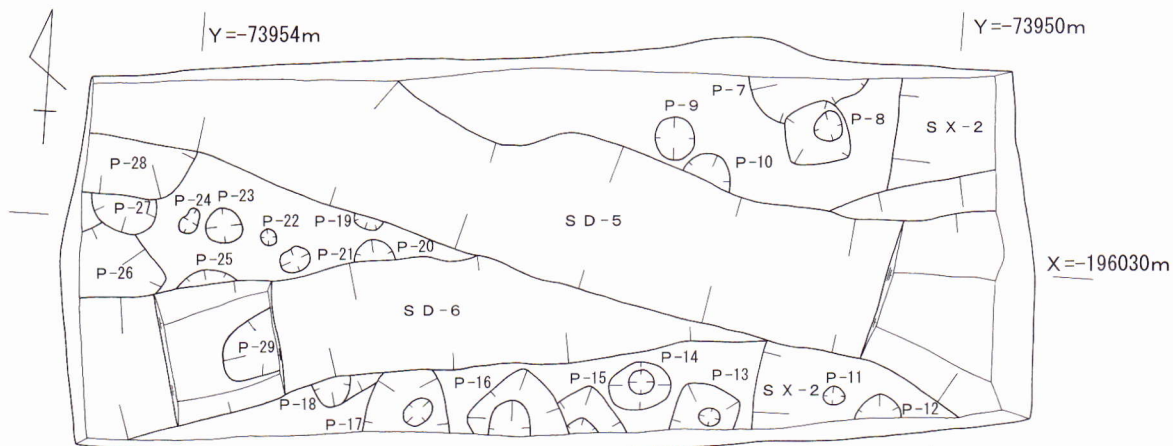
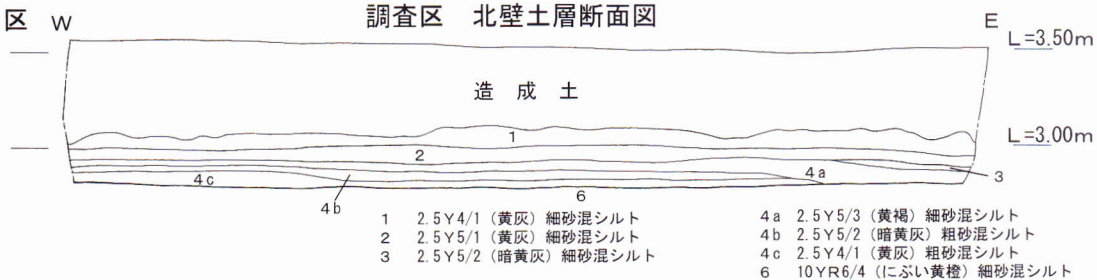
そのうち調査区全面において検出したSX-3は、攪乱東壁面の観察で2単位に細分できる黒褐色細砂混シルトが深さ約50cm以上堆積するものである。この遺構覆土には、弥生時代後期前葉の弥生土器高坏（第5図7）が含まれている。またSD-7は幅1.3m以上、深さ25cm前後を測るもので、遺構覆土は黒褐色粗砂混シルトの単一層である。覆土内には、弥生時代の結晶片岩製柱状片刃石斧（第6図17）や古墳時代前期から中期のものと考えられる土師器高坏（第5図10）が含まれている。これらの遺構は遺構覆土が類似することから、SD-7はSX-3の最上層として把握することも可能である。

〔第3区検出の遺構〕（第4図、図版16）

第3区では、第6層上面において弥生時代のものとみられる溝（SD-4）や土坑（SK-3）、ピット（P-5・6）のほか不定形の落ち込み（SX-1）を検出した。また古墳時代のものでは、古墳時代後期のものと考えられる竪穴住居（SB-1）や遺構の重複関係から古墳時代の範疇におさまるとみられる溝（SD-3）及び土坑（SK-2）などを検出した。さらに第5層上面では鎌倉時代の井戸（SE-1）を検出した。遺構検出面の標高は、第6層上面では2.65m前後を測り、第5層上面では2.75m前後を測る。

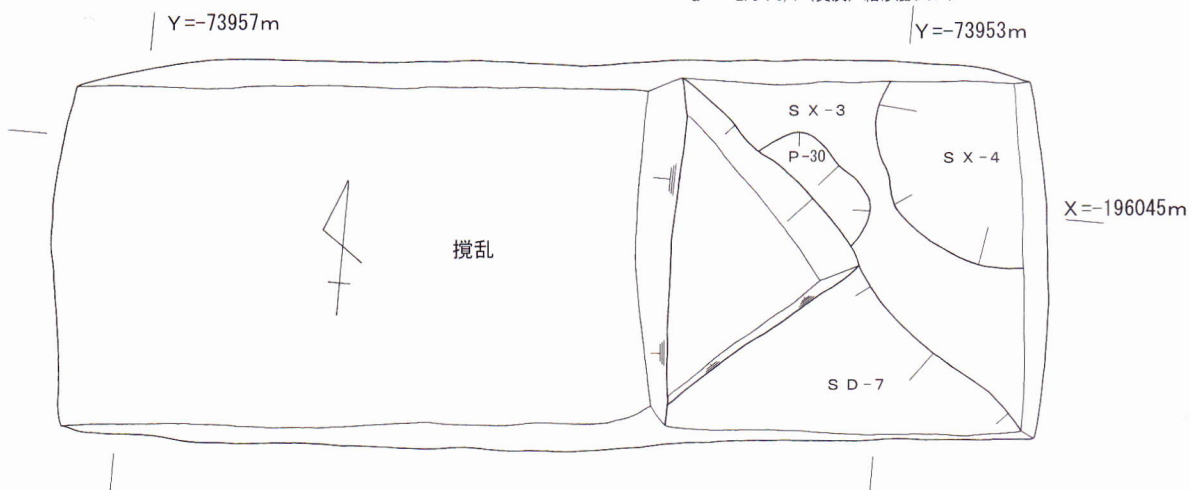
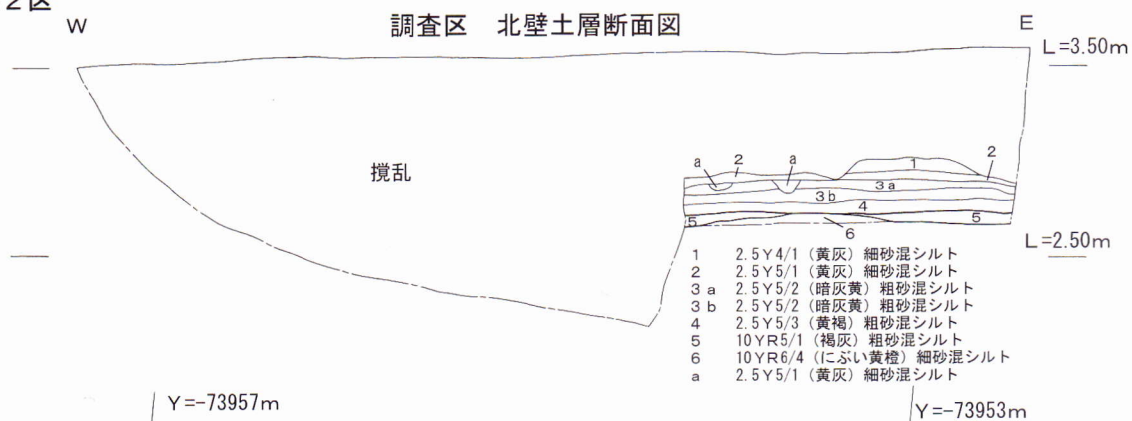
第1区 W

調査区 北壁土層断面図



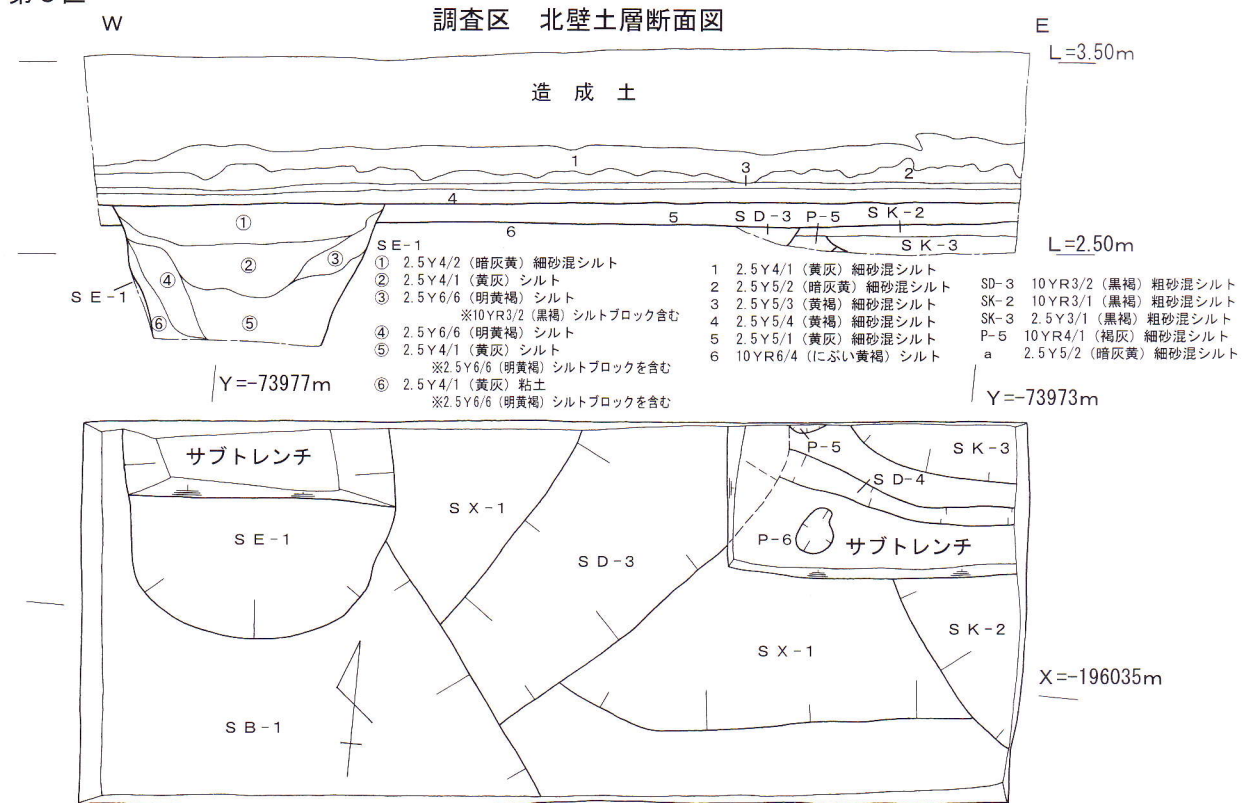
第2区 W

調査区 北壁土層断面図

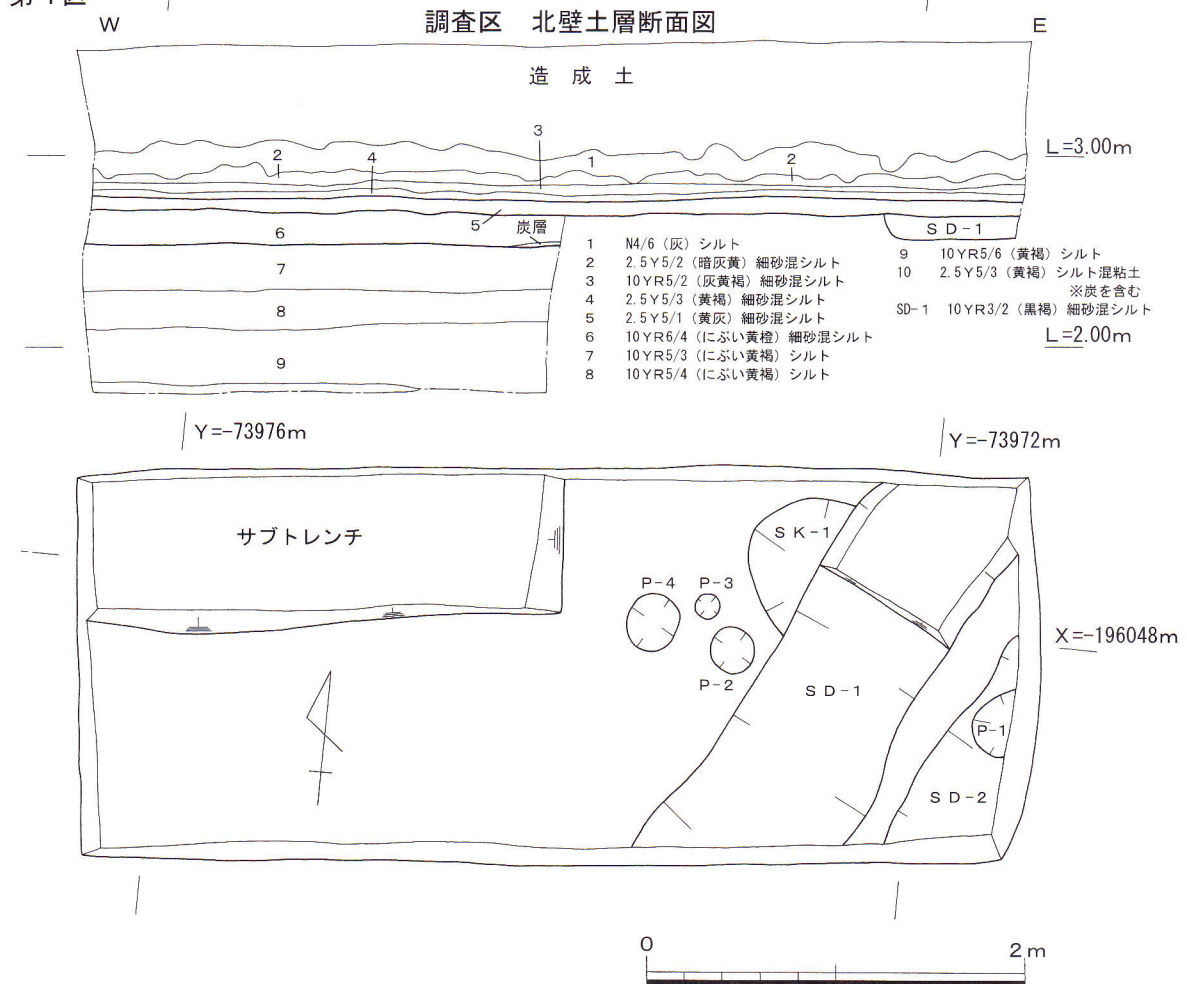


第3図 第1・2区遺構全体平面図及び土層断面図

第3区



第4区



第4図 第3・4区遺構全体平面図及び土層断面図

まず第6層上面の遺構として、調査区の北東隅部において検出したSD-4は、幅8～16cmを測るもので、やや弧状を呈することから竪穴住居の壁溝となる可能性がある。遺構覆土は黒褐色細砂混シルトである。またSD-3は幅0.6～1.0mを測るもので、遺構覆土は黒褐色粗砂混シルトの単一層である。さらにSB-1は、東側掘方ラインを検出したもので遺構覆土は黒褐色粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内に古墳時代後期の須恵器を一定量含むことから、埋没時期が当該期となる可能性がある。

次に第5層上面検出の遺構として、調査区の北西隅で検出したSE-1は、直径約1.4m、深さ74cm以上を測るもので、調査区北壁際において深さを確認するため一部掘削を行った。その結果、遺構覆土は6単位以上に細分が可能である。遺構の時期は、覆土内に含まれる遺物から鎌倉時代のもと考えられる。

〔第4区検出の遺構〕（第4図、図版17）

第4区では、サブトレンチ北壁における土層観察の結果、第7層上面において厚さ約2cmを測る炭層を確認したことから、この第7層上面において遺構が存在するものと判断した。また第6層上面では、遺構の重複関係から弥生時代中期前葉のもと考えられる土坑（SK-1）、また中期中葉の溝（SD-1）のほか、溝（SD-2）やピット（P-1～3）を検出した。これらの遺構は、調査区の東半部に集中し、西半部では検出することができなかった。遺構検出面の標高は、第7層上面では2.55m前後、第6層上面では2.70m前後、第5層上面では2.75m前後を測る。

そのうち、SD-1は幅約80cm、深さ12cm前後を測るもので、遺構覆土は黒褐色細砂混シルトの単一層である。遺構の時期は、覆土内に弥生時代中期中葉の弥生土器壺（第5図2・4）が含まれていることから、埋没時期が当該期となる可能性がある。

またP-1は直径35cm前後を測るもので、遺構覆土は黒褐色細砂混シルトで炭を含むものである。P-4は直径30cmを測るもので、遺構覆土は黄灰色シルトである。このP-4は、第6層上面において検出したものの、第3区第5層上面において検出したSE-1の遺構覆土と類似するものであることから、第5層上面から掘削された鎌倉時代の遺構とみられるものである。

4. 遺物

遺物は、各時代の遺構覆土や第2～6層の遺物包含層から収納コンテナに約5箱分が出土した。これらの遺物には、弥生時代前期から後期にかけての弥生土器をはじめ、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中世土師器・国産陶磁器・瓦・土製品・石器・石製品がある。

以下、これらの遺物のうち主なものについてその概要を記述する（第5～7図、図版18）。

（1）土器類（第5図）

1～8は弥生土器である。1は直口壺であり、口径11.8cmを測る。口縁部から頸部にかけてのもので、口縁部下に断面三角形の突帯を1条めぐらすほか、口縁端部を内側に肥厚させている。色調は淡赤褐色である。2は広口壺であり、口径12.6cmを測る。口縁端部から頸部にかけてのもので、頸部に突帯がめぐらされているほか、口縁部は水平方向に屈曲させ端部を上下に肥厚させている。また口縁端部側面にはクシ描波状文の後、円形浮文を貼り付け、さらに口縁部内面にはクシ描きによる扇形の列点文が施されている。外面の調整は頸部にタテ方向のヘラミガキがみられ、口縁部外面及び内面の調整はヨコナデによって仕上げられている。色調は淡褐色から黒褐色で、胎土には結晶片岩が含まれている。これら1・2の時期は弥生時代中期中葉のもと考えられる。

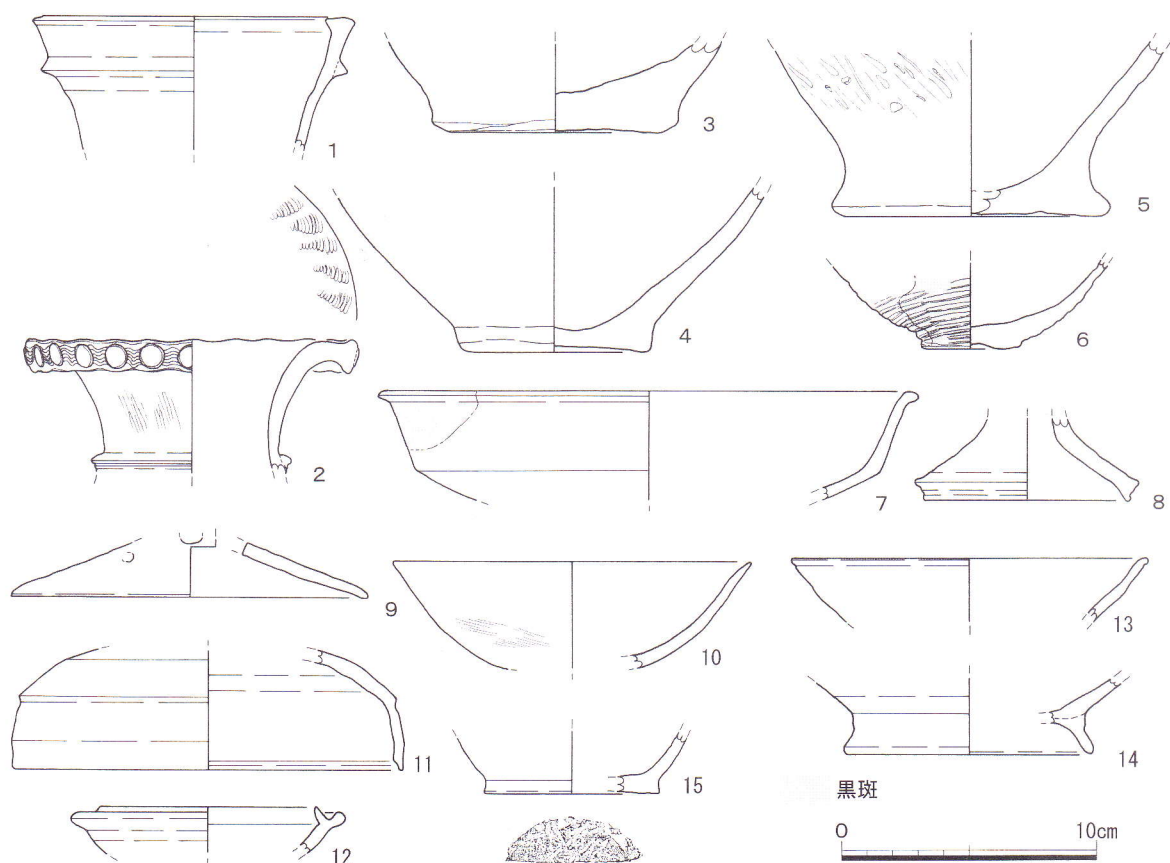
3・4は壺の底部である。3は底径9.6cmを測るもので、内外面の調整は摩滅のため不明瞭であ

る。色調は灰黄褐色で、胎土には結晶片岩が含まれている。4は底径7.3cmを測るもので、底部から体部下半が遺存するものの、内外面の調整は器表面が剥離しており不明瞭である。色調は淡赤褐色で、胎土には結晶片岩が含まれている。

5・6は甕の底部である。5は紀伊型甕であり、底径10.0cmを測る。底部から体部下半にかけて遺存するもので、外面の調整は底部付近をナデによって仕上げ、体部下半にはタテ方向のヘラケズリを施すものである。また内面の調整にはナデが施されている。色調は淡赤褐色で、胎土には結晶片岩が含まれている。6は底部から体部下半が遺存するもので、底面がやや凹むものである。底径は3.8cmを測る。外面には成形時のタタキが明瞭にみられ、内面の調整はナデが施されている。また外面には黒斑が認められる。色調は灰黄褐色から黒褐色であり、胎土には結晶片岩が含まれている。これらのうち、6は弥生時代後期末から古墳時代初頭のものとみられ庄内式併行期のものと考えられる。

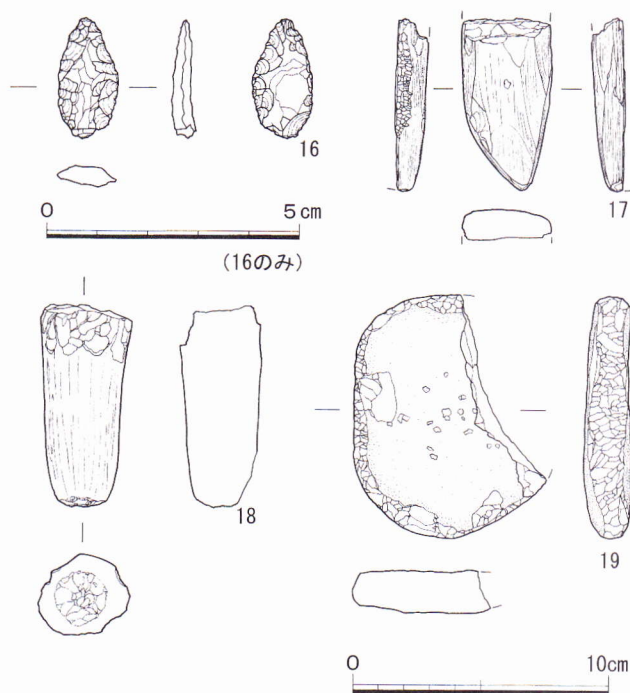
7・8は高杯である。7は口縁部と杯部との境を屈曲させ、明瞭に稜線がつくり出されているもので、口径20.6cmを測る。内外面の調整は器表面の剥離によって不明瞭である。色調は赤褐色であり、胎土には結晶片岩が含まれている。8は脚部で、脚部径8.0cmを測る。内外面の調整にはヨコナデが施されている。色調は乳褐色で、胎土には結晶片岩が含まれている。これらのうち、7は弥生時代後期前葉のものと考えられる。

9～12は古墳時代から飛鳥時代の土師器及び須恵器である。9・10は土師器高杯である。9は「ハ」の字状に開く脚部で、直径1.0cmを測る円孔が二段に穿たれている。脚部径は14.0cmを測る。内外面の調整は摩滅のため不明瞭である。色調は明褐色であり、胎土は精良である。10は口縁部か

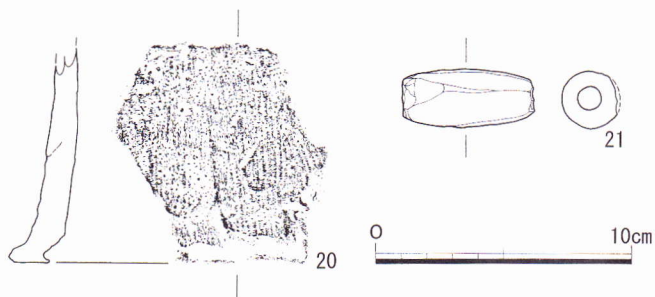


第5図 遺物実測図1

ら杯部にかけて遺存するもので、口径14.0cmを測る。外面の調整は剥離のため不明瞭ではあるものの、外面には部分的にヘラミガキが残存している。色調は赤褐色であり、胎土には結晶片岩が含まれている。これらのうち、10は古墳時代前期から中期にかけてのものと考えられる。11・12は須恵器である。11は杯蓋であり、口径15.2cmを測る。口縁端部から天井部の約1/2が遺存するもので、天井部と口縁部の境には稜線が明瞭に認められ、また口縁端部内面には沈線がめぐるものである。外面の調整は、天井部の約1/2の範囲に回転ヘラケズリが施されており、そのほかはヨコナデによって仕上げられている。色調は淡灰色である。8は杯身であり、口径8.4cmを測る。口縁部から杯部上半にかけてのもので、口縁部は斜め上方へ短く立ち上がり、受け部の先端を丸くおさめるものである。色調は灰色である。これらの時期については11が古墳時代後期初頭（MT-15型式）、12が飛鳥時代（TK-217型式）に比定できると考えられる。



第6図 遺物実測図2



第7図 遺物実測図3

13～15は、平安時代の土師器及び須恵器である。13・14は土師器である。13は皿で、口径13.8cmを測る。内外面の調整は摩滅のため不明瞭である。色調は淡黄褐色である。14は皿または杯とみられるもので、高台部から体部下半にかけて遺存する。高台径は9.6cmを測る。内外面の調整はヨコナデによって仕上げられている。色調は淡褐色である。15は平底の須恵器壺の底部である。底径は6.9cmを測る。内外面の調整はともにヨコナデが施されており、底面には回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。

これらの遺物の出土位置は、1が第3区SB-1、2・4が第4区SD-1、3・8・12が第3区第5層、5が第3区SX-1、6が第1区SD-5、7が第2区SX-3、9・11・14・15が第2区第5層、10が第2区SD-7、13が第1区SD-6である。

(2) 石器・石製品 (第6図)

16は、サヌカイト製の凸基式打製石鏃で、残存長2.3cm、最大幅1.2cmを測り、重量は1.4gを量る。主に先端から基部に向かって剥離調整を行うもので、裏面中央には大剥離面を残す。17は結晶片岩製の磨製柱状片刃石斧であり、刃部及び基部にかけては摂理にそって縦方向に破損し、また基

部を欠失するもので、残存長は6.8cm、残存幅1.2cm、厚さ3.5cmを測り、重量は56gを量る。石材の表面は研磨によって滑らかに成形されているものの、背部には敲打痕が認められることから、石斧として使用途中で破損し、その後叩石として再利用されたものと考えられる。18は使用途中で破損した砂岩製石杵の基部とみられるもので、破損部の稜線を打ち欠き、反対側の先端部を叩石または磨石として使用したものである。全長は7.9cm、最大幅3.6cmを測り、重量は124gを量る。石材の表面は縦方向の研磨によって滑らかに成形されており、先端部には研磨痕のほか敲打痕が認められる。19は、楕円形の扁平な砂岩礫の周縁に敲打痕が認められる叩石で、全長9.5cm、最大幅7.3cm以上、厚さ1.7cmを測り、重量は169.3gを量るものである。この石材の平滑面には一部に擦痕も認められることから、磨石としても使用されたものと考えられる。

これらの遺物の出土位置は、16が第1区第4層、17が第2区SD-7、18が第3区壁面調整時、19が第2区第5層である。

(3) 土製品 (第7図)

20はカマドの脚部である。外面の調整にはタテ方向のハケが施され、内面の調整はナナメ方向のナデである。色調は淡褐色であり、胎土には結晶片岩を含む。

21は管状土錘であり、全長5.1cm、最大幅2.2cm、紐通し孔の直径は9mmを測る。またその重量は27.2gを量る。色調は灰褐色から黒灰色である。

これらの遺物の出土位置は、20が第2区第5層、21が表採遺物である。

5. まとめ

今回の調査結果から、調査対象地には弥生時代中期初頭から前葉にかけての遺構検出面と考えられる第7層上面及び、弥生時代中期前葉から奈良時代及び鎌倉時代にかけての遺構検出面である第6層上面（第5層の堆積が確認できない第1区では第6層上面において鎌倉時代の遺構が認められる）、また鎌倉時代以降の遺構検出面である第5層上面という合計3面の遺構面を確認することができた。ただし第7層上面は、第3区サブトレンチ北壁面における炭層の堆積を遺構と判断した場合に設定できるものである。

遺構の検出状況として、第1区及び第3区では調査区全面に遺構が高密度で分布するのに対し、第4区西半部では全く認められなかった。これについては弥生時代中期以降の遺構面である第6層上面の標高が、第1区では約2.80m、第2～4区では2.70m前後を測り、微地形として第1区周辺が最も高所に位置し、第4区周辺に向かって低くなることが関係していると考えられる。言い換えれば、地形的に低所となる調査対象地南西部に向かって遺構密度が低くなると考える。このような微地形を示すものとして、第5層の堆積が第1区では存在せず、第4区では厚く堆積することがあげられる。

過去の調査における遺構の分布傾向として、調査地の南西に位置する第34・47次調査地点では調査面積に対する遺構密度が低く、検出遺構についても溝などが主体となるのに対し、調査地の北に位置する第51次調査地点では、弥生時代から鎌倉時代にかけての竪穴住居や溝、土坑など生活の痕跡を示す遺構が高い密度で検出されている。よって、今回の調査対象地での遺構分布の中心は、北及び北東部に広がる可能性を指摘することができる。（藤藪勝則）

③鳥井遺跡確認調査（調査一覧41）

1. 調査に至る経緯と経過

鳥井遺跡（遺跡番号92）は、紀ノ川下流北岸の標高7.0m前後の河岸段丘に立地する。遺跡は南北約250m、東西約200mの範囲をもつもので、河岸段丘でも縁辺部にあたる地点に位置し、土師器や須恵器が表採された遺物散布地として周知されている（第1図）。

今回の調査契機は、まず遺跡の東側隣接地において造成工事が計画され、開発対象地の西端部が遺跡の範囲に入っていたことから、工事に先立ち、和歌山市教育委員会による遺跡範囲確認のための調査が行われた（本書P11・（3）③）。確認調査では、遺構を検出したことから、本開発対象地は遺跡の範囲内であることが明らかとなった。

その後、本開発対象地において建物建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施することになった。この調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市都市整備公社が同教育委員会の指導のもと委託を受けて確認調査として実施したものである。

調査は対象面積約40m²を平成20年8月21日から同年9月11日までの期間で行った。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

調査地は、遺跡範囲東端部に位置し、現況は造成地であった（第1図、図版19）。

調査区は、開発予定地内に、幅2.0m、長さ4.0m、面積8.0m²の調査区を5ヵ所設定し、北東か



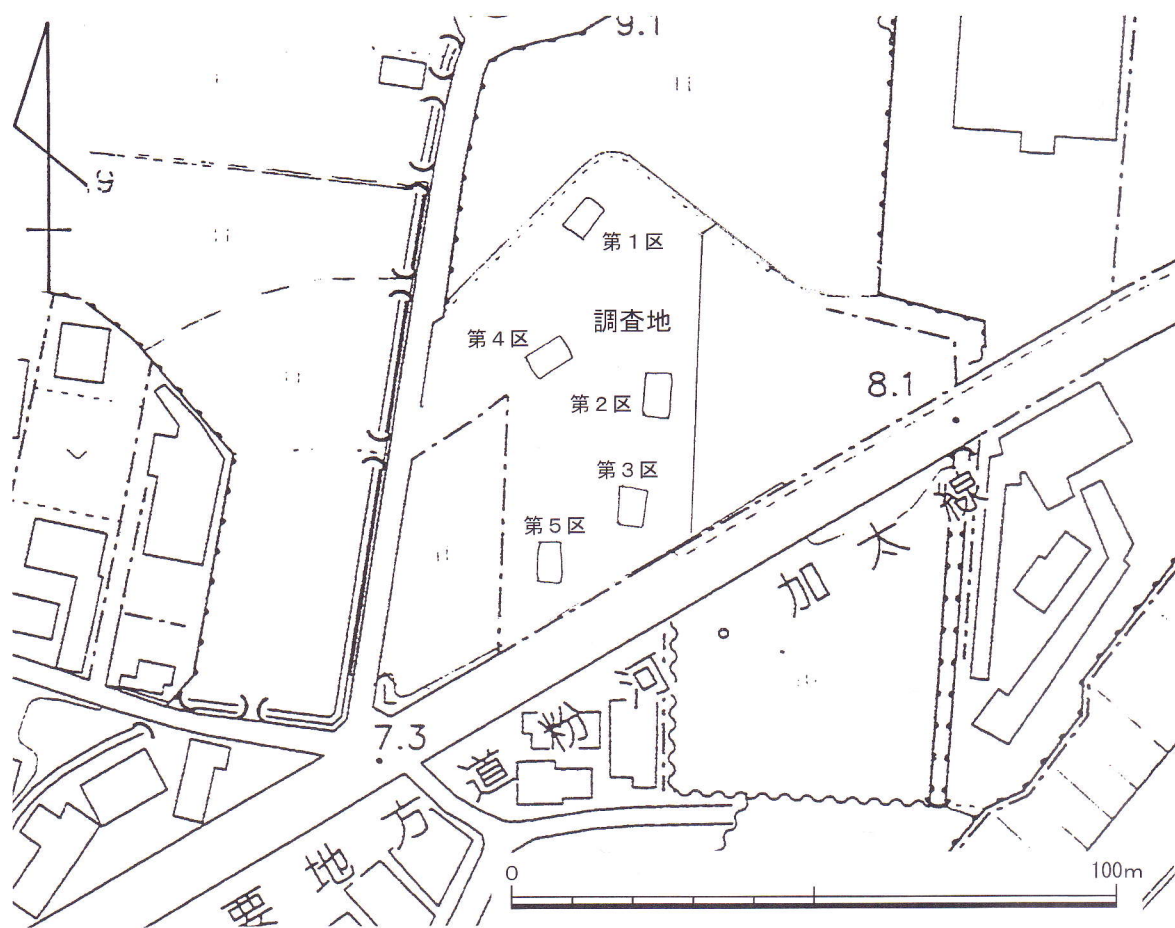
第1図 鳥井遺跡周辺の遺跡分布と調査地位置図

ら第1～5区とした(第2図)。

まず、機械掘削を行ったが、第1・4区で造成土の深さが約30cmであったのに対して、第2・3・5区においては約1.4mの厚さを測り、調査地の旧地形が二単位の比高差のあるものであったことが判明した。機械掘削は各調査区において、土層堆積単位毎に慎重に行い、各層位単位での遺物採取に努めた。第1区は地表面からの掘削深約1.5m、第4区は同約1.7mにおいて遺構を検出した。第2・3・5区においては、遺構を検出しなかったため、地表面からの掘削深約2.0mまで掘削を行った。

各調査区において、遺構検出作業を行った結果、第1・4区の第10層上面で遺構を検出した。また、壁面観察により第8層上面にも遺構の存在を確認した。第2・3・5区においては遺構を検出なかったため、各調査区の壁際2面に幅50cmの深掘り側溝(サブトレンチ)を設定し、地表面からの深さ約2.2mで無遺物層とみられる土層を確認した。遺構については一部を掘削し、規模の確認や出土遺物の採取を行った。

記録保存の方法は、調査範囲内に国土座標軸(世界測地系)を基準とした値を設置し、遺構実測の基準とした。遺構平面図と土層堆積図は縮尺1/20で作成した。なお遺跡の水準は国家水準点(T.P. 値)を基準とし、土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。



第2図 調査地区割図

(2) 調査の概要

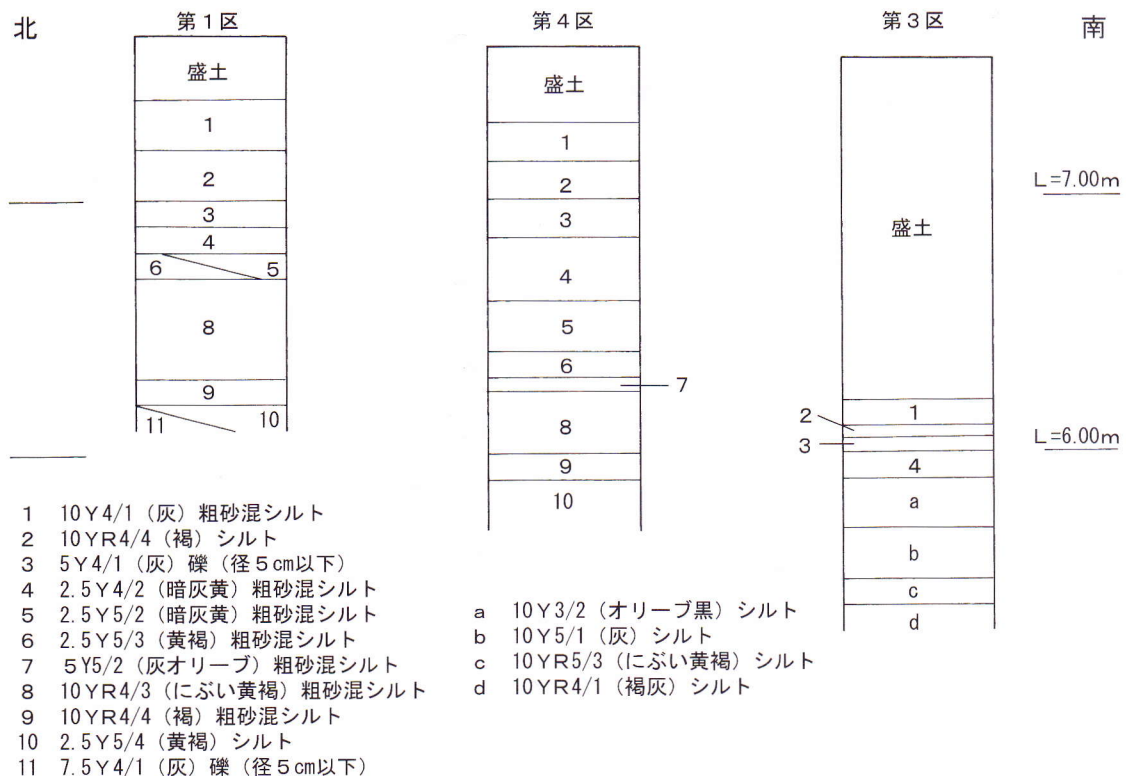
各調査区における基本層序は第3図に示した通りである。

調査地の地表面標高は約7.5mを測る。しかし、第1・4区と第2・3・5区の造成土の厚さが大きく異なることから、調査地の旧地形が二単位の比高差をもっていたと考えられ、土層堆積状況もそのことを反映している。調査地北側にあたる第1・4区では旧地表（水田）面は標高約7.4m、南側の第2・3・5区では標高約6.2m測り、その比高差は1.2mに及ぶものである。

まず、第1・4区で造成土の厚さが約30cmを測る。その下層は、旧表土に相当する厚さ15～20cmの水田耕土（第1層）が堆積しており、第2層は厚さ約15～20cmの褐色のシルトであり、この層は床土に相当するとみられる。第3層は10～15cmの厚みをもつ灰色の礫、第4層は10～25cmの厚みの暗灰黄色の粗砂混シルト、第5層は約10～20cmの厚みをもつ暗灰黄色の粗砂混シルトが堆積する。第6層は約10cmの厚みをもつ黄褐色の粗砂混シルト、第7層は約5cmの厚みをもつ灰オリーブ色の粗砂混シルトが堆積する。第8層は約25～40cmの比較的厚みをもつにぶい黄褐色の粗砂混シルトが堆積するが、この層上面が鎌倉時代頃の遺構面（第1遺構面）である。第9層は約10cmの厚みをもつ褐色の粗砂混シルト、第10層は約20cm以上の厚みをもつ黄褐色のシルト、第11層は約10cm以上の厚みをもつ灰色の礫が堆積する。第10層上面が遺構面（第2遺構面）であり、第9層が平安時代前期の遺物を包含する土層であることから、第2遺構面は平安時代前期頃の時期のものであるとみられる。なお、第10層以下からは遺物が出土しなかったことから自然堆積層と考えられる。

以上、第1・4区の土層堆積の特徴としては、地表面から第4層上面までは水平に近い堆積状況を示すが、第5層以下の堆積は南に傾斜することから、旧地形を反映した堆積であるとみられる。

第2・3・5区では、造成土の厚さが約1.4mを測る。その下層は、旧表土に相当する厚さ約10



第3図 調査地土層柱状模式図

cmの水田耕土（第1層）が堆積しており、第2層は厚さ約5cmの褐色のシルトであり、この層は床土に相当するとみられる。第3層は約5cmの厚みをもつ灰色の礫、第4層は約10cmの厚みの暗灰黄色の粗砂混シルトが堆積する。第2層と第3層の上面から礫を充填した暗渠排水溝が掘削されており、これらは農耕関係の遺構とみられ、第4層までは第1・4区の堆積と共通したものであると考えられる。それ以下の堆積については、第1・4区と異なったものである。a層は厚さ約20cmのオリブ黒色のシルト、b層は約20cmの灰色のシルト、c層は厚さ約10cmのにぶい黄褐色のシルトが堆積しており、遺構を検出しなかったが、これらの土層からは平安時代後期から鎌倉時代までの遺物が出土しており、水田耕土の可能性がある。d層は約10cm以上の厚みをもつ褐灰色のシルトが堆積するが、遺物が出土しなかったことから自然堆積層と考えられる。

第1・4区の遺構面と第2・3・5区の土層堆積の対応であるが、第1遺構面にはa層上面、第2遺構面はd層上面がそれぞれ対応するものと考えられる。

3. 遺構

今回の調査では、第1・4区の二つの調査区において、第10層上面で平安時代前期頃とみられる遺構を検出した（第2遺構面）。また、第1区の土層観察で第8層上面にも遺構面（第1遺構面）が存在することを確認した。この第1遺構面所属の遺構は第1区で検出した遺構のうちSD-3であり、遺構の底部が第2遺構面に達した状況で同一面において検出したものである。

第1区の遺構は、第10層上面において、土坑1基（SK-1）、ピット5基（P-12~16）を検出し、第8層上面からの遺構として、溝1条（SD-3）を検出した（第4図、図版20）。これらの遺構からは土師器細片が出土し、第9層から黒色土器A類が出土したことから、第10層上面の遺構の時期は平安時代前期頃と考えられる。

第4区の遺構は、第10層上面において、小ピット11基（P-1~11）、溝2条（SD-1・2）を検出した（第5図、図版22・23）。検出した小ピット群は杭跡とみられ、溝は2条とも南北方向のものである。これらの遺構から遺物は出土しなかったが、第9層から土師器細片が出土している。

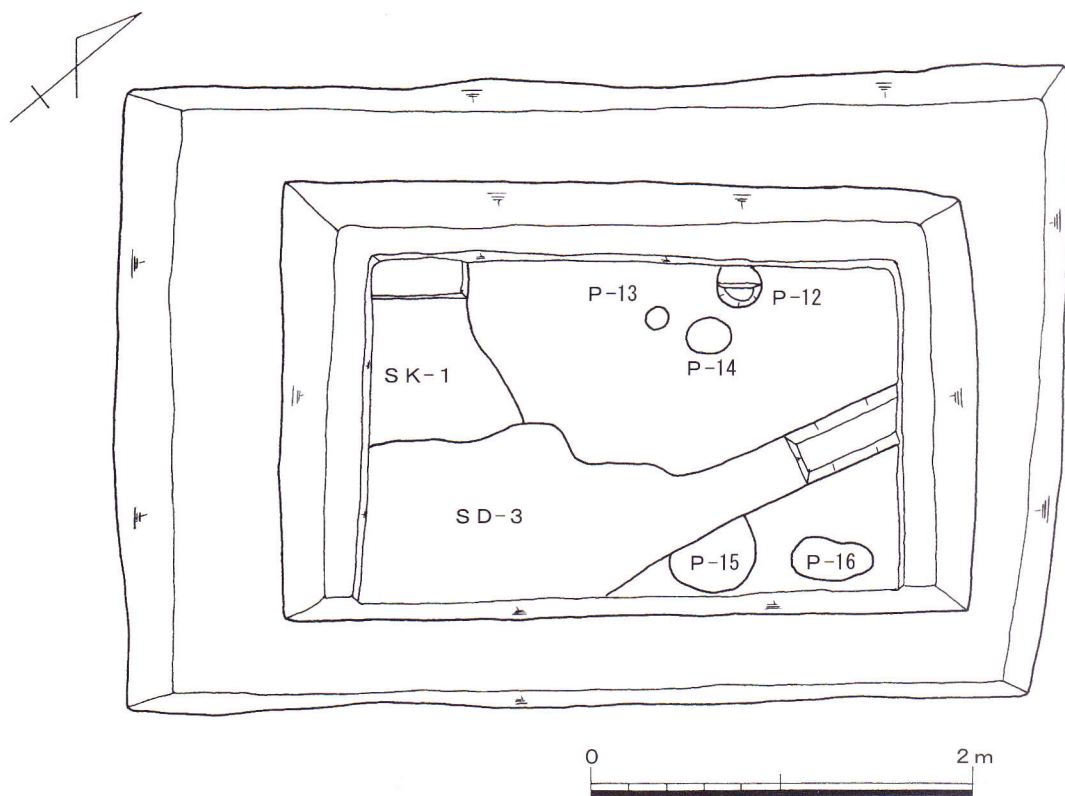
第2・3・5区においては、遺構を検出しなかったが、第1・4区の第1遺構面にはa層上面、第2遺構面はd層上面がそれぞれ対応するものと考えられ、a~c層からは平安時代後期から鎌倉時代までの遺物が出土しており、土質や堆積状況から水田耕土の可能性がある（図版21・23）。

4. 遺物

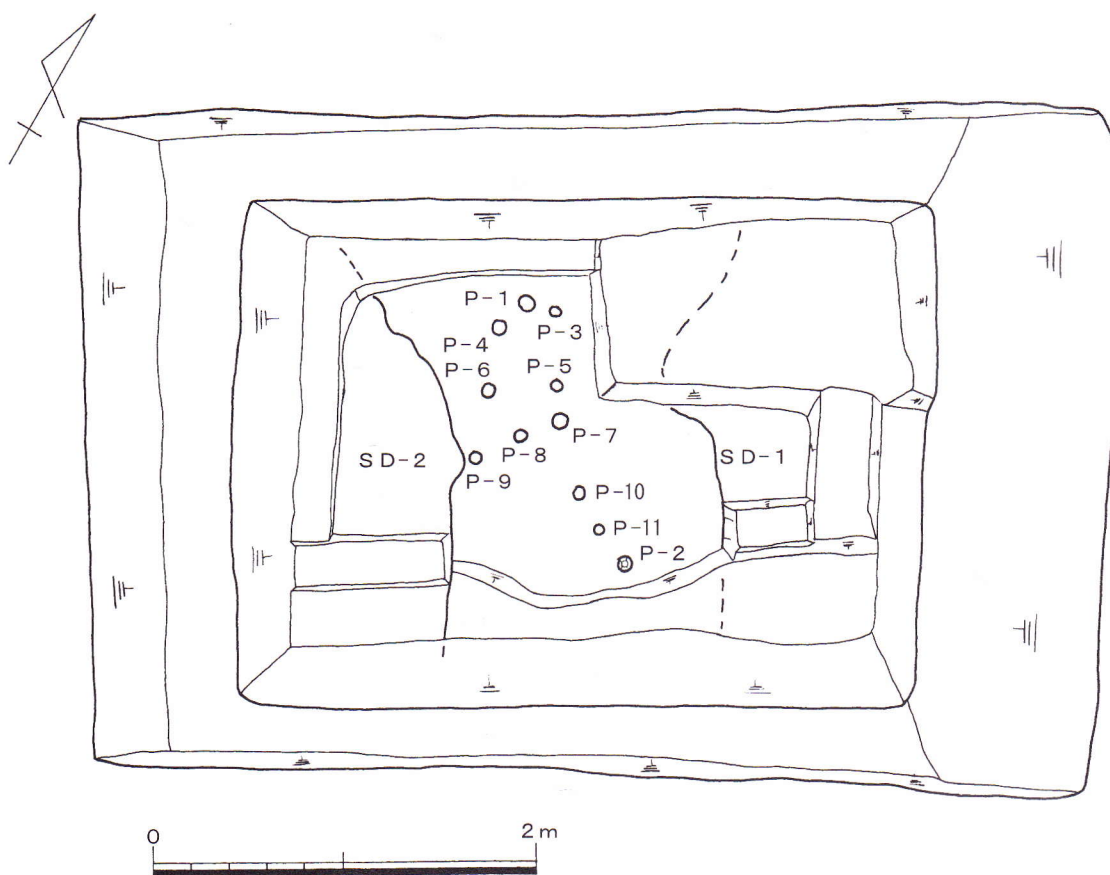
遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、輸入陶磁器、肥前系陶磁器などコンテナ1/2箱が出土した。

出土遺物は細片ばかりであるが、実測図の作成及び器種の判定が可能なものは、須恵器杯蓋（1）、黒色土器碗（2）、中国製白磁碗（3）、瓦器碗（4）、中世土師器皿（5）がある（第6図）。

須恵器杯蓋（1）は、口径11.0cm、残存器高2.8cmを測る、淡灰褐色のものである。黒色土器碗（2）は、高台径4.6cm、残存器高1.2cmを測るもので、内面を黒色としたいいわゆるA類碗である。中国製白磁碗（3）は口縁端部に小さい玉縁が付くもので、太宰府編年の白磁碗Ⅱ類に相当するものである。色調は灰白色で、残存器高2.4cmを測る。瓦器碗（4）は灰褐色の色調のもので、高台径5.6cm、残存器高2.0cmを測る。高台の形状などから12世紀代のものと考えられる。中世土師器皿



第4図 第1区遺構平面図



第5図 第4区遺構平面図

(5)は淡褐色の色調のもので、底径6.8cm、残存器高1.7cmを測る。底部に回転糸切痕を残すもので、中世前期のものと考えられる。

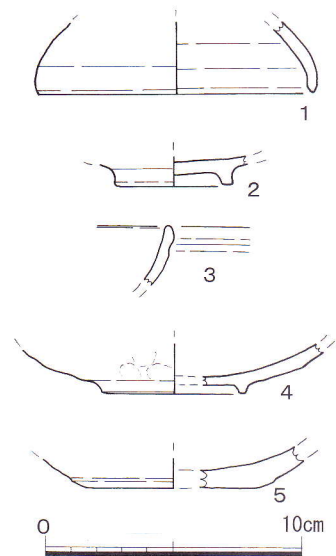
これらの遺物の出土位置は、1が第4区の壁面調整時採集、2は第2区第6層、3は第1区第3層、4は第2区第5層、5は第5区第6層である。

5. まとめ

今回の調査において、調査地北半部で鎌倉時代頃の遺構面（第1遺構面）及び平安時代前期頃とみられる遺構面（第2遺構面）を検出した。これらの遺構には土坑、ピット、溝などがあり、遺物を出土することなどから集落の範囲内であったものと考えられる。

また、これら2面の遺構面に対応する調査地南半部の土層では水田耕土とみられる堆積を確認しており、北半部の集落に対応する農耕地が南半部に展開していたものと考えられる。調査地内での境界は、第1・4区の南側と第2・3・5区の北側の間にあるといえる。

北半部にみられる2面の遺構面は緩斜面上に形成されたものと考えられ、第6層までは旧地形の堆積状況を示すが、第5層は整地土とみられる土層であり、明確な時期は不明であるが鎌倉時代から江戸時代にかけての間に調査地北半部は盛土され、現在みられるような農耕地に開発されたものと考えられる。(北野隆亮)



第6図 遺物実測図

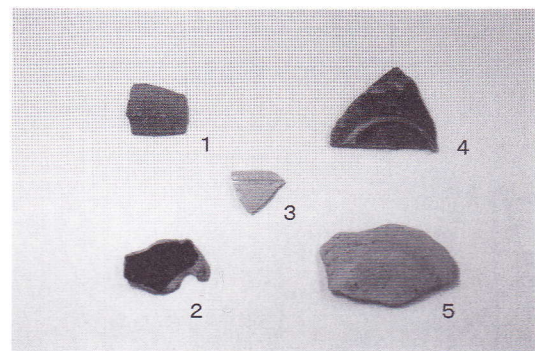


写真1 遺物写真

④神前遺跡 第5次確認調査（調査一覧44）

1. 調査に至る経緯と経過

神前遺跡（遺跡番号307）は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川下流南岸の標高1.5m前後の沖積地に立地する。遺跡は、北側を井辺遺跡と接しており、南北約700m、東西約450mの広い範囲をもつもので、これまでに4次を数える調査が実施されている。

今回の調査地は、遺跡中央部からやや南寄りに位置するもので、宅地開発が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施することになった。この調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市都市整備公社が同教育委員会の指導のもと委託を受けて確認調査として実施したものである（第1図）。

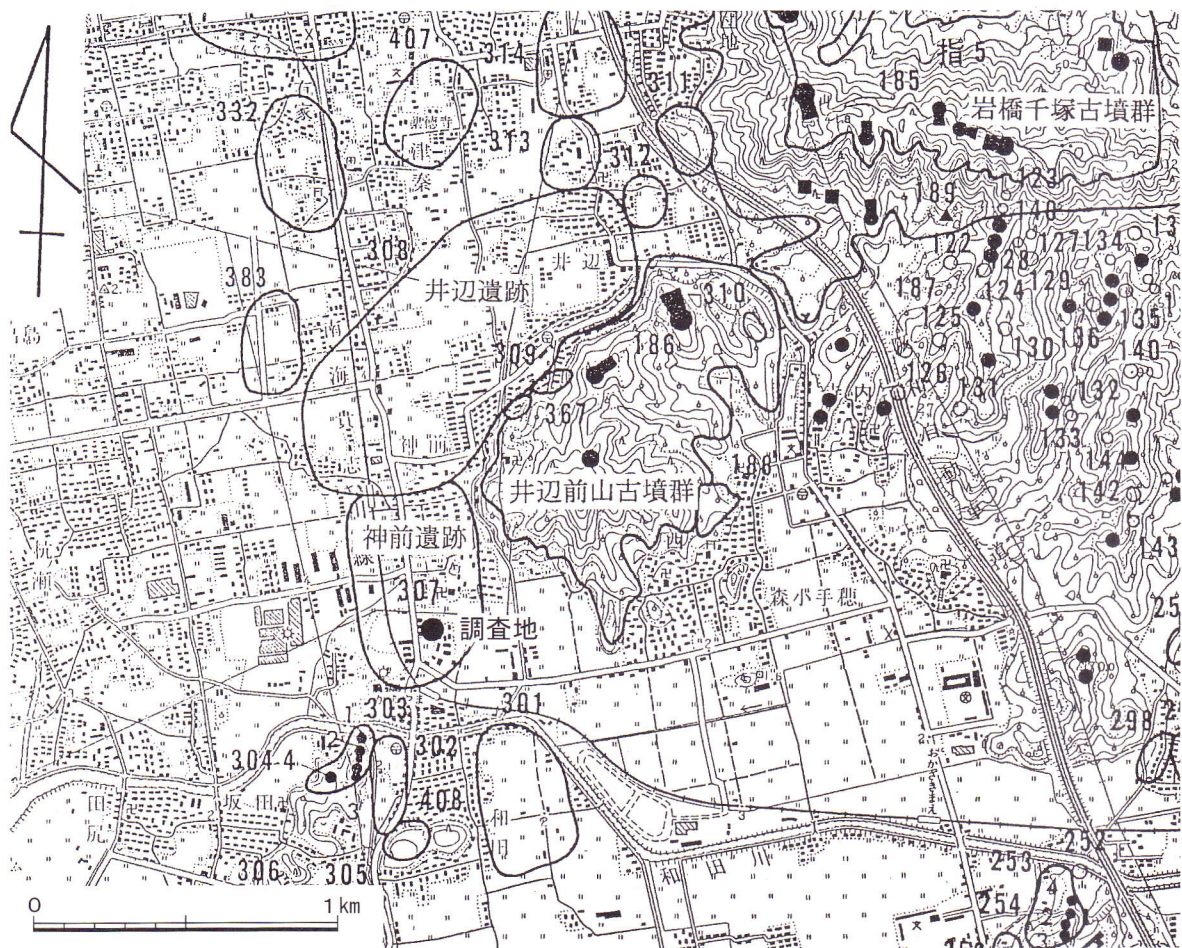
調査は対象面積約50㎡を平成20年9月10日から同年10月9日までの期間で行った。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

調査地は、遺跡中央部からやや南寄りに位置し、現況は造成地であった（第1図、図版24）。

調査区は、開発予定地内に、幅2.0m、長さ5.0m、面積10.0㎡の調査区を5ヵ所設定し、北東から第1～5区とした（第2図）。



第1図 神前遺跡周辺の遺跡分布と調査位置図

まず、機械掘削を行ったが、造成土の深さが60～70cm、水田耕土（第1層）が10～20cm、床土（第2層）が5～10cmを測り、この第2層までの厚さ約90cmを掘削した。第3層は、厚さ20～25cmを測る鎌倉時代の遺物包含層であることから、人力で掘削した。この層の下面、すなわち第4層上面において弥生時代中期～鎌倉時代までの遺構面を検出した（第1～3・5区）。遺構については一部を掘削し、規模の確認や出土遺物の採取を行った。なお、第4区では遺構を検出なかった。

各調査区において、下層堆積を確認するため、壁際2面に深掘り側溝（サブトレンチ）を設定し、第5層を深さ約10～20cmまで掘削した。その結果、第5層からは遺物が出土せず、無遺物層と考えられた。

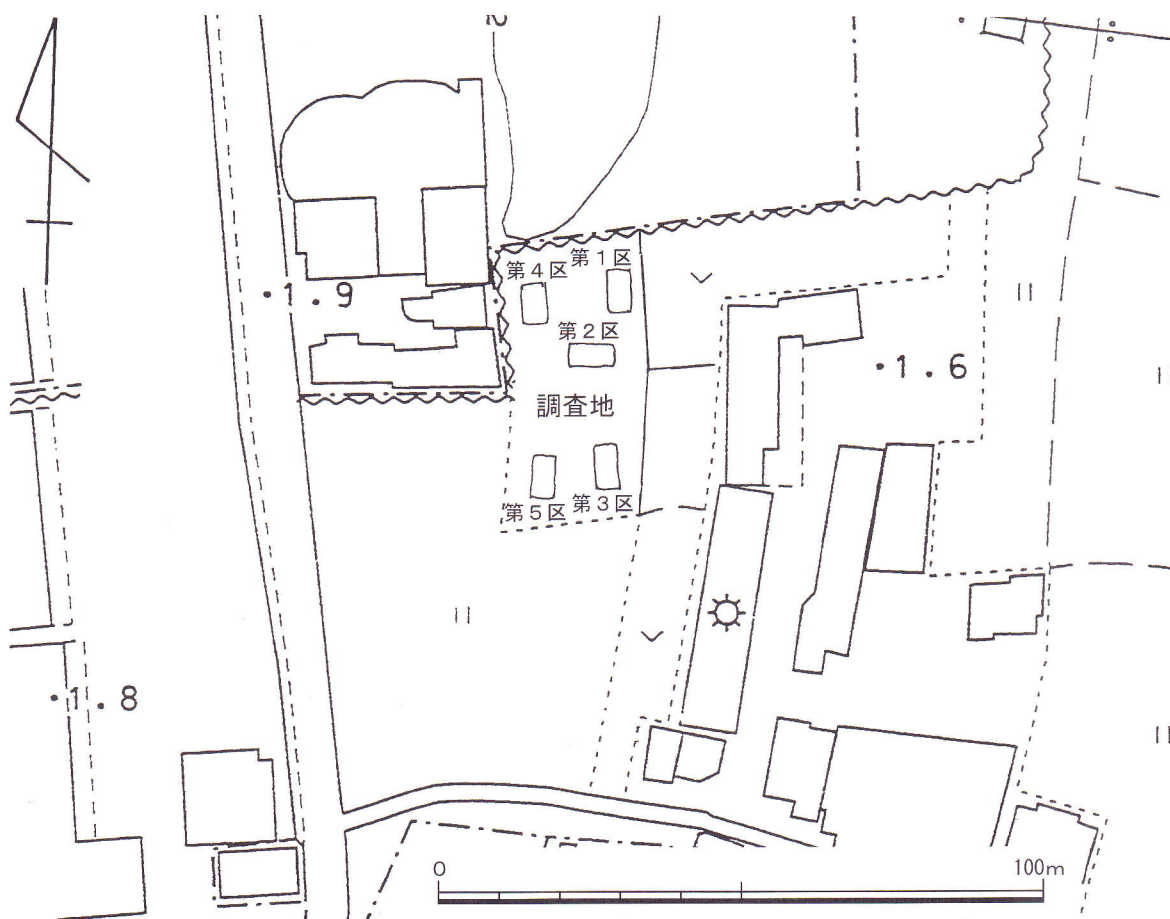
記録保存の方法は、調査範囲内に国土座標軸（日本測地系）を基準とした値を設置し、遺構実測の基準とした。遺構平面図と土層堆積図は縮尺1/20で作成した。なお遺跡の水準は国家水準点（T.P. 値）を基準とし、土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。

（2）調査の概要

各調査区における基本層序は第3図に示した通りである。

調査地の現地表面標高は約2.0mを測る。

まず、造成土の厚さが60～70cmを測る。その下層は、旧表土に相当する厚さ10～20cmの水田耕土（第1層）が堆積しており、第2層は厚さ5～10cmの褐色の粗砂混シルトであり、この層は床土に



第2図 調査地区割図

相当するとみられる。第3層は20～25cmの厚みをもつ暗灰黄色のシルト、第4層は15～20cmの厚みの褐灰色のシルトが堆積する。第4層上面が弥生時代中期～鎌倉時代までの遺構面である。第5層は20cm以上の厚みをもつオリーブ褐色のシルトが堆積するが、遺物が出土しないことから無遺物層とみられる。

遺構面（第4層上面）の標高について各調査区を比較した場合、東側に位置する第1・3区は1.10m、調査地中央部の第2区は1.05m、南西に位置する第5区は1.00mであり、これらはほぼ平坦地であるとみられる。また、遺構を検出しなかった第4区は標高0.85mと低い値を示し、各堆積層に共通して傾斜がみられることから、調査地北西方向に微低地が展開するものと考えられる。

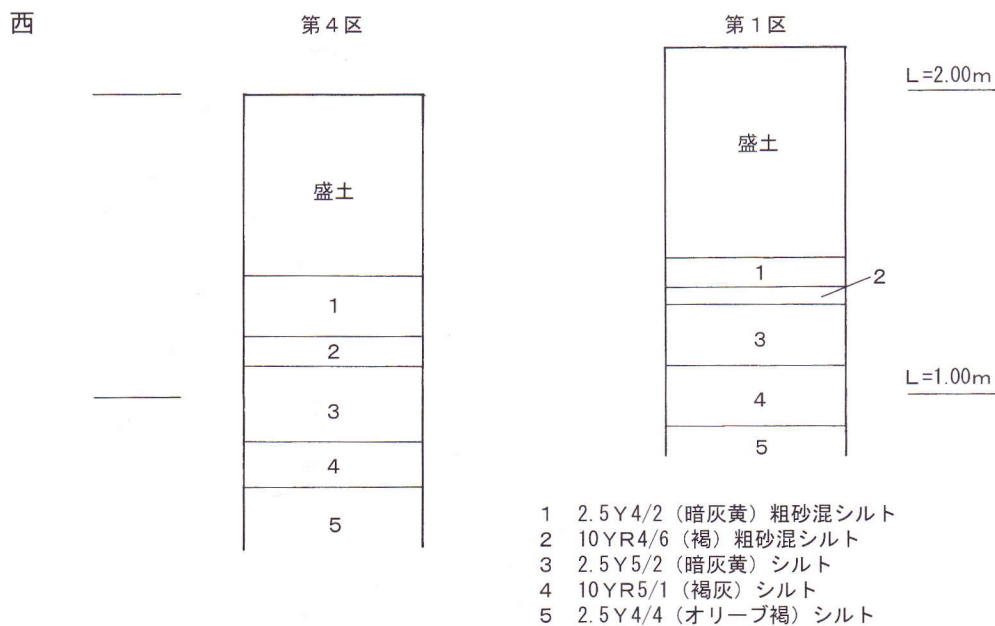
3. 遺構

今回の調査では、第1～3・5区の第4層上面において弥生時代中期～鎌倉時代までの遺構面を検出した。

第1区の遺構は、ピット1基（P-10）、溝1条（SD-3）を検出した。P-10は南北約20cm、東西約40cmの楕円形のもので、深さは約5cmを測る。須恵器蓋（6世紀初頭）が1点出土した。SD-3は幅約1m以上、深さ約20cm以上、長さ約2m以上を測るもので、北東から南西方向に走向方向をもつ。弥生時代中期の土器が出土した（第4図、図版24・25）。

第2区の遺構は、調査区の西側2／3を占める範囲で、溝1条（SD-3）を検出した。SD-3は幅約3m以上、深さ40cm以上を測る大溝で、北東から南西方向に走向方向をもつものである。遺構からは弥生時代中期の土器が一定量出土した（第5図、図版25・26）。この大溝は第1区で検出したSD-3の延長部にあたるものとみられ、長さ13.5m以上を復元することができ、更に南西方向に延長した場合は第5区の北側付近を通過するものと考えられる。

第3区の遺構は、ピット4基（P-1～4）、溝1条（SD-1）を検出した。P-1・4は直径約30cm、深さ約5cmを測る小規模なもので、P-2・3は直径5cm程度の杭跡とみられる。SD-



第3図 調査地土層柱状模式図

1は調査区南東隅で検出したもので、幅40cm以上、深さ20cm以上を測るもので、北東から南西方向に走向方向をもつものである（第6図、図版27・28）。

第5区の遺構は、ピット5基（P-5～9）、溝1条（SD-2）を検出した。P-5は直径約45cm、深さ約15cm、P-6は直径約20cm、深さ約20cm、P-7は直径約12cm、深さ約7cm、P-8・9は直径約30cm、深さ20cm以上の規模をそれぞれ測る。また、SD-2は幅約30cm、深さ約5cm、長さ1.3m以上の規模を測る溝である。（第7図、図版29・30）。

以上、遺構の掘削がごく一部のため、遺物が出土したものは第1区のP-10（須恵器蓋）とSD-3（弥生土器）に限られ、他は遺構出土遺物から所属時期を判断することはできなかった。しかし、遺構面直上の第3層から瓦器・中世土師器・中世須恵器などが出土していることや遺構埋土にバリエーションがあることなどから、これらの遺構の所属時期は弥生時代中期から鎌倉時代までの時期幅を考えることができる。

4. 遺物

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世須恵器、中世土師器、土師質・瓦質土器、中世陶器、輸入陶磁器、肥前系陶磁器、瓦、石器などコンテナ1箱が出土した。

出土遺物は細片が多いが、器種の判定が可能なものは、弥生土器壺・甕、須恵器杯蓋、黒色土器碗、瓦器碗、東播系須恵器捏鉢、中世土師器皿・釜・埵、瓦質土器壺、備前焼大甕・播鉢、常滑焼甕、中国製青磁碗、肥前系染付丸碗、砂岩製磨石などがある。

これらの遺物のうち、弥生土器甕（1）・壺（2）、須恵器杯蓋（3）、瓦器碗（4）、中世土師器皿（5）について、実測図を作成することができた（第8図）。

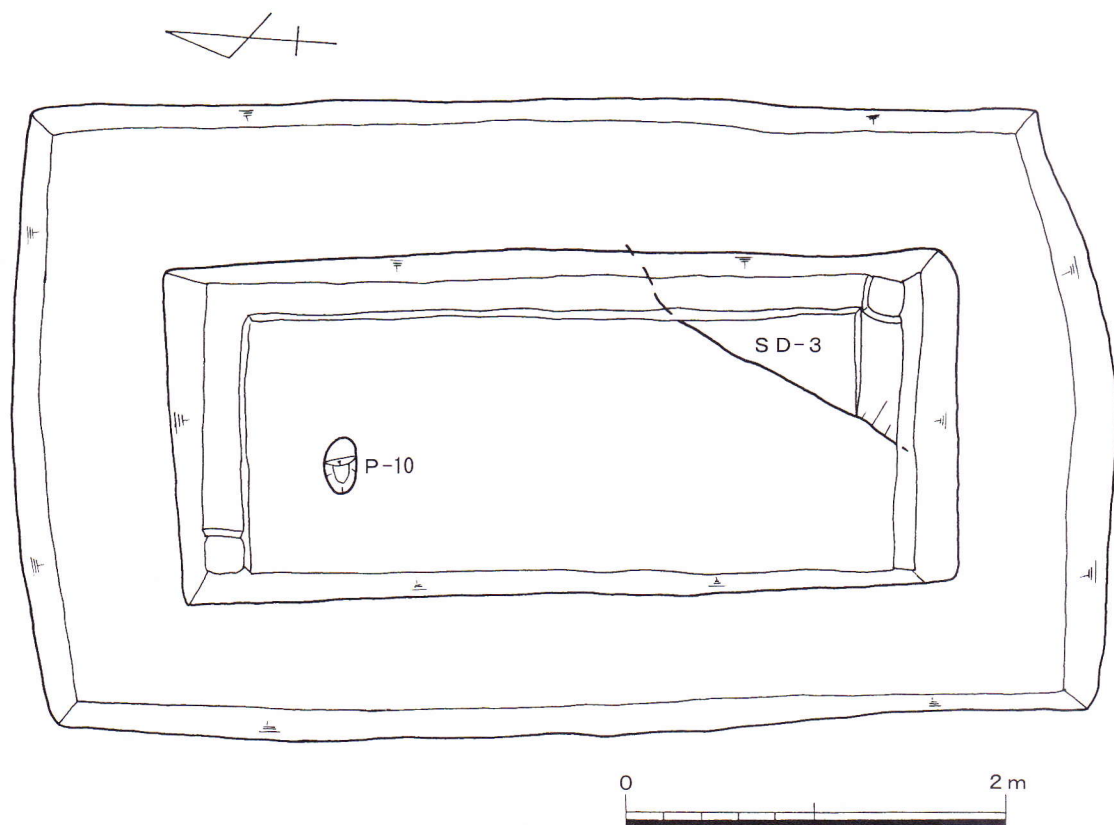
弥生土器甕（1）は口縁部を外反させ、端部を面取りし端面に刻み目を施すものである。残存器高8.1cmを測る、灰褐色のものである。弥生土器壺（2）は口縁部外面に2条の突帯を貼りつけた直口壺である。突帯には刻み目を施している。淡茶褐色のもので、残存器高3.6cmを測る。須恵器杯蓋（3）は淡灰色の色調のもので、口径12.4cm、残存器高3.7cmを測る。瓦器碗（4）は黒褐色の色調のもので、高台径6.4cm、残存器高2.0cmを測る。高台の形状などから13世紀代のものと考えられる。中世土師器皿（5）は赤褐色の色調のもので、口径11.4cm、器高1.4cmを測る。底部に回転糸切痕を残すもので、中世前期のものと考えられる。

これらの遺物の出土位置は、1が第2区SD-3、2・5は第1区第3層、3は第1区P-10、4は第3区第3層である。

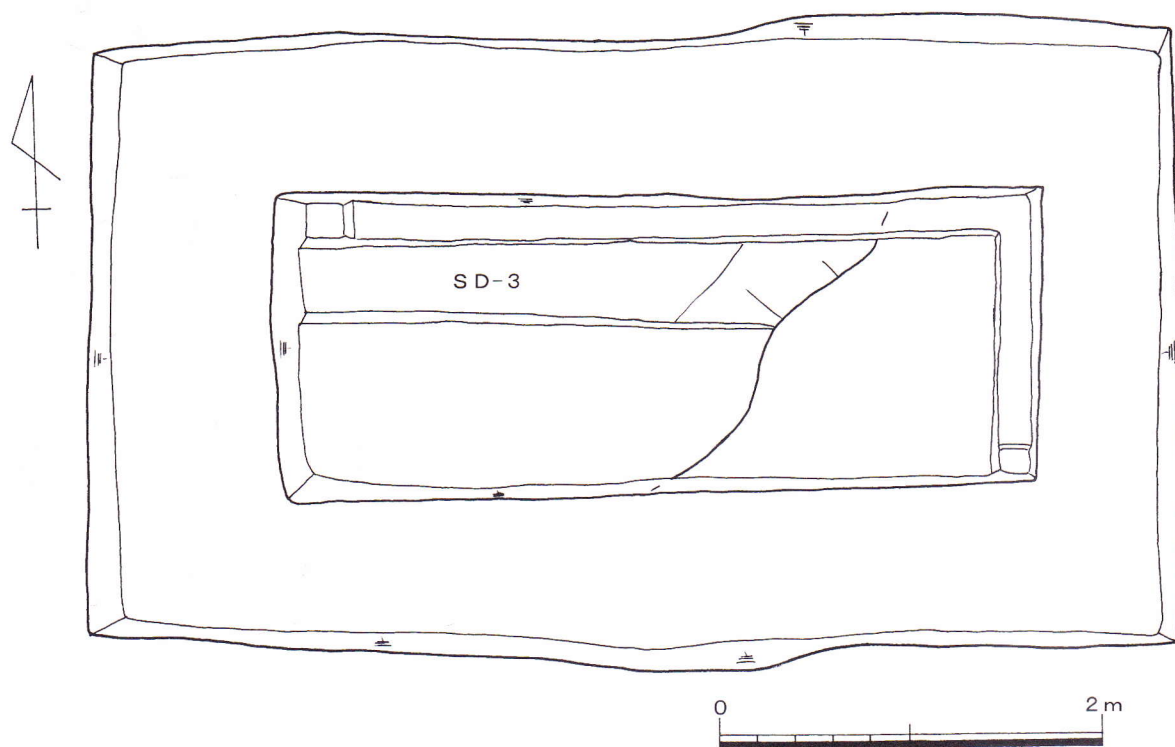
5. まとめ

今回の調査において、調査地の北西部（第4区）をのぞく地点（第1～3・5区）で、弥生時代中期～鎌倉時代までの遺構面を検出した。これらの遺構にはピット、溝があり、広範囲に遺物を出土することなどから集落などの微高地の範囲内であったものと考えられる。

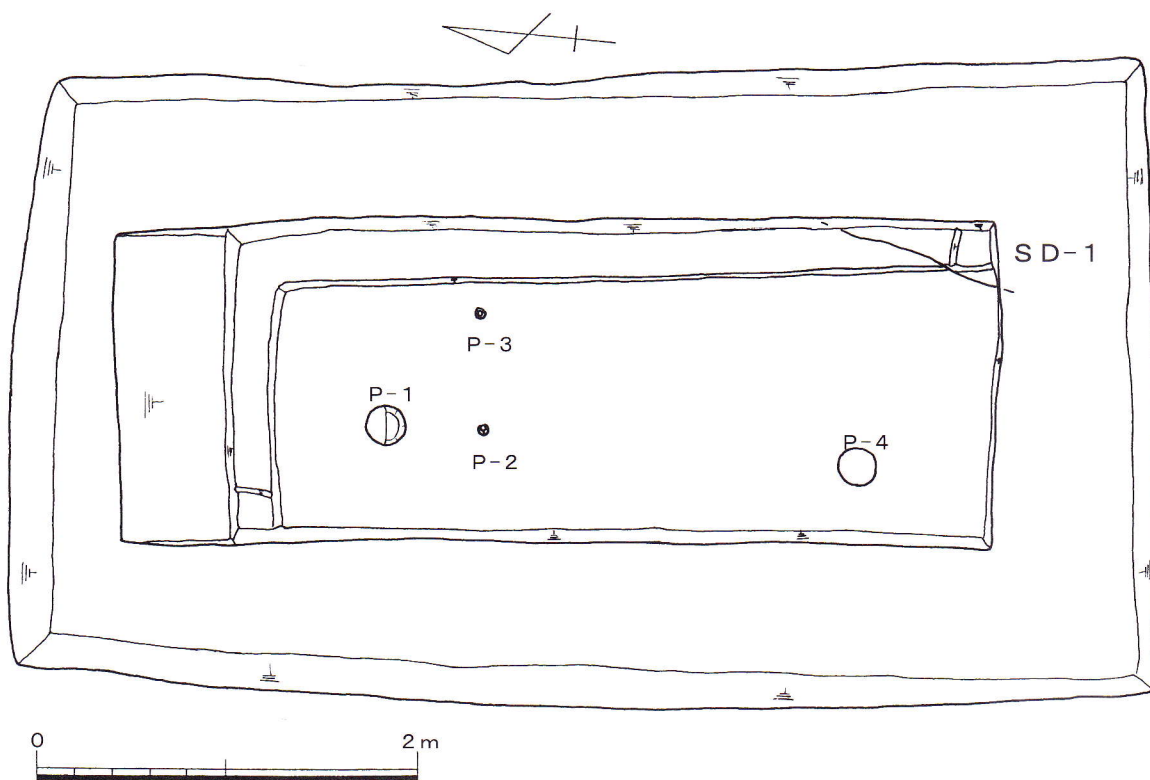
また、遺構面の標高について各調査区を比較した結果、遺構を検出しなかった北西部（第4区）は20～30cm程度低くなっており、全ての調査区において各堆積層（第1～5層）に共通して北西に向かって低くなってゆく勾配が認められることなどから、調査地の北西方向に微低地が展開する旧地形を復元することができる。（北野）



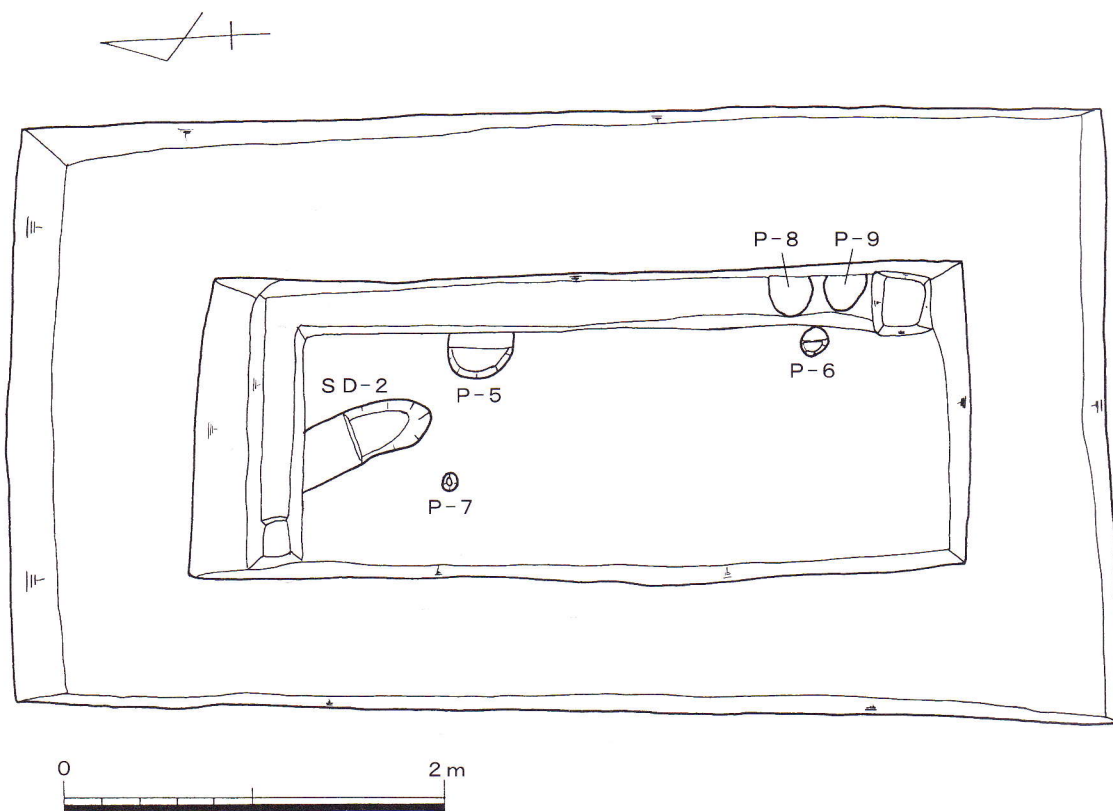
第4図 第1区遺構平面図



第5図 第2区遺構平面図



第6図 第3区遺構平面図



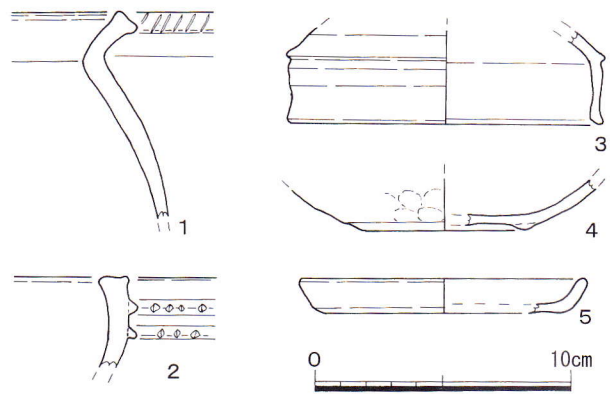
第7図 第5区遺構平面図

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 —平成10年度—』和歌山市教育委員会 2000年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6 —平成8（1996）・9（1997）年度—』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7 —平成10年度（1998年度）・11年度（1999年度）—』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002年



第8図 遺物実測図

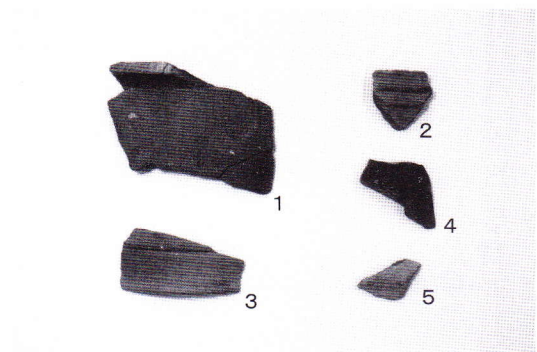


写真1 遺物写真

⑤釜山古墳 確認調査（調査一覧98）

1. 調査の経緯と経過

和歌山市域の北西部にあたる和歌山市梅原及び木ノ本に所在する釜山古墳は、紀ノ川北岸の標高5.5m前後の紀ノ川によって形成された大規模な砂堆の背後に残された平野部に存在する。この古墳が含まれる釜山古墳群（遺跡番号44）にはこれまで3基の古墳が確認されている（第1図）。今回の調査対象である釜山古墳は、古墳群の中で最も東側に位置する直径約40m、高さ約7mの円墳として知られている。その北西部に位置する車駕之古址古墳は前方部を西に向けた前方後円墳で、その規模はこれまでの調査から全長86m、後円部径51m、くびれ部幅33m、前方部幅62m、前方部長41m、後円部の高さ4m以上で周濠及び外堤を含めた推定全長が120mにも及ぶことが確認されている。さらに、その西側に位置する古墳が茶臼山古墳でこれまで3度にわたる調査が行われ、前方部を西に向けた前方後円墳である可能性が高まっている。また、この釜山古墳群を含む周囲は土師器・須恵器などが散布する木ノ本Ⅲ遺跡（遺跡番号42）としても周知されており、調査地は木ノ本Ⅲ遺跡の中央部としても位置づけられる。今回の調査地は釜山古墳の周濠内部に位置するものと想定されたことから釜山古墳確認調査として実施したものである。

本古墳の調査は、明治31年に地元の人が墳頂部を発掘しており、この時点にはすでに盗掘を受けていて埋葬形態等不明であったとされている。墳頂部には当時の調査によって掘り出されたとみられる結晶片岩の板石が2個樹立されている。また昭和63年には墳丘裾部にあたる西側畑地に住宅建築が計画され、これに先立つ調査を木ノ本Ⅲ遺跡第4次調査として財団法人和歌山市文化体育振興事業団（第2図）。この調査では、古墳の周濠が確認されるものと推定されていたものの、中世と考えられる集石遺構が上位層から確認され、周濠等古墳に関係するとみられる遺構群の検出には至っ



第1図 調査対象地位置図

ていない。この集石遺構の範囲を第2図に黒塗りで示した。なお、今回の調査対象地の第2・3区は、木ノ本Ⅲ遺跡第4次調査地と同敷地内であり、当時建築予定であった住宅が建築されず、そのまま畑地として現状に至っていた。

この他、平成4年に河内一浩氏を始めとする有識者によって本古墳の測量調査が行われ、詳細な墳丘測量図とともに墳丘の推定復元が行われている。この測量図から導き出された墳丘復元値は45mで、かなりの削平を受けているものと指摘されている。

今回の調査原因は、釜山古墳の実態解明と保存資料作成のため確認調査を和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施することとなった。調査は、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が和歌山市から委託を受けて実施した。

現地における調査は、第1区の機械による事前の盛土等の除去を和歌山市教育委員会が平成21年3月10日に行い、翌日から同年3月27日までの期間で人力による調査を実施した。

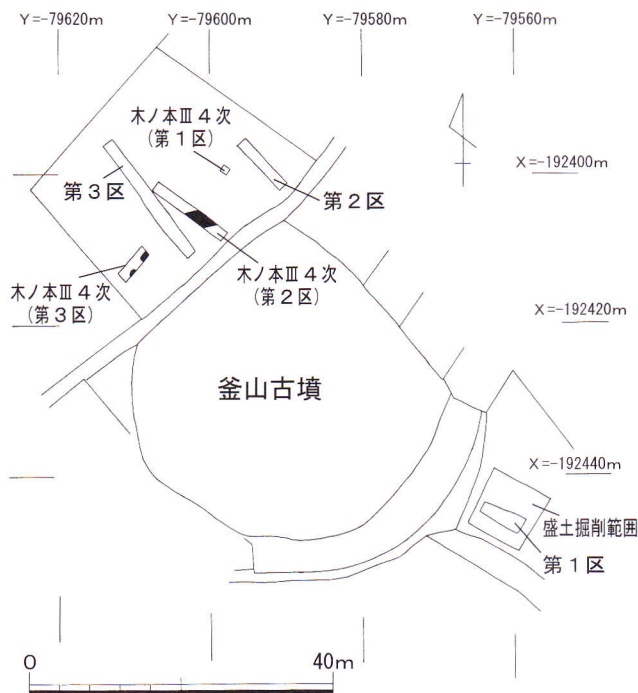
2. 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

今回の調査は、釜山古墳の周囲における未開発地を対象として2区画の敷地に調査区を3ヶ所設定して行った。まず第1区は古墳東側の造成地に設定した調査区で、約1.5mの盛土を上端幅8.0m四方の範囲で除去し、その底面に幅1.5m、長さ4.0mの調査区を設定した。第2・3区は古墳西側の畑地に設定した調査区で、第2区は東西8.0m、第3区は東西18.7mで、ともに幅1.5mの調査区であり、総面積約46.0㎡である（第2図、図版31）。

まず第1区は先述の盛土の下にあった旧耕作土である第1層まで機械掘削によって取り除いていたことから、第1層以下の堆積層と周濠内部の調査を人力によって行った。また第2・3区は畑地であったことから表土（第1層）からすべて人力によって順次層位ごとに掘削を進め、遺物の採集を行った。そして、図面等記録を行った後、埋戻作業は周濠底面及び葦石、集石遺構など重要遺構と考えられる部分について人力によって行い、上位の堆積層等は市教育委員会の直接工事による機械埋戻によって行った。

図面による記録は、各調査区に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（縮尺1/20）の作成を行った。また葦石及び集石遺構は、縮尺1/10で個別平面図・立面図の作成を行った。各調査区の仮原点は、基準点測量を行い国土座標（世界測地系）の数値とし、1/2500の国土基本図



第2図 調査地区割図

と照合して位置図を作成した。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。なお、水準値は国家水準点（T.P. 値）を使用した。

（２）基本層序

調査地の基本層序は、各調査区とも大まかな対応関係が認められ、各数字番号に示した層位に時的な対応関係がある。なお、各調査区の説明で土層堆積状況を示しているのので、ここでは簡単な特徴を述べる。

まず古墳南東部にあたる第１区では上部に1.3mの盛土がされており、この盛土下に旧耕作土（第１層）が存在する。土層観察の結果、旧耕作面の標高は約2.7mと推定できる。第２層も耕作層と考えられる土層でその下面に耕作に伴うと考えられる凹みが確認できた。また第３層は厚さ25cmのにぶい黄褐色系の細砂で江戸時代の堆積層と考えられる。第４層も厚さ20cmのにぶい黄褐色系の細砂で鎌倉時代以降の堆積層と考えられる。そして、第１区では確実ではないものの、第５層は周濠内部の堆積と考えられる土層で、２～３単位に細分できる。さらに、第６層は黄灰色の細砂で遺物の出土は認められず、周濠底面の可能性が高い。

第２・３区は古墳北西部の調査区で、ともに共通の堆積を示し、堆積時期は第１区と概ね併行するものと考えられる。第１区との相違点としては、江戸時代以降の耕作層と考えられる第２層が耕作の単位で明瞭に２単位に細分できることと、全体的な土色に多少の違いが認められることである。また第３区において外堤の葺石を確認したことから第５層が周濠内部の堆積であることが確認できた。そして、各調査区とも第６層からの遺物の出土は認められなかった。

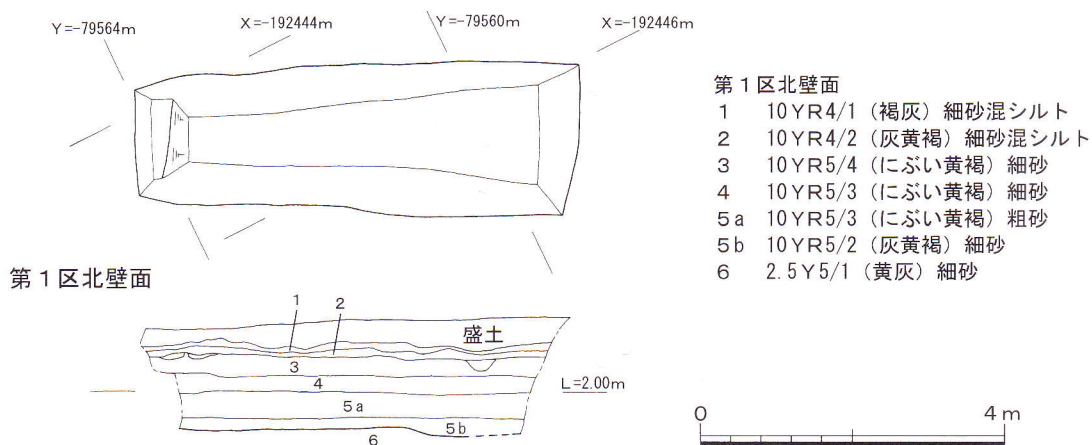
３．遺構

今回の調査で検出した遺構は、第３区で検出した集石遺構（SV-1）と外堤葺石（SV-2）のみである。調査過程において各調査区とも湧水が著しく、特に第１・２区において全景写真撮影直前に大規模な崩落が起こったため、危険性を勘案し現状写真に留めた。

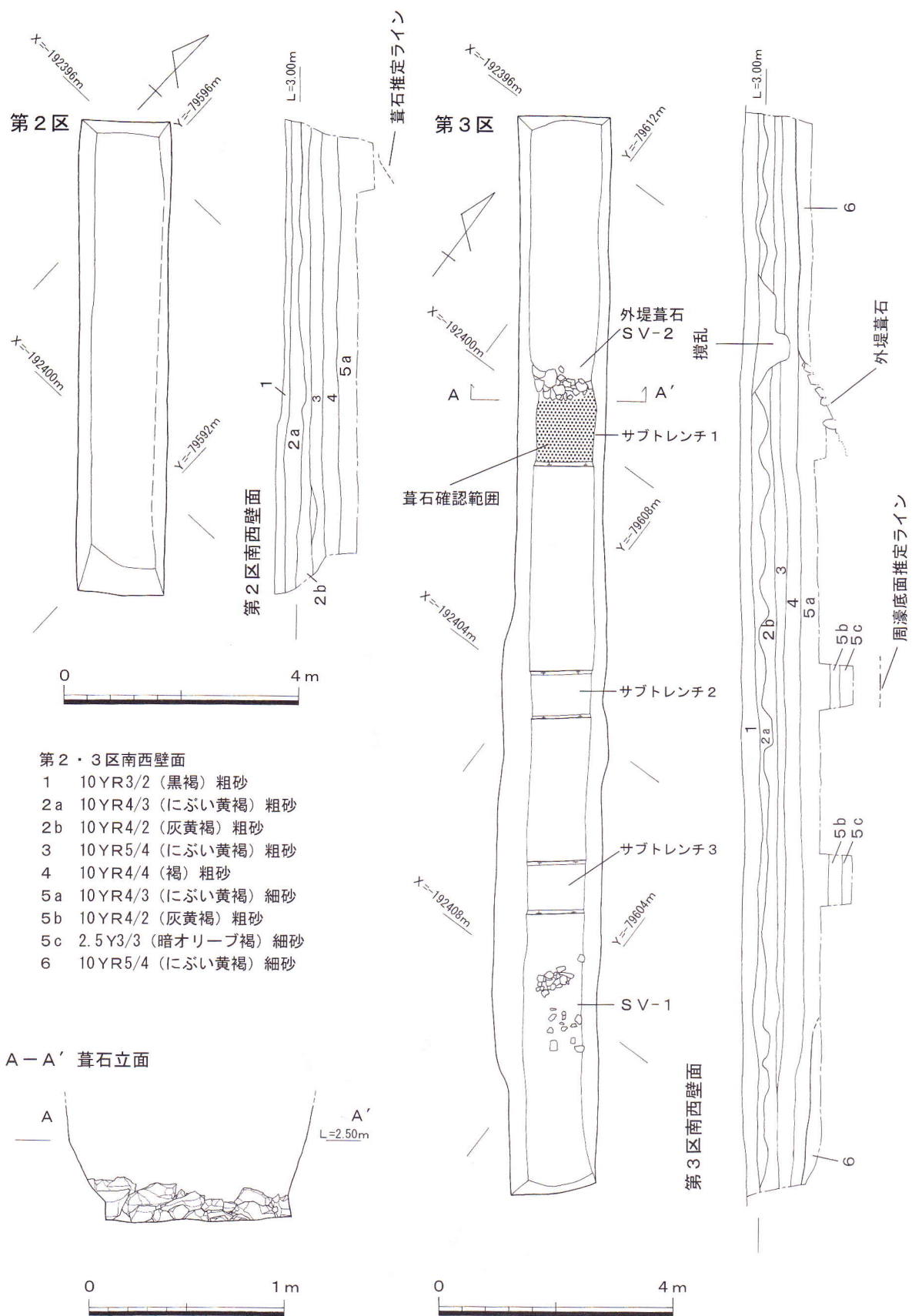
以下、調査区ごとに遺構及び調査内容の概略を説明する。

〔第１区〕（第３図、図版32）

第１区では集石などの遺構は検出できなかった。しかし、調査区全体が周濠内部に収まるものと



第３図 第１区遺構平面図及び土層断面図



第4図 第2・3区遺構平面図及び土層断面図・SV-2立面図

みられ、周濠底面の状況が確認できた。検出した周濠底面は水平ではなく部分的にやや深くなる様相を示す。このことから、周濠底面の標高は、1.4～1.5m程度である。また周濠内部と考えられる堆積は、上位の第5 a層に埴輪片と瓦器・中世土師器などが混ざり出土しているものの、下位の第5 b層には埴輪以外の遺物の出土は認められない。

〔第2・3区〕（第4図、図版32・33）

第2・3区では共通する堆積を示し、第4層掘削後、第3区において集石遺構（SV-1）を確認し、さらに第5層を掘削することによって外堤葺石（SV-2）を確認した。

第2区は、第3区で検出した外堤葺石の延長部が北端部において検出できる可能性が考えられたことから、標高1.7mまで掘削を行ったものの、壁面崩落の危険性が高まったためボーリング調査によって推定ラインのみ確認し、調査を終えた。

次に、第3区では、調査区南半部において木ノ本Ⅲ遺跡第4次調査第2区（第2図参照）で確認されていた集石遺構の延長部と考えられる集石遺構（SV-1）を検出した他、北半部において外堤葺石（SV-2）を検出した。SV-1は第5 a層内に結晶片岩1点を含む10cm程度の砂岩割石がまとまって検出できたもので、今回の調査状況でのみ考えられるのは古墳埴丘葺石の転石がまとまって検出できた可能性が高い。また北半部において検出した外堤葺石は、10～30cm程度の砂岩割石を積み上げた状況で確認したもので、傾斜角度約28度で濠底に向かう。この葺石の範囲は、ボーリング調査の結果、少なくとも第4図に示した範囲に存在するものとみられる。この他、濠底の確認を目的として中央部分2ヶ所にサブトレンチを設定し、標高1.4mまで掘削を進めたものの、壁面崩落の危険性が高まったためボーリング調査によって周濠底面推定ライン（標高約1.0m）を確認するのに留めた。なお、濠内部の堆積は3単位（第5 a～5 c層）に細分できたが、第1区で確認した埴輪単純層はみられず、ともに鎌倉時代の遺物を含む。第6層は、南北両端部で検出できたことから残存周濠上端幅が11.7mであることも確認できた。

4. 遺物

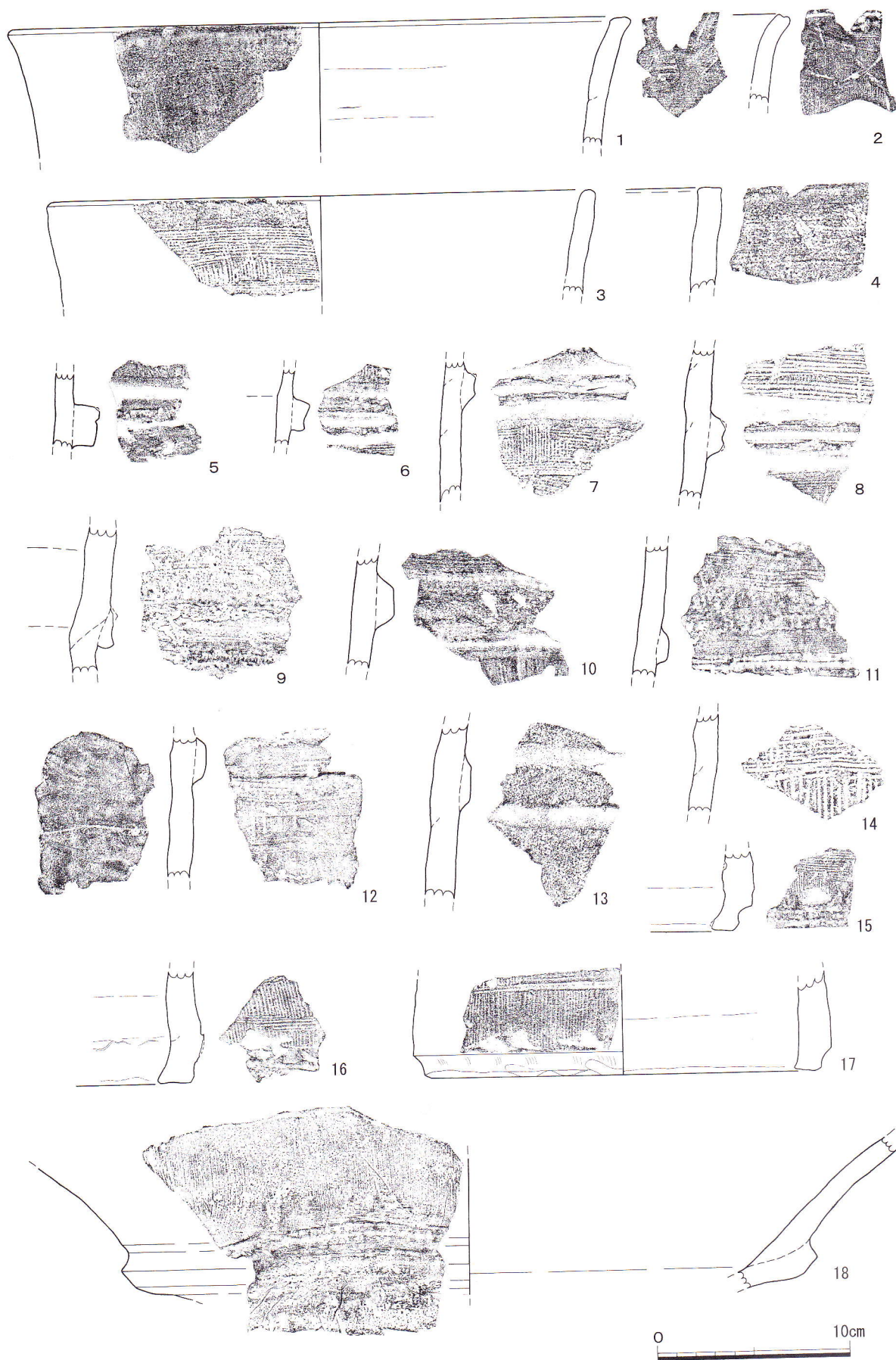
今回の調査で出土した遺物は、遺物収納コンテナ5箱である。出土した遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、中世土師器、輸入陶磁器、焼締陶器、肥前陶磁器、土製品、瓦、石器などがあり、古墳に伴う埴輪片が一定量出土した。

埴輪は、各調査区とも上位層から下位層まで一定量含まれ、特に周濠内部と考えられる第5層に良好なものが出土している。埴輪の種類では、円筒埴輪が大半で、朝顔形埴輪や蓋形埴輪が含まれている。埴輪以外では中世の瓦器・中世土師器が多く瓦も含まれ、少なくとも鎌倉時代までは、古墳の周濠が存在した可能性が考えられる。また確実なものとして土製品では土錘があり、石器では石鏃が1点出土している。

以下、個別に遺物の詳細を述べる。

（1）円筒埴輪（第5図1～17、図版34）

1～4は口縁部の破片である。1・2は口縁端部が外反する形状のもので、ともに口縁外端面には強いヨコナデによるとみられる沈線状の凹みがみられる。3・4は口縁端部が直立気味に立ち上がる形状のもので、口縁端部を丸くおさめるもの（3）とシャープに上端面を形成するもの（4）がある。これらの外面調整は、タテハケの後ヨコハケを行うもの（1～3）の他、ヨコ方向の板ナ



第5图 遺物実測図1

デを用いるもの（４）がある。また内面調整は、ヨコナデを基本とするが、２はヨコハケによって調整されている。

５～１３は体部突帯周辺の破片である。突帯の断面形状としては、方形状のもの（５）、「Ｍ」字状のもの（６～９）、台形状のもの（１０～１３）に分けられ、なかでも５は「Ｍ」字状突帯であったものが板状押圧によって方形状となり、谷部が沈線状になったものと考えられる。これらの外面調整は、タテハケ→突帯→ヨコナデ→ヨコハケによって仕上げているもの（６～１０）が主体であるものの、タテ方向のナデ→突帯→ヨコナデ（５）、タテ方向の板ナデ→突帯→ヨコナデ→ヨコハケ（１１）、タテ方向の板ナデ→突帯→ヨコナデ→ヨコ方向の板ナデ（１２）、タテハケ→突帯→ヨコハケ（１３）などの調整が確認できる。また内面調整は、すべての個体にヨコナデ調整が用いられ、１１・１２にはナデ調整の他指頭圧痕も観察できる。また１３の突帯下部には円形透かしが施されており、その直径は１０．０ｃｍに復元できる。

１４は体部の細片である。外面に施されたハケ調整は３・４条／１ｃｍで極めて粗いものである。

１５～１７は底部の破片である。これらはともに淡輪技法を用いたもので、外端面及び底面に繊維状の圧痕が確認できる。外面調整はすべてタテハケのちヨコハケが施され、内面調整はヨコナデ調整が行われている。

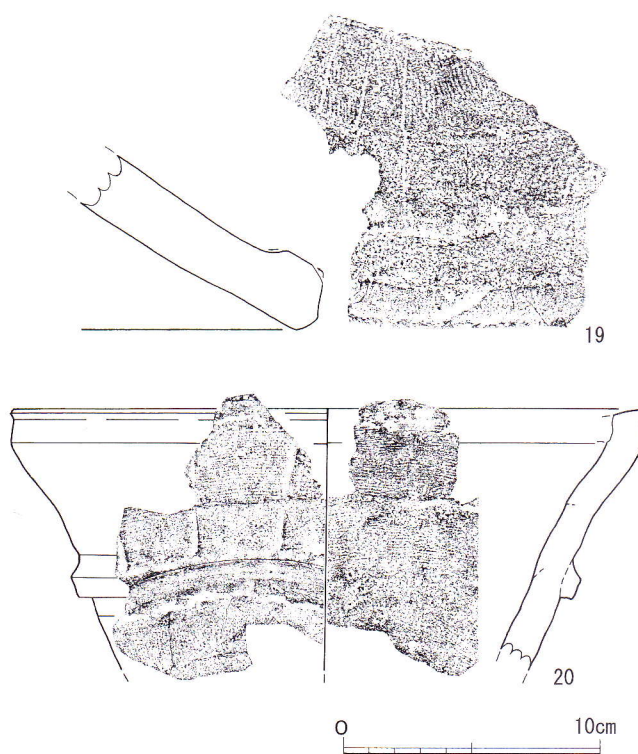
以上の円筒埴輪の焼成は、土師質のもの（１～５・８・１０・１２・１３・１７）と須恵質のもの（６・７・９・１１・１４～１６）があり、特に６は薄手で褐色に堅く焼き締まっている。胎土はやや粗いものが大半で、比較的胎土の密な個体は、１・２・６・１０・１２である。また、ほとんどの個体には石英が含まれ、石英以外では赤色軟質粒が目立つ。これらの出土位置は、１・３・９・１０・１１が第３区の第５層、２が第１区の第３層、４・８・１４が第３区の第５ｂ～５ｃ層、５・７が２・３区の排土、６・１６が第３区の第３～４層、１２・１７が第１区の第５ｂ層、１３が第２区の第５層、１５が第２区の第４層である。

（２）朝顔形埴輪（第５図１８、図版３４）

１８は朝顔形埴輪口縁部中位の段状部の破片である。突帯上部の外面調整はタテハケで、内面調整は剥離のため不明である。焼成はやや軟質の土師質焼成で、内外面とも淡赤褐色に発色している。胎土は比較的密で石英が含まれている。この埴輪の出土位置は第１区の第５ｂ層である。

（３）蓋形埴輪（第６図１９・２０、図版３４）

１９・２０は蓋形埴輪である。１９は、笠下半部先端の破片で、外面にはタテハケ調整を行った後、ヘラ描によって肋木を表現している。２０は立ち飾りをもたないタイプのもので、欠失している口縁部はほ



第６図 遺物実測図２

ぼ水平に屈折するものと考えられる。外面には1条の突帯が巡り、突帯上部は一定間隔で静止するヨコハケが、下部にはタテハケが観察できる。また内面調整はヨコハケである。

この2点はともに土師質焼成で、19の胎土は比較的粗く赤色軟質粒が目立つ。これらの出土位置は、19が第3区の第5b～5c層、20が第3区の第5層として取り上げたものである。

(4) 土器類 (第7図21～31、図版35)

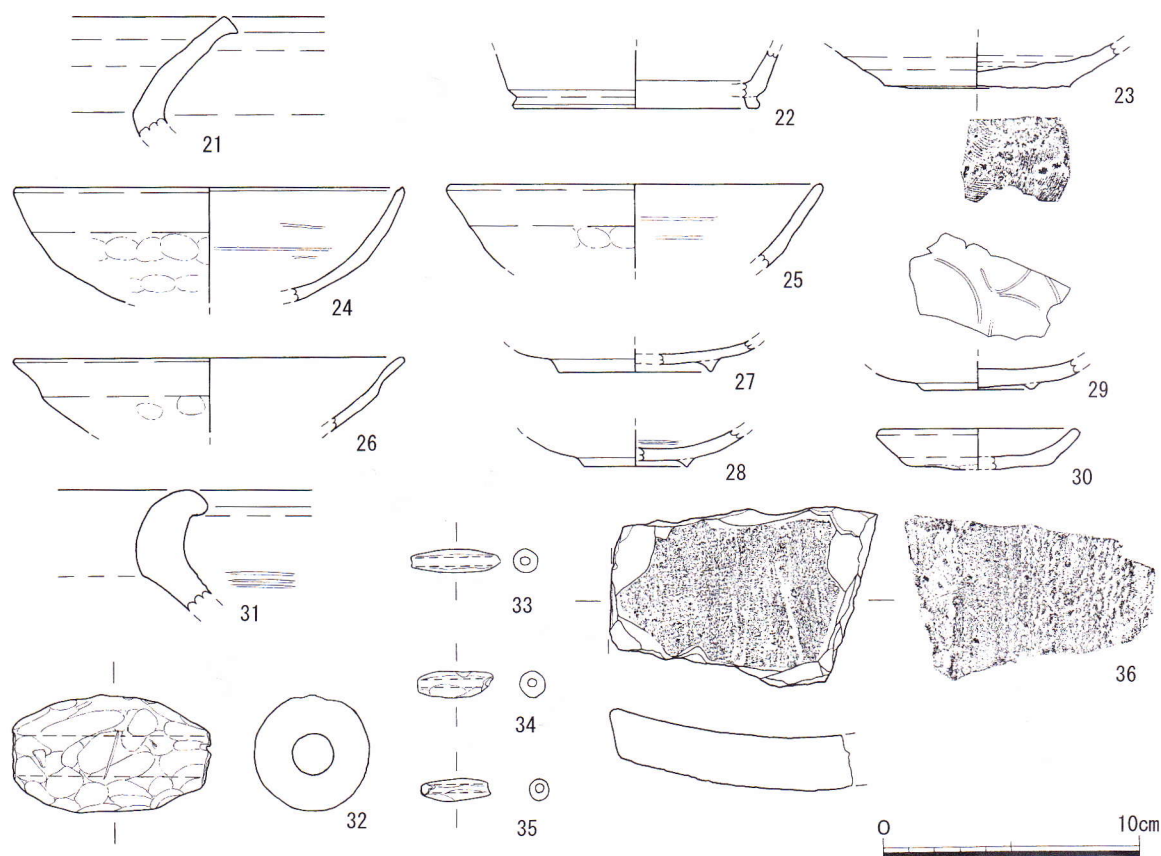
21～23は須恵器である。21は甕の口縁部細片で、強いヨコナデによってシャープに仕上げられたものである。内外面ともに緑灰色の自然釉が付着している。22は杯身下半の小片で、貼付による高台は外側際に付くタイプのものである。23は椀底部の小片で外底面に糸切り痕を残すものである。

24～29は瓦器である。24～26は椀の口縁部で、口径は14.5～15.5cmの範囲にまとまりがある。外面の調整は上位のヨコナデと下部の指頭圧痕が観察できる。また内面調整は24・25には暗文が確認できるものの26は不明瞭で観察できない。27～29は椀の底部で、ともに比較的低い高台が貼付されている。底径は6.0cmのもの(27)と4.1cm前後のもの(28・29)がある。28・29には内面見込み部に暗文が確認できるが、27は不明瞭で確認できない。

30は土師器皿である。口径は7.8cm、器高1.6cmの法量で、淡褐色の色調をもつ。

31は瓦質土器甕の口縁部細片である。肉厚な口縁部は端部に至り外側に屈折させて丸くおさめている。体部外面には平行タタキが確認できる。

これらの出土位置は、21が第3区SV-2前面の第5層、22・26が第1区の第3層、23・24が第3区の第5b～5c層、25が第2区の第5層、27・29・31が第2区の第4層、28が第3区の第3～4層、30が第2区の層位不明遺物として取り上げたものである。



第7図 遺物実測図3

(5) 土製品 (第7図32~35、図版35)

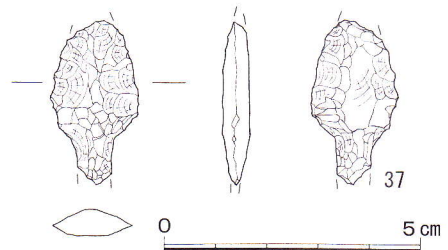
32~35は管状土錘である。32は全長7.8cm、幅4.5cmの法量をもつほぼ完形品で、重量は146.8gである。33~35は全長3.0cm前後、幅1.0cm程度の比較的小さなもので、重量は33・34が2.6g程度、35が1.3gである。これらの出土位置は、32・34が第3区の第3~4層、33が第2区の第5層、35が第3区の第2層である。この他、土錘では第2・3区の敷地内で摩滅の著しい有溝土錘を1点表面採集した(図版35a)。

(6) 瓦 (第7図36、図版35)

36は平瓦の小片である。凹面に布目、凸面に縄タタキ痕を残すもので、胎土はやや粗く黒色粒が目立つ。焼成は須恵質焼成で、淡灰色に発色している。第3区の第3~4層から出土した。

(7) 石器 (第8図37、図版35)

37はサヌカイト製の有茎式石鏃である。残存長3.2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量3.1gのもので、先端部及び基部が欠失している。第2・3区の埋戻時に出土したものである。



第8図 遺物実測図4

5. まとめ

今回の調査における最大の成果はその目的であった釜山古墳に関する遺構の検出にあるといえる。特に第3区では、外堤部の葺石と傾斜角度、推定ではあるものの古墳周濠底面の標高及び残存周濠上端幅を確認した。また第1・2区においてもその両者が標高的にみて古墳周濠内部であることが確認できたことは重要な成果であるものといえよう。

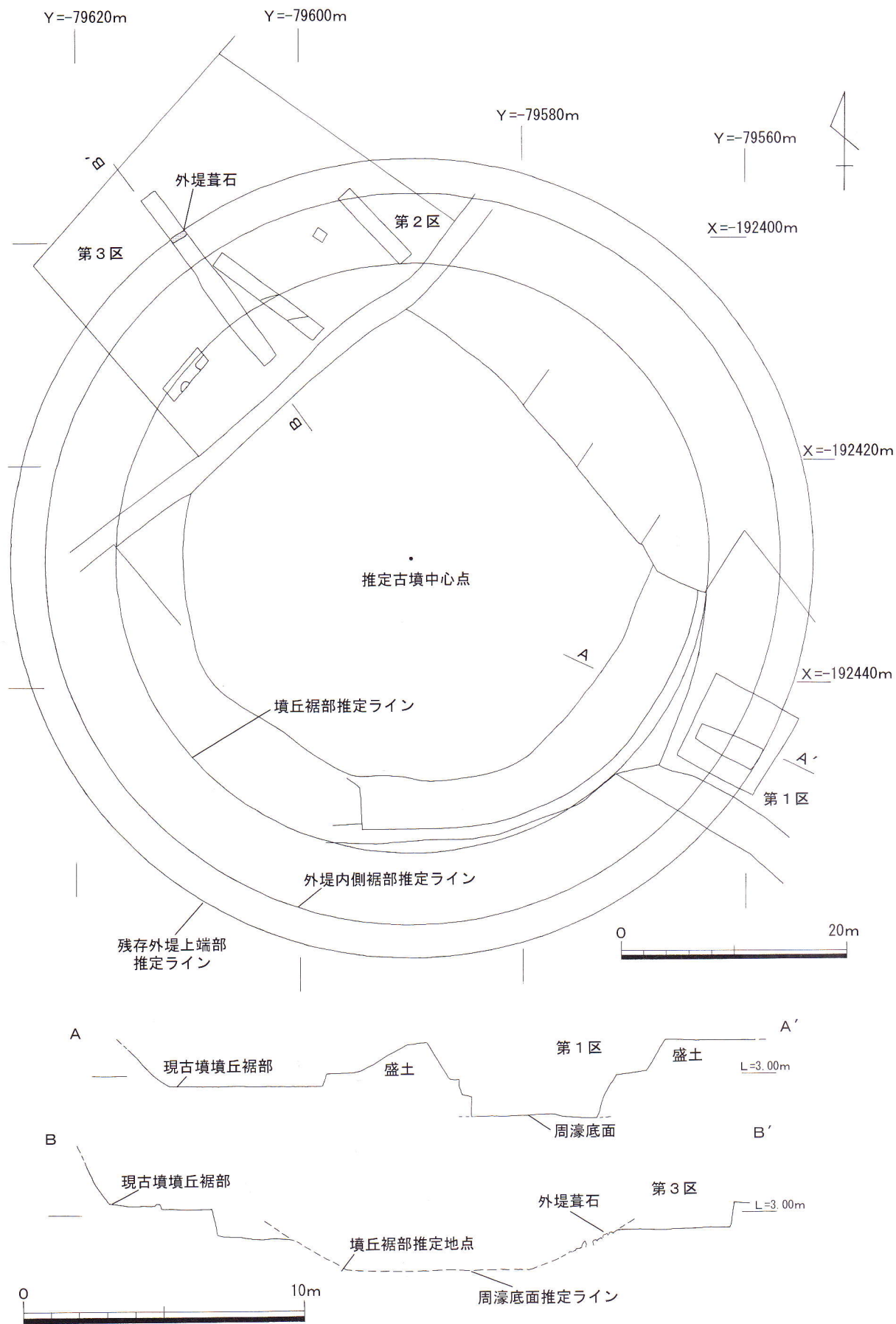
以上の成果を基に推定ではあるものの築造時の古墳復元案を示してまとめとしたい。

まず、第3区の南壁土層図から外堤葺石の傾斜を示し、周濠底面推定ラインから周濠底面の幅及び傾斜変換点を推定する。そして、周辺の地形図から最も古墳裾部の状態が残存していると考えられる古墳南東部及び南斜面裾部のカーブを基に垂線を古墳中央部に引き古墳の中心点を導き出す。その中点から残存外堤上端部・外堤内側裾部・墳丘裾部に対して円周を求める。このことを図示すると第9図となり、第2・3区では外堤葺石部分等相違なく収まるものとみられるが、第1区において外堤葺石が検出されていないことから若干の矛盾が生じる。しかし、現状ではこれ以上の復元は不可能であり、この復元図から古墳の規模を計測すると墳丘裾部までの全長が52m、残存外堤までの全長が72mとなり、第1区の様相からさらに大きくなる可能性も考えられる。この数値は平成4年に行われた測量成果よりも大きくなり、また古墳の周囲がかなり削り取られていることから今後の検討が必要と思われる。

以上、釜山古墳について述べてきたが、今回の調査成果だけではその全容を明らかにすることはとうてい不可能であり、今回の復元案は推測の域を脱してはいないことが明らかである。周濠を含めた古墳の保護など今後の動向に期待したい。(井馬)

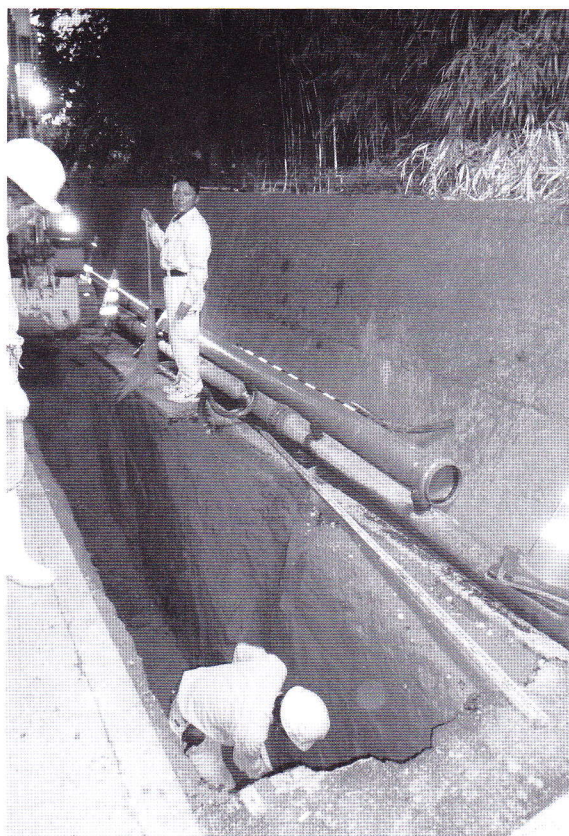
【参考文献】

益田雅司「木ノ本Ⅲ遺跡第4次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1992年
河内一浩ほか「紀ノ川流域の中期古墳—木ノ本古墳群を中心として—」『考古学論集第4号』考古学を学ぶ会 1992年



第9図 釜山古墳推定復元図

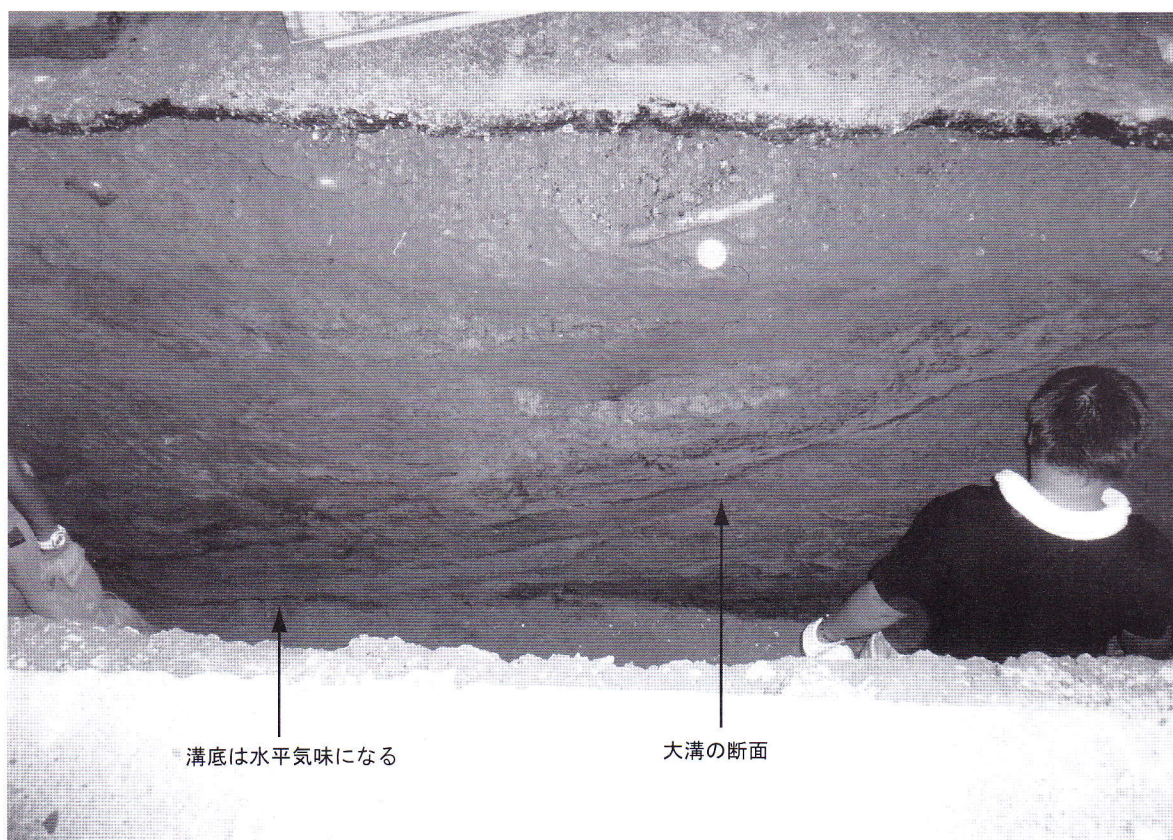
版 図



1区 堀削状況（西から右上の筈が堤跡）



6区 中央南壁（大溝の位置）



6区 中央南壁（大溝断面写真）

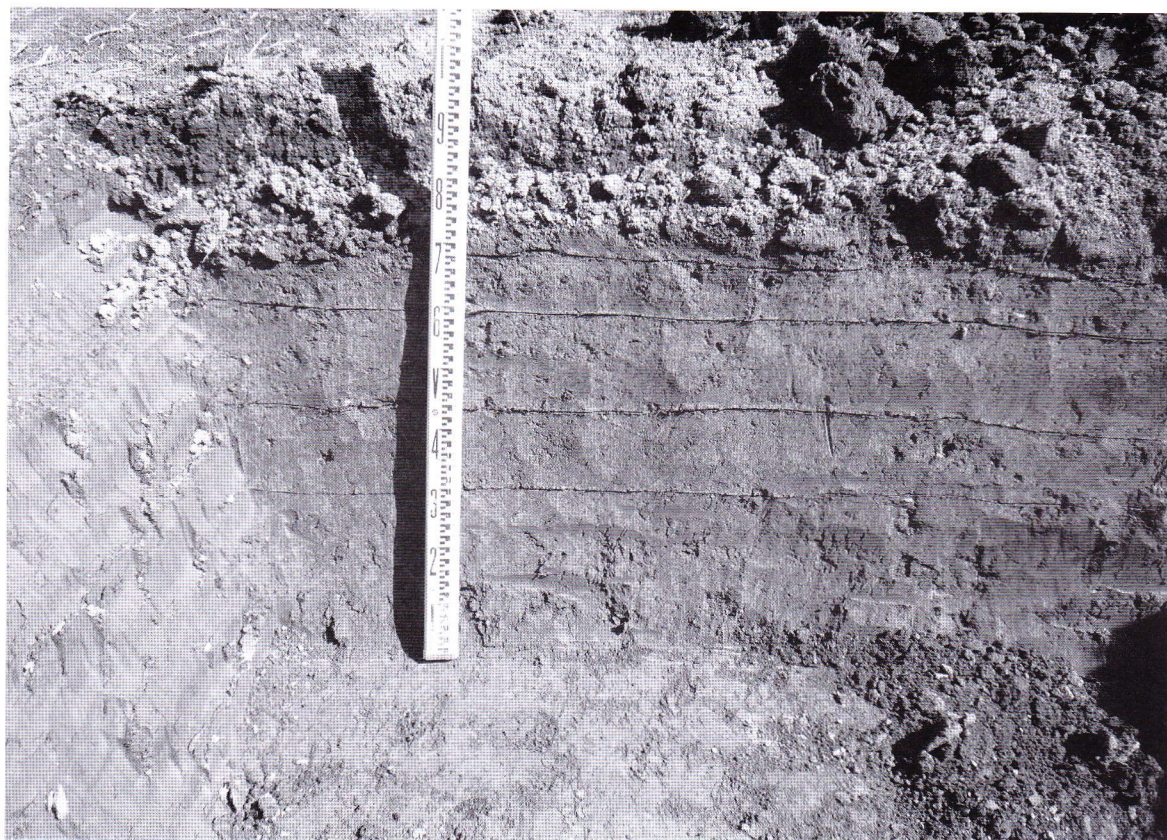


5区 中央部掘削状況（石垣状遺構）



5区 中央部掘削状況（石垣状遺構、スタッフの下端あたりに胴木があった）

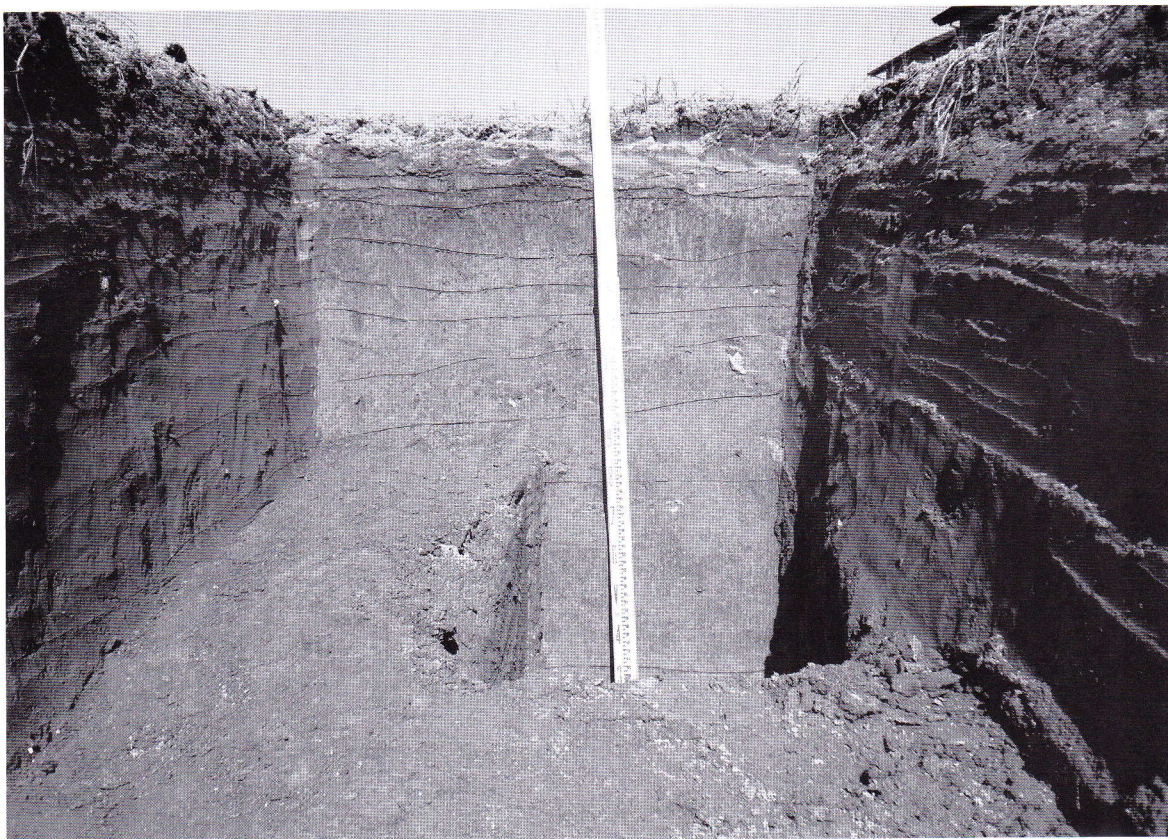
版 図



1区 東壁土層堆積状況（西から）



3区 西壁土層堆積状況と落ち込み（南東から）



4区 北壁土層堆積状況（南から）



4区 西壁土層堆積状況（東から）

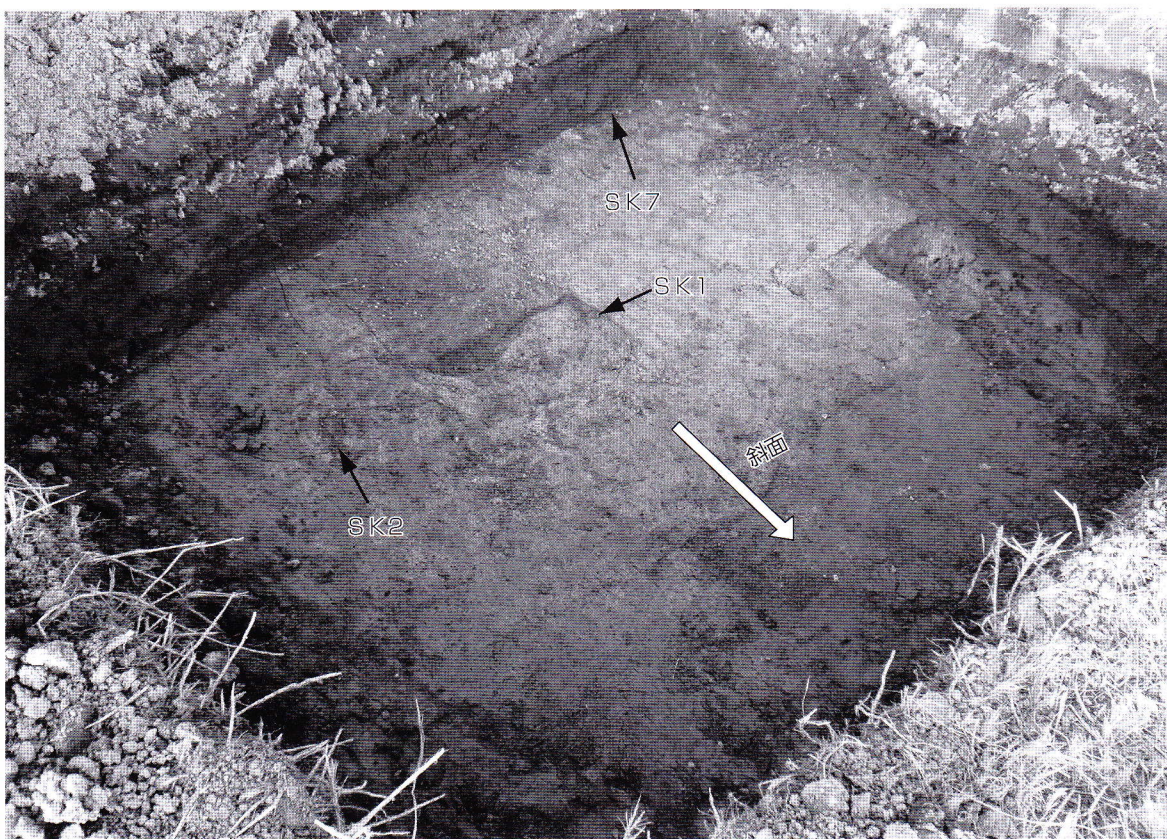
版 圖



1区 全景（南東から）



1区 遺構（SK4）と北壁土層堆積状況（南から）

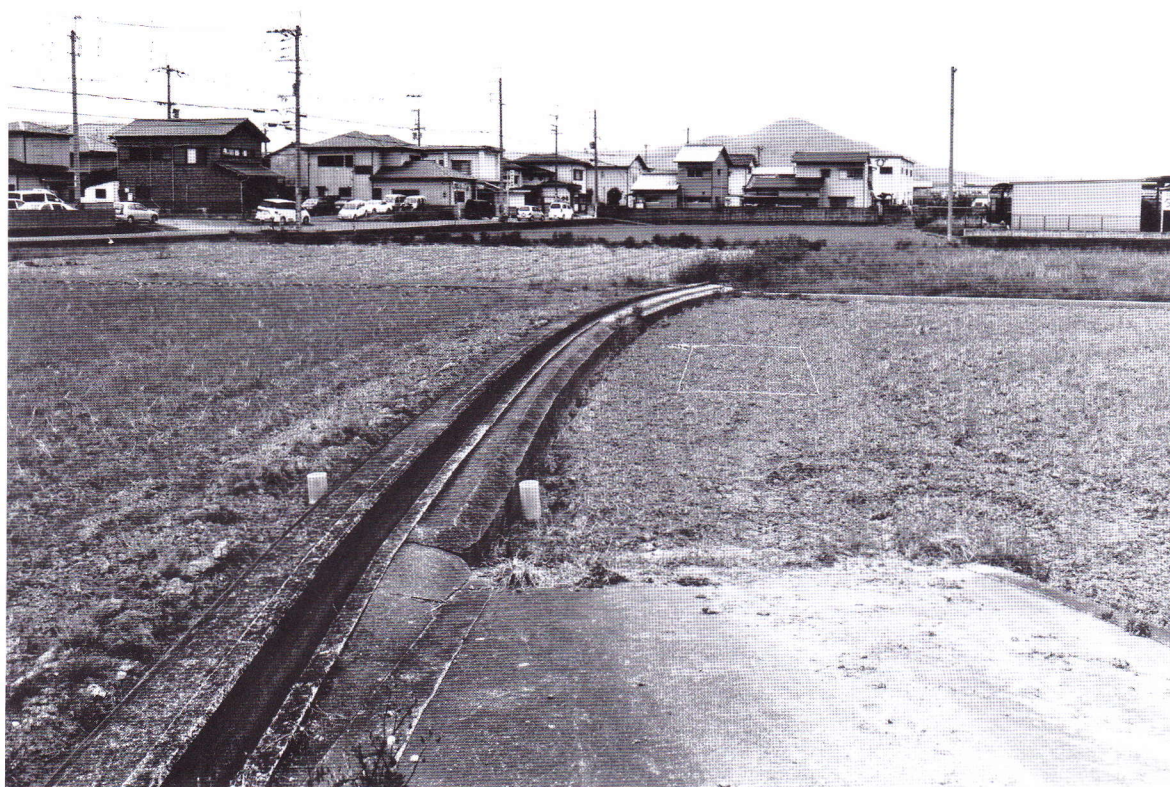


2区 遺構面（南西から）



2区 東壁土層堆積状況（西から）

版 図



第1～4区周辺 調査前の状況（北から）



第5～7区周辺 調査前の状況（西から）



第1区 全景（北から）



第2区 全景（北から）



第3区 全景（北から）



第4区 全景（西から）



第5区 全景（南から）



第6区 全景（南から）



第7区 全景（南から）



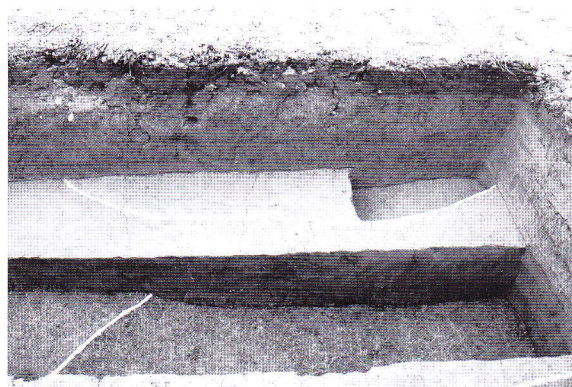
第8区 全景（東から）



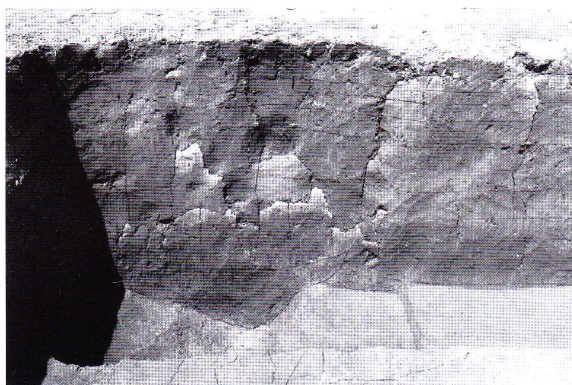
第9区 全景（東から）



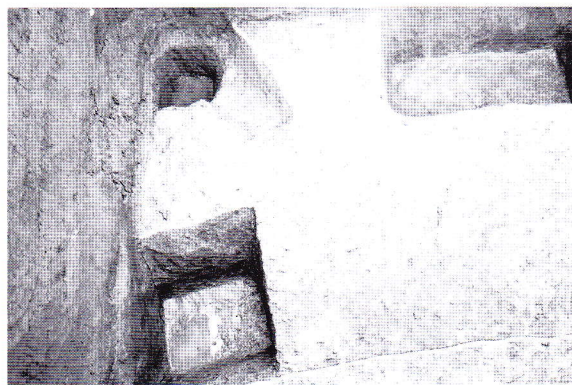
第1区南壁 SD-1土層堆積状況（北から）



第2区 SK-1（西から）



第4区北壁 SD-3土層堆積状況（南から）



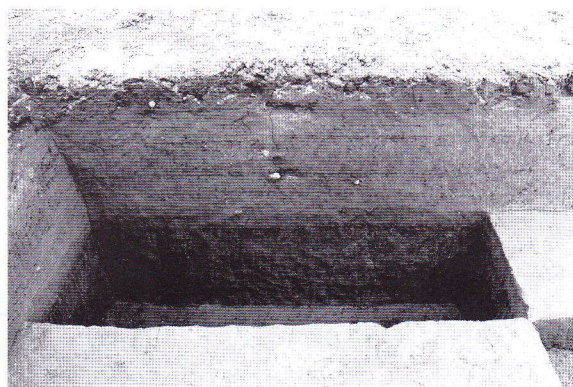
第5区 SD-4・5細部（西から）



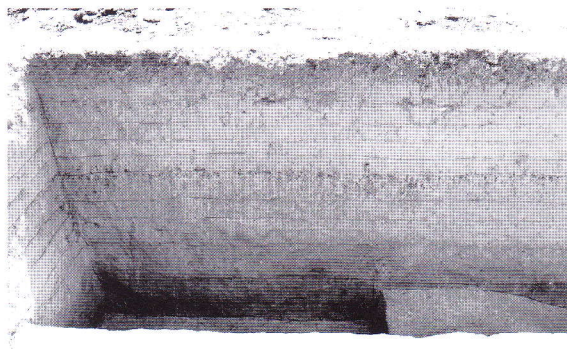
第5区南壁 SD-4土層堆積状況（北から）



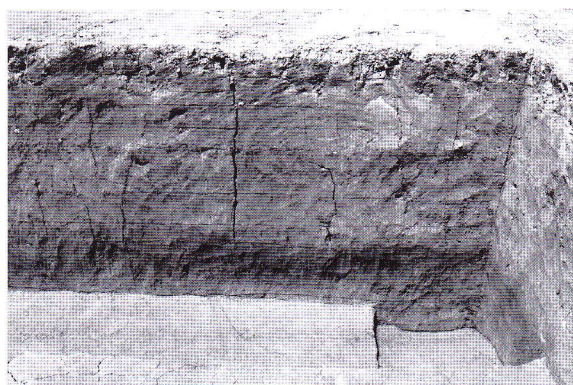
第1区南半部 西壁土層堆積状況（東から）



第2区北半部 東壁土層堆積状況（西から）



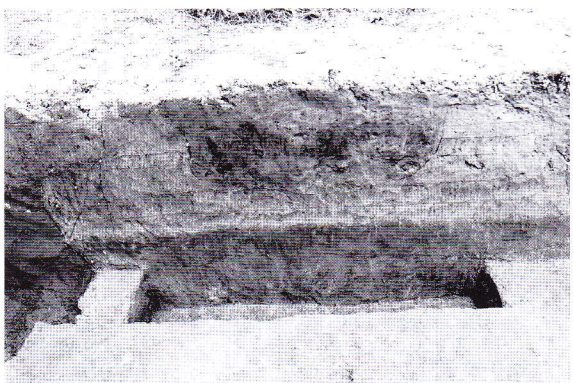
第3区北半部 東壁土層堆積状況（西から）



第4区東半部 北壁土層堆積状況（南から）



第5区北半部 東壁土層堆積状況（西から）



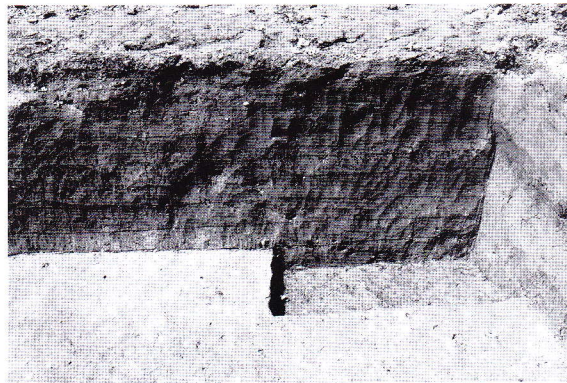
第6区中央部 東壁土層堆積状況（西から）



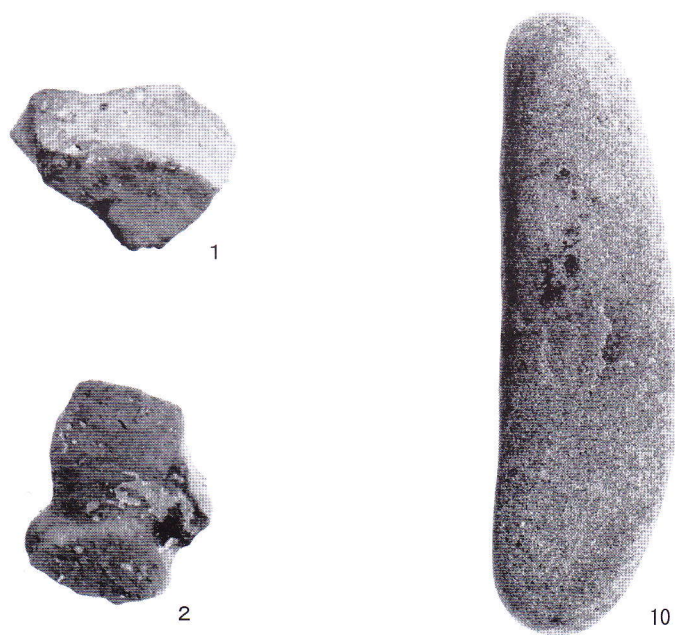
第7区北半部 東壁土層堆積状況（西から）



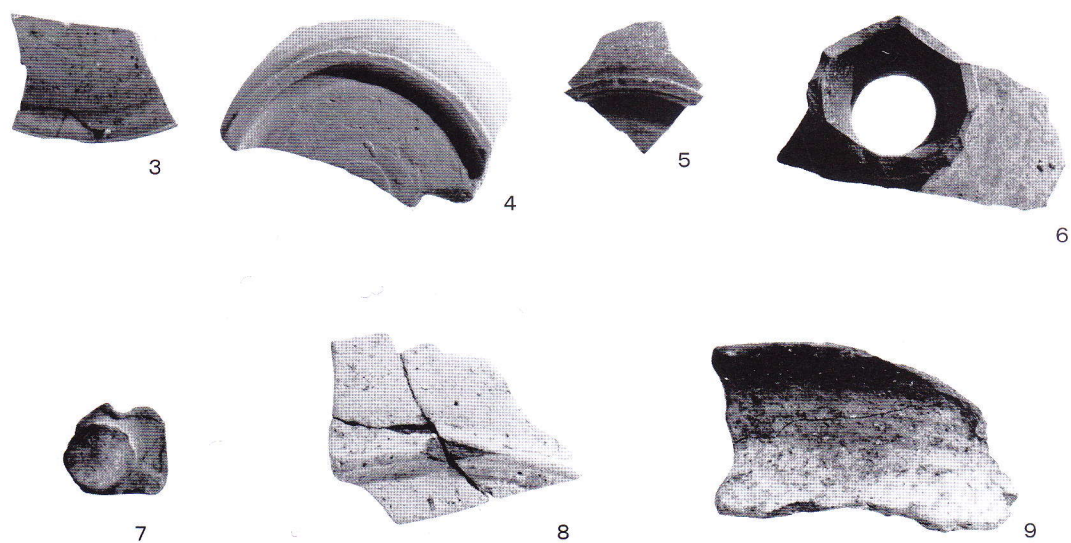
第8区東半部 北壁土層堆積状況（南から）



第9区東半部 北壁土層堆積状況（南から）



弥生土器（底部1・2） 石器（叩石10）



須恵器（杯蓋3、杯身4・5、壺6） 土師器（杯蓋7、皿8、甕9）

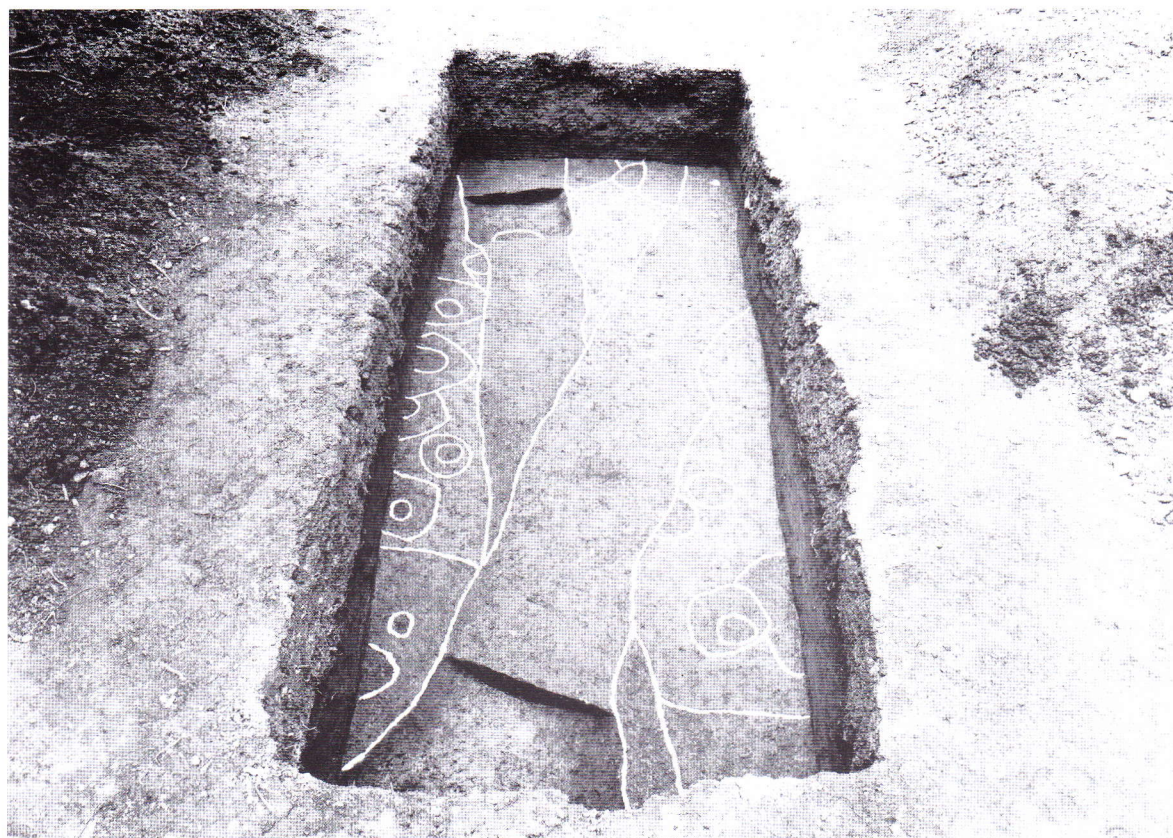
版 図



調査前の状況（北西から）



調査前の状況（南西から）



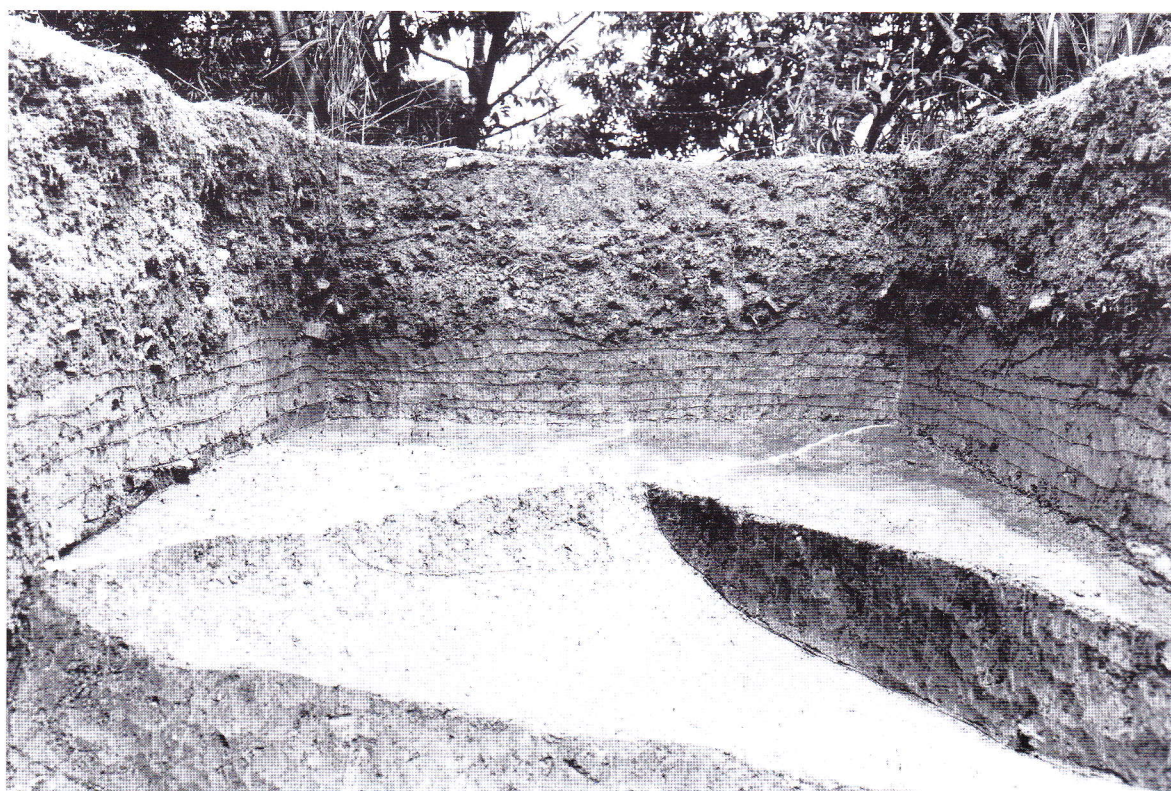
第1区 全景（東から）



第1区 東半部 北壁土層堆積状況（南から）



第2区 全景（西から）



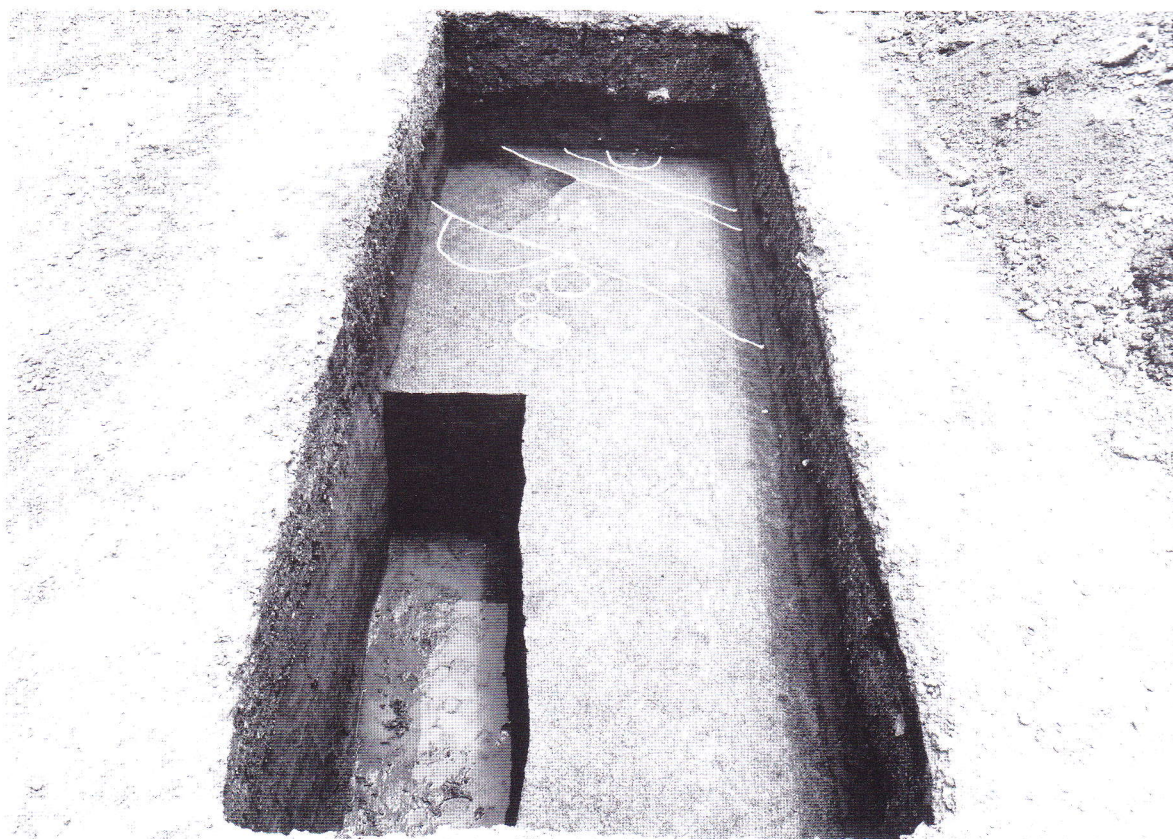
第2区 東壁土層堆積状況（西から）



第3区 全景（西から）



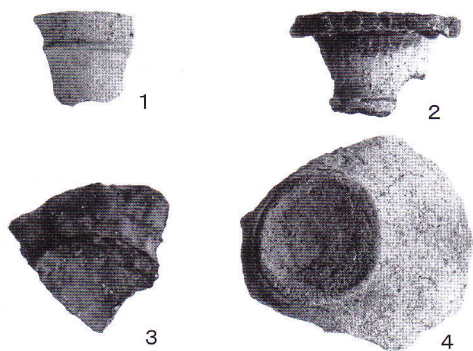
第3区 西半部 北壁土層堆積状況（南から）



第4区 全景（西から）



第4区 西半部 北壁土層堆積状況（南から）



弥生土器（壺1・2、壺底部3・4）



弥生土器（甕底部5）



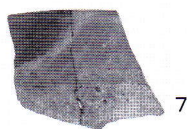
6



9



10



7



8

弥生土器（甕底部6、高杯7・8）



11



12

土師器（高杯9・10） 須恵器（杯蓋11、杯身12）



13



14



15

土師器（皿13・14） 須恵器（壺底部15）



16

石器（サヌカイト製打製石鏃16）



18



17



19

石器（結晶片岩製磨製柱状片刃石斧17、砂岩製石杵18、砂岩製叩石19）



20



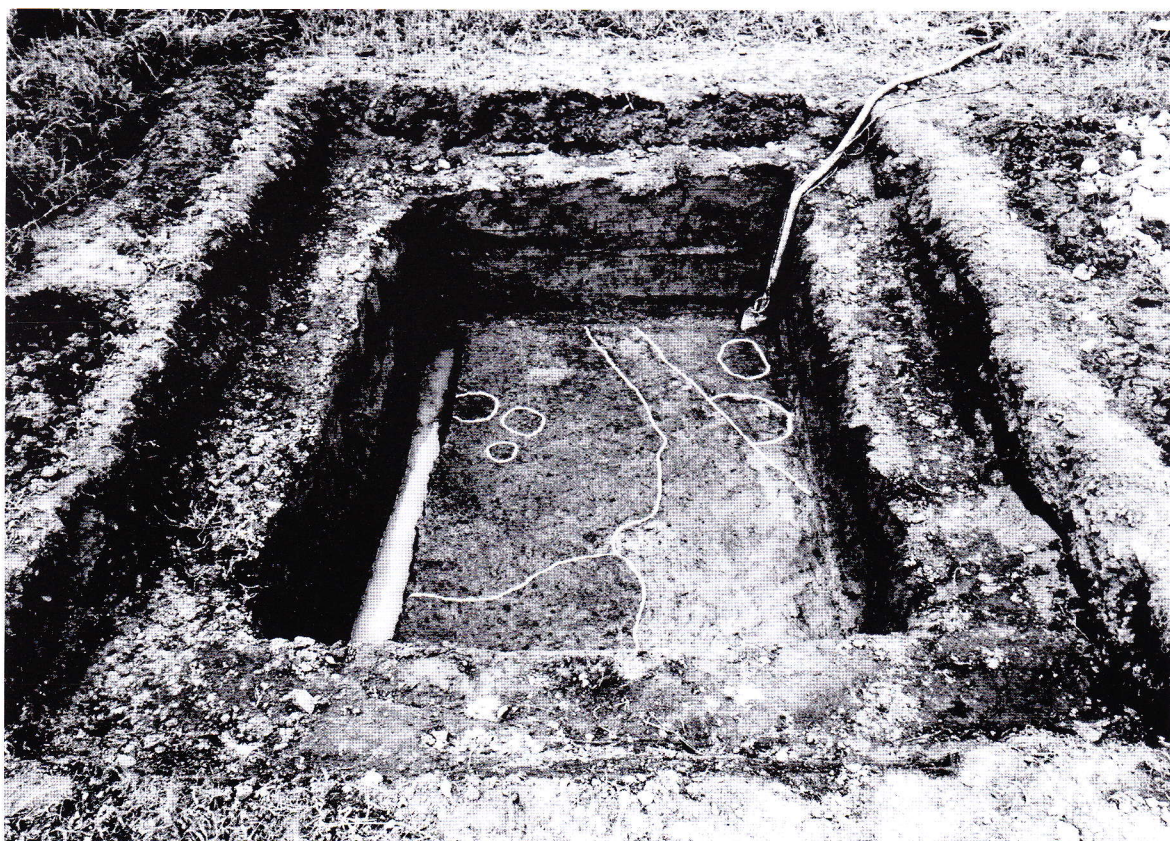
21

土製品（カマド20、管状土鍾21）

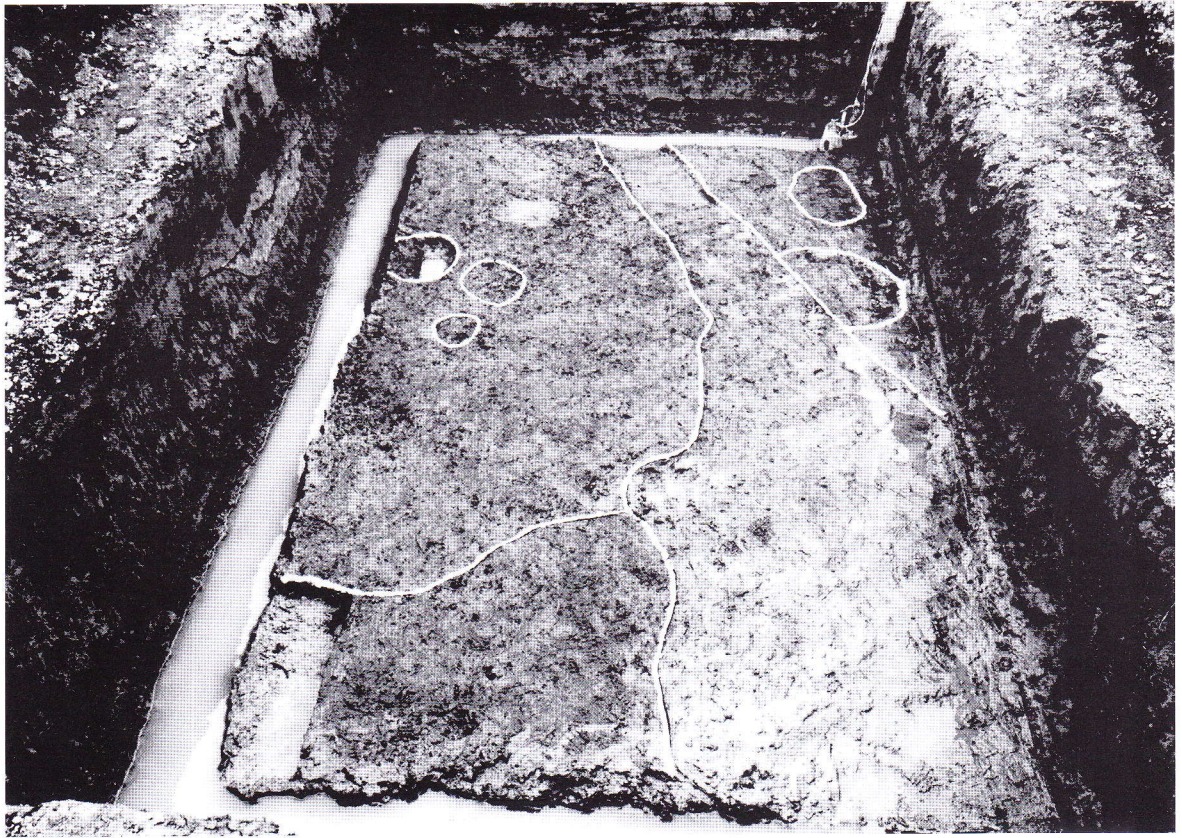
版 圖



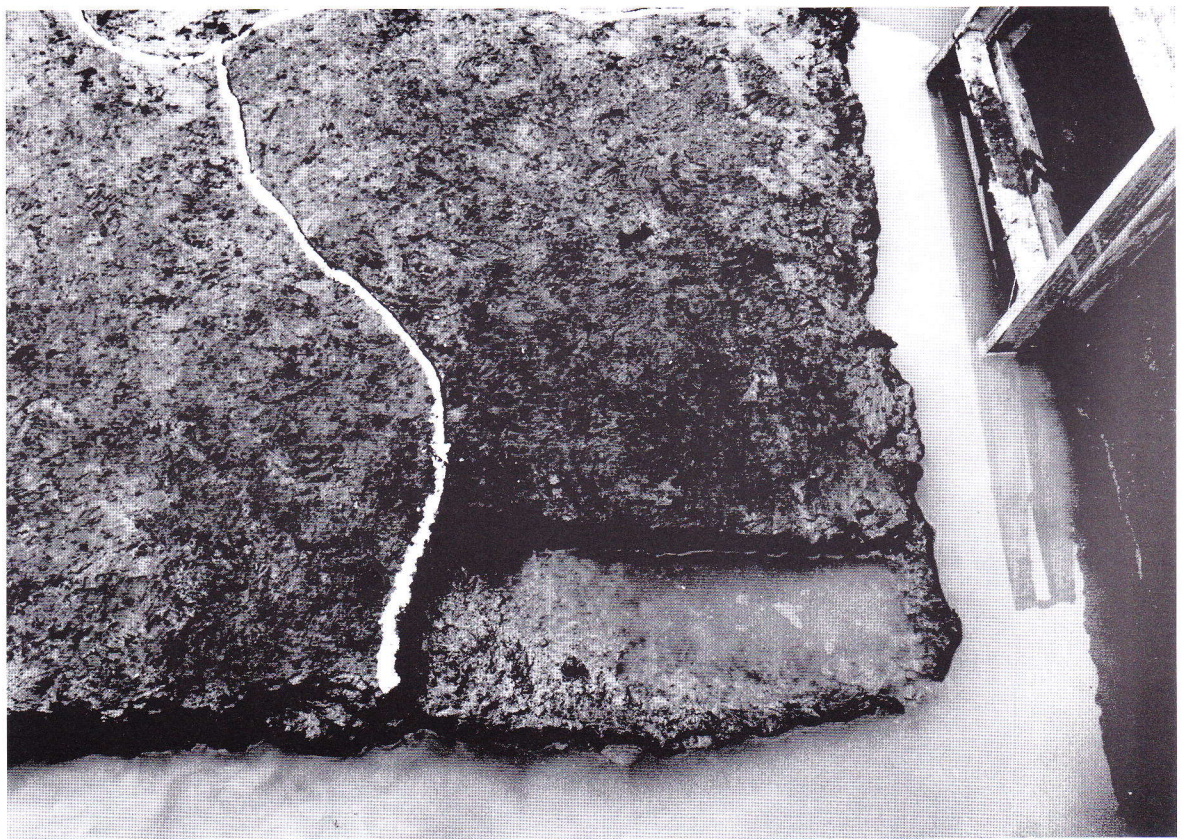
調査前の状況（南から）



第1区 全景（西から）



第1区 遺構一部掘削状況（西から）



第1区 SK-1（北から）



第2区 全景（南から）



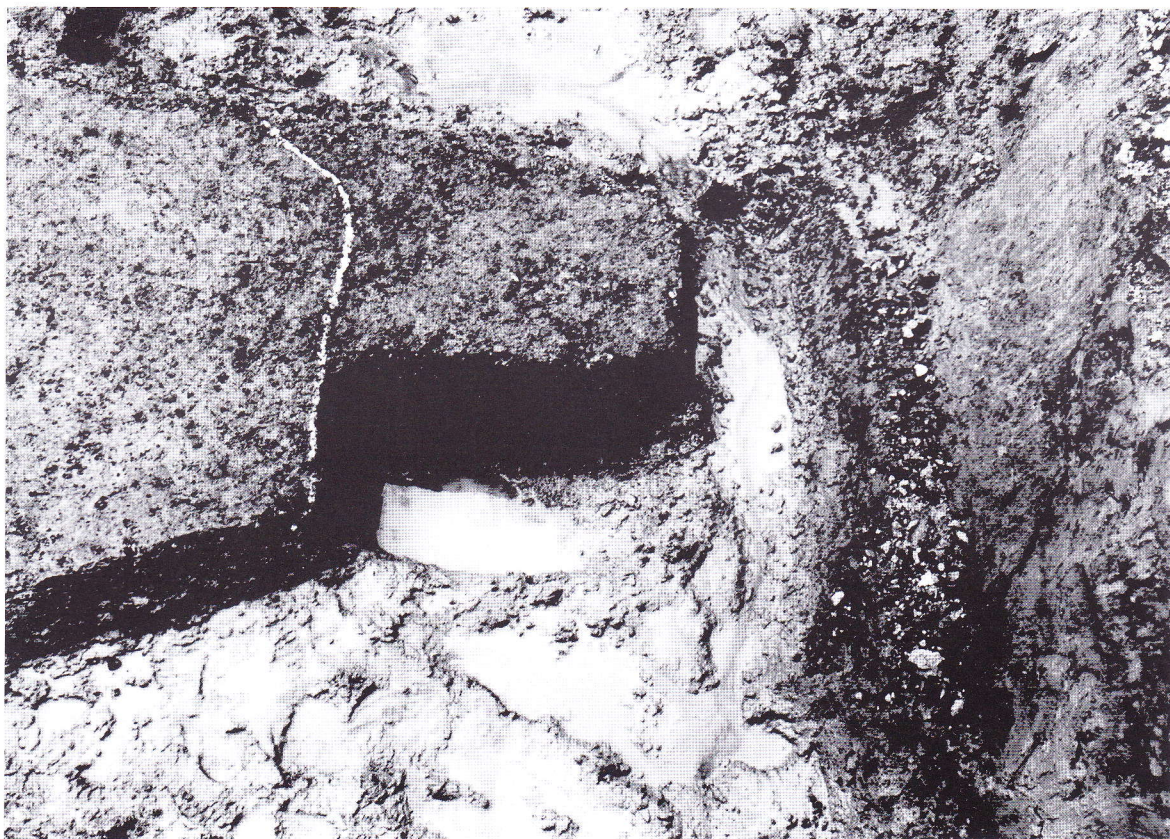
第3区 全景（南から）



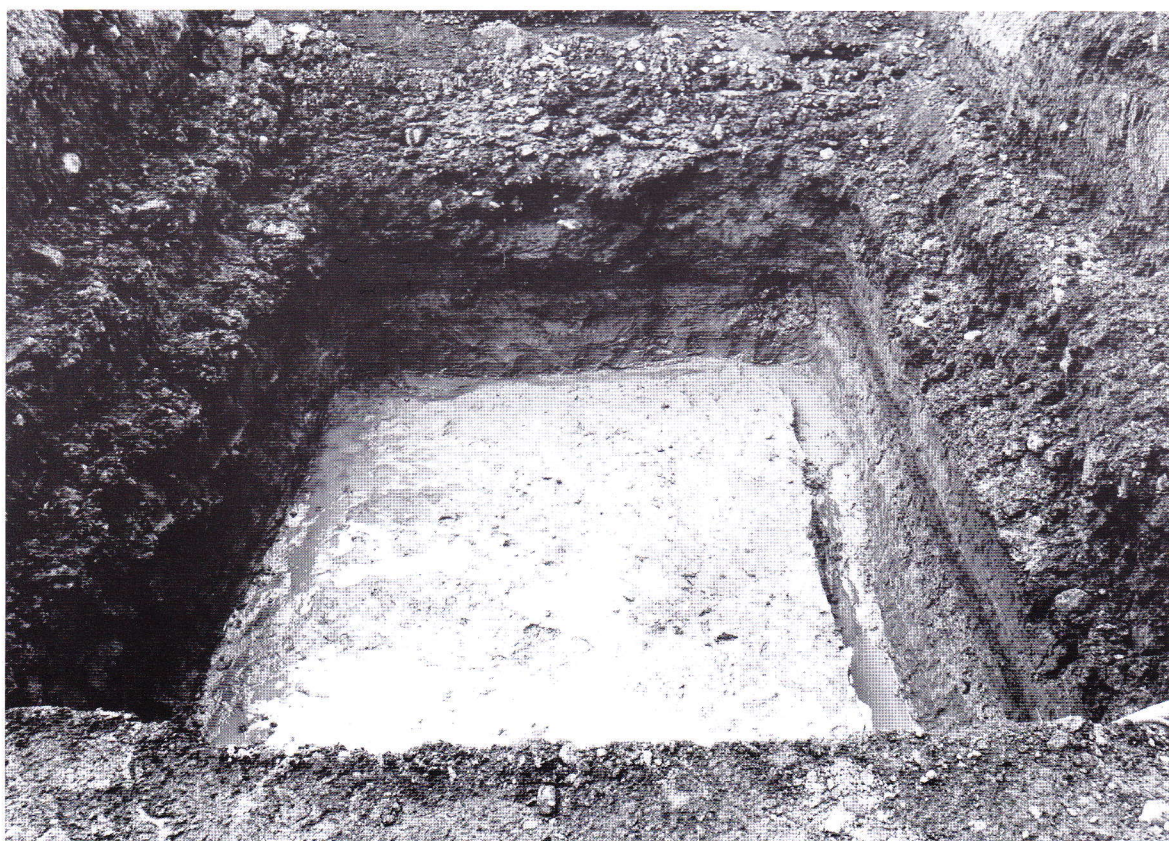
第4区 全景（南から）



第4区 遺構一部掘削状況（南から）



第4区 SD-1 (南から)



第5区 全景 (南から)

図 版



調査前の状況（南から）



第1区 全景（南から）



第1区 SD-3、P-10（西から）



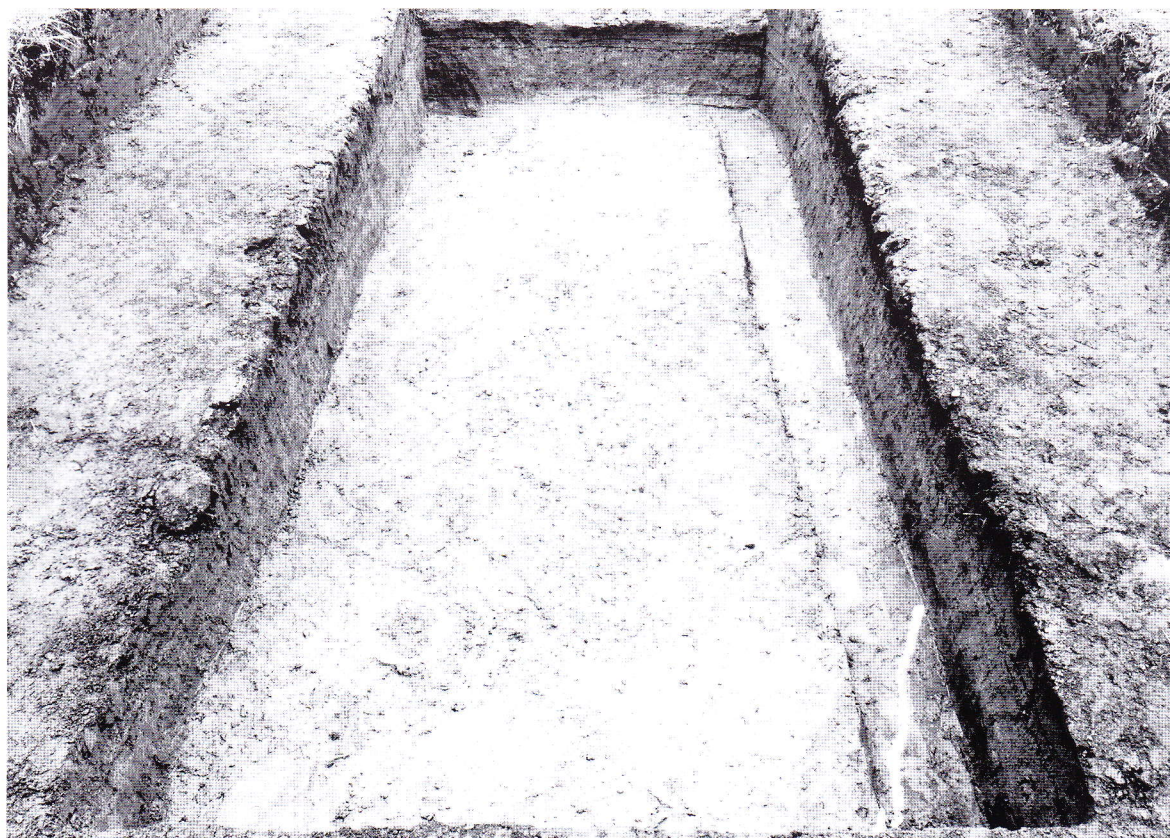
第2区 全景（南から）



第2区 SD-3 (南から)



第2区 東壁土層堆積状況 (西から)



第3区 全景（南から）



第3区 P-1～3（南から）



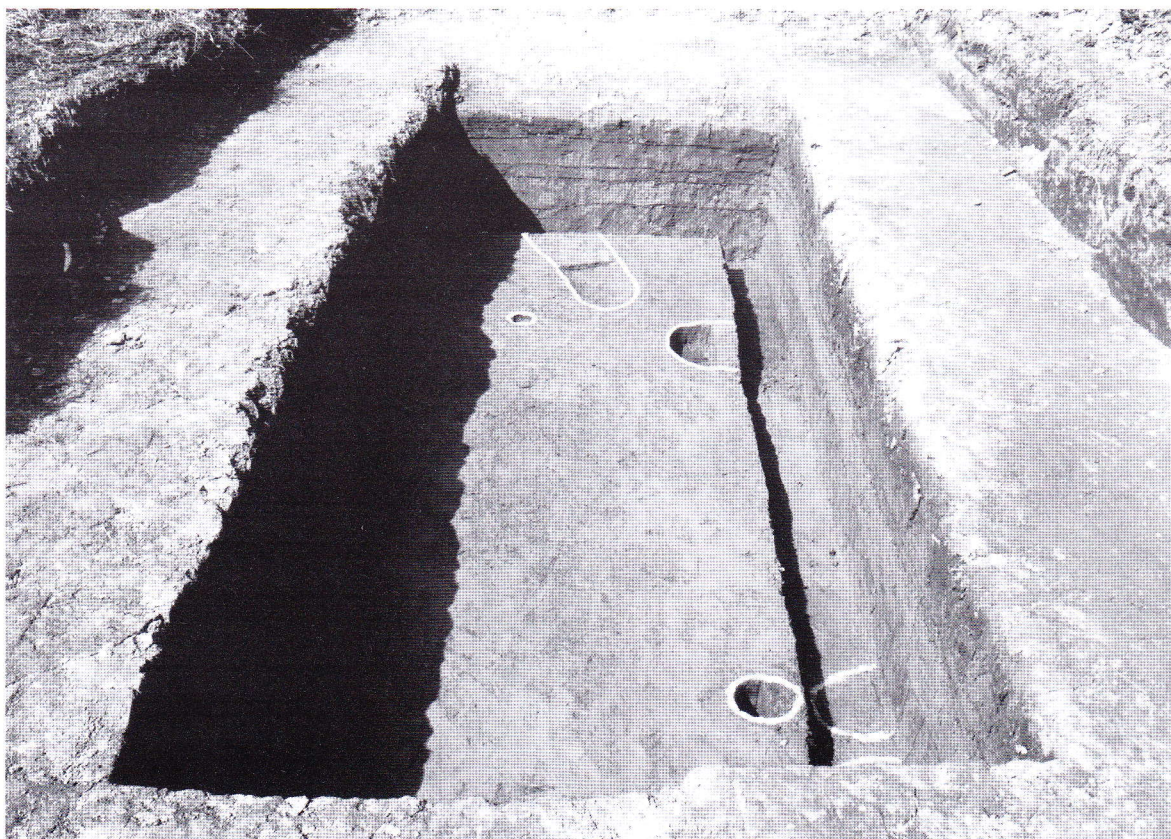
第3区 SD-1 (西から)



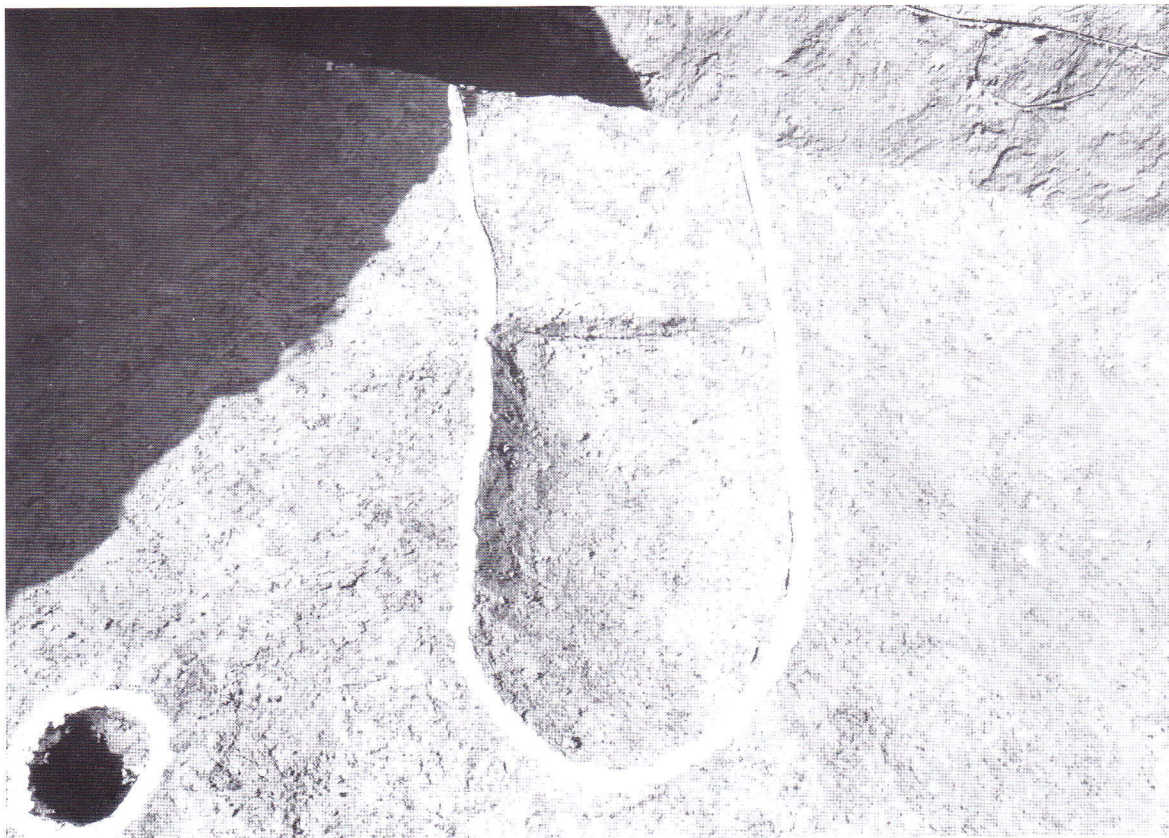
第4区 全景 (南から)



第4区 北壁土層堆積状況（南から）



第5区 全景（南から）



第5区 SD-2 (南東から)

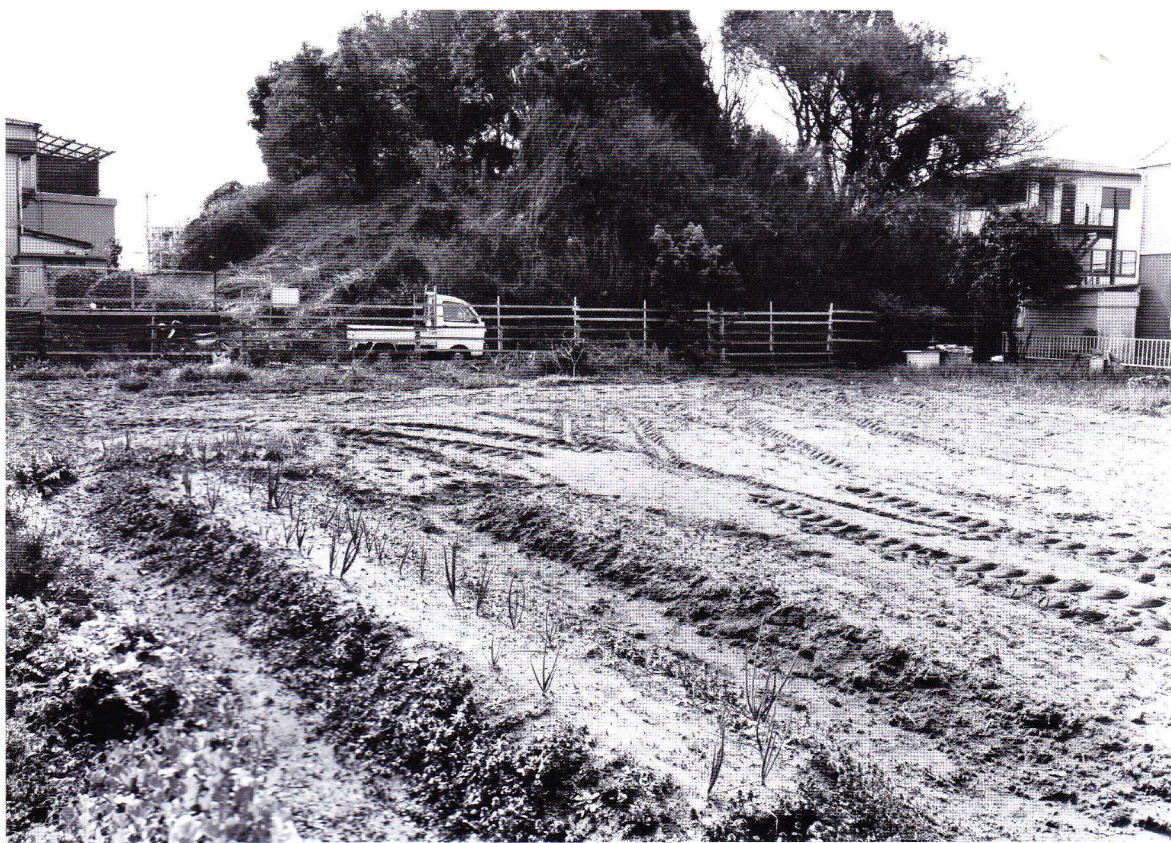


第5区 P-5 (西から)

版 図



第1区 機械掘削終了後の状況（東から・正面が釜山古墳）



第2・3区 調査前の状況（北西から・正面が釜山古墳）



第1区 全景（東から）



第2区 全景（北西から）



第3区 全景（北西から）



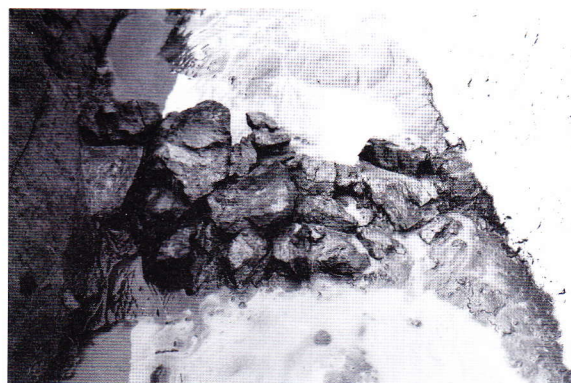
第3区 全景（南東から）



第3区 SV-1 (北東から)



第3区 SV-2 (北東から)



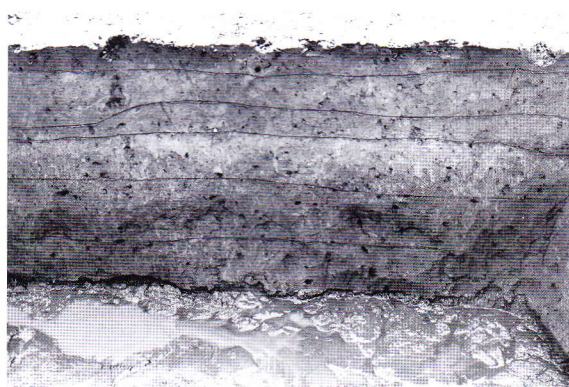
第3区 SV-2 (南東から)



第3区 サブトレンチ3 (東から)



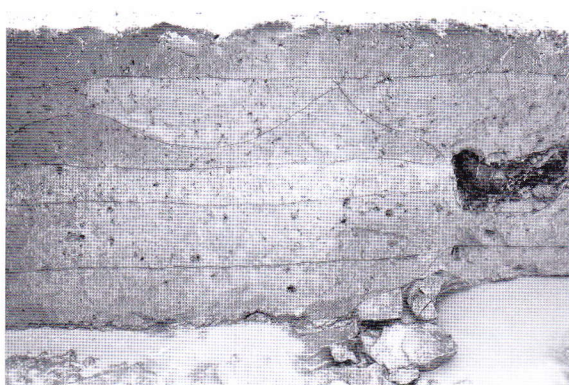
第1区西半部 北壁土層堆積状況 (南から)



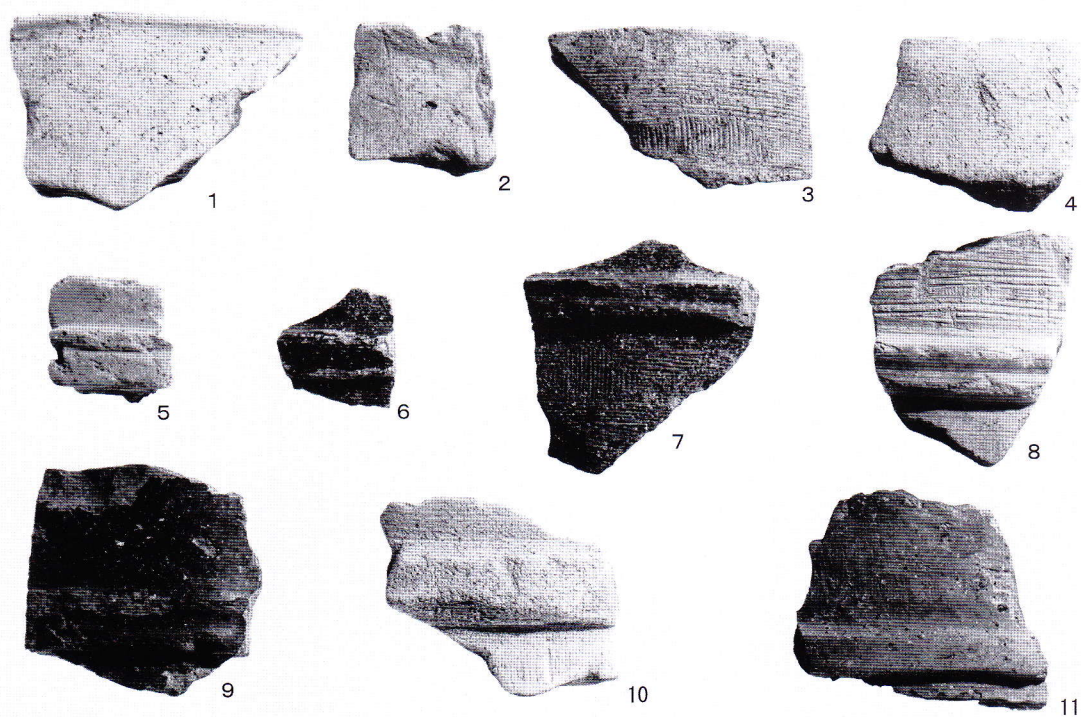
第2区 X=-192398m付近南西壁土層堆積状況 (北東から)



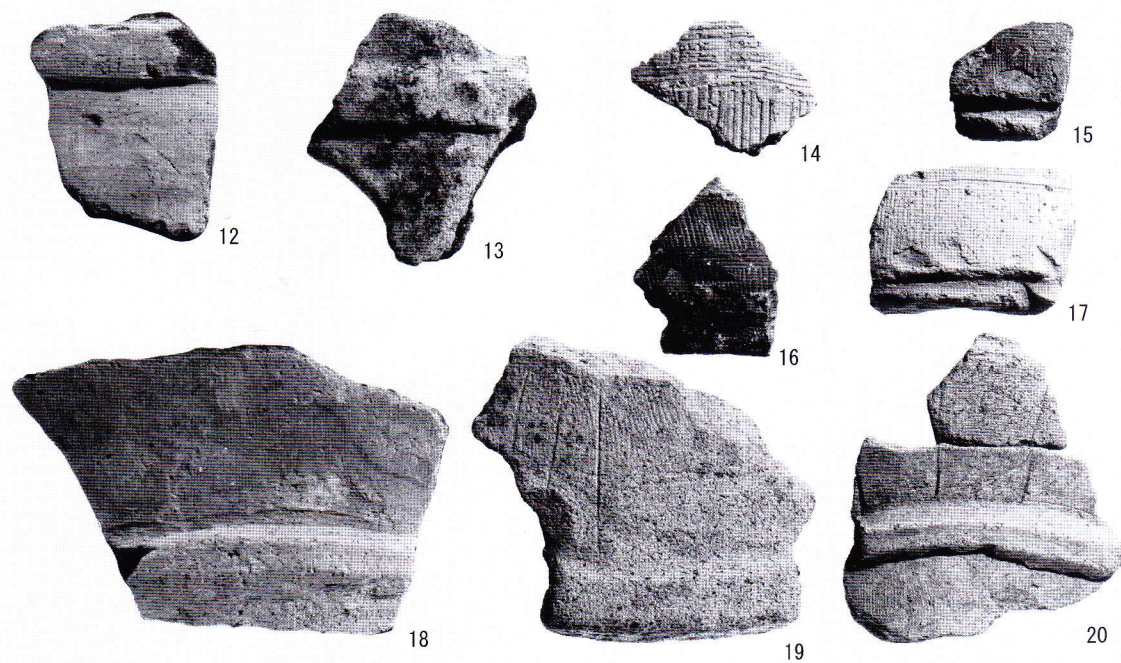
第3区 SV-1 周辺南西壁土層堆積状況 (北東から)



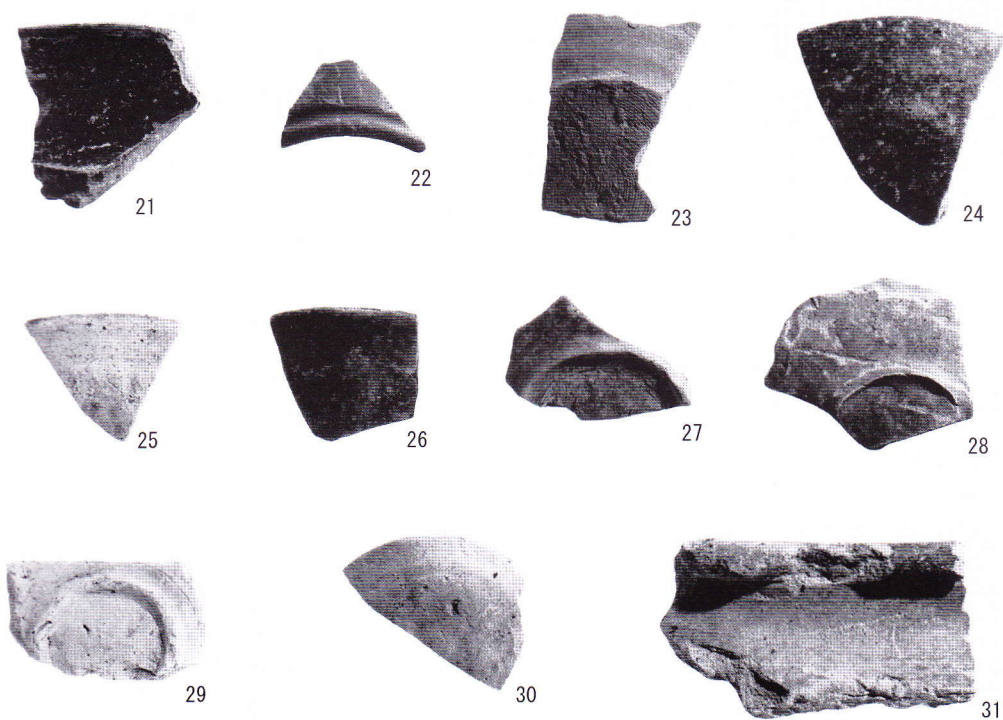
第3区 SV-2 周辺南西壁土層堆積状況 (北東から)



埴輪（円筒埴輪 1～11）



埴輪（円筒埴輪12～17、朝顔形埴輪18、蓋形埴輪19・20）

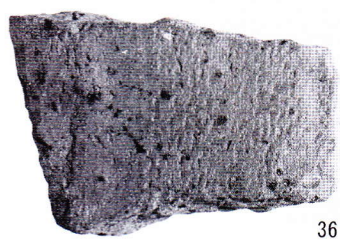


須恵器（甕21、杯身22、椀23） 瓦器（椀24～29） 土師器（皿30） 瓦質土器（甕31）



土製品（管状土錘32、有溝土錘 a）

土製品（管状土錘33～35）



瓦（平瓦36）



37

石器（石鏃37）

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはくつちょうさがいほう		
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報		
副書名	平成20年度		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	前田敬彦 大木要 北野隆亮 井馬好英 藤敷勝則		
編集機関	1) 和歌山市教育委員会 2) 財団法人和歌山市都市整備公社		
所在地	1) ☎640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 2) ☎640-8146 和歌山県和歌山市一番丁3 TEL 073-435-1129		
発行年月日	西暦 2010年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むそたいせき 六十谷遺跡 (調査一覧1、市教委①)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	84	135° 12′ 34″	34° 15′ 31″	20080401	2.64	開発に伴う 遺跡確認
うだもりいせき 宇田森遺跡 (調査一覧12、市教委②)	わかやまけんわかやましうだもり 和歌山県和歌山市宇田森	3020150	149	135° 15′ 05″	34° 15′ 18″	20080512	11.00	開発に伴う 遺跡確認
とりいせき 鳥井遺跡 (調査一覧21、市教委③)	わかやまけんわかやましのうがわ 和歌山県和歌山市直川	3020150	92	135° 13′ 33″	34° 15′ 36″	20080527	11.84	開発に伴う 遺跡確認
おおたじょうみづめつとつあ 太田城水攻め堤跡 (調査一覧29、市教委④)	わかやまけんわかやましでみず 和歌山県和歌山市出水	3020150	420	135° 12′ 10″	34° 13′ 57″	20080711 ～20080722	28.48	開発に伴う 遺跡確認
かなべいせき 川辺遺跡 (調査一覧34、市教委⑤)	わかやまけんわかやましかわなべ 和歌山県和歌山市川辺	3020150	145	135° 15′ 58″	34° 15′ 18″	20080725	17.30	開発に伴う 遺跡確認
うだもりいせき 宇田森遺跡 (調査一覧52、市教委⑥)	わかやまけんわかやましうだもり 和歌山県和歌山市宇田森	3020150	149	135° 15′ 03″	34° 15′ 19″	20081016	17.72	開発に伴う 遺跡確認
へのしたいせき 平の下遺跡 (調査一覧56、市教委⑦)	わかやまけんわかやましにのしょう 和歌山県和歌山市西庄	3020150	39	135° 06′ 56″	34° 15′ 33″	20081027	16.97	開発に伴う 遺跡確認
いさおいせき 有功遺跡 (調査一覧64、市教委⑧)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	77	135° 12′ 10″	34° 15′ 36″	20081119	21.71	開発に伴う 遺跡確認
たかいせき 高井遺跡 (調査一覧90、市教委⑨)	わかやまけんわかやましのうがわ 和歌山県和歌山市直川	3020150	91	135° 13′ 09″	34° 15′ 35″	20090218	40.45	開発に伴う 遺跡確認
かみくろだにいせき 上黒谷遺跡 (調査一覧95、市教委⑩)	わかやまけんわかやましかみくろだに 和歌山県和歌山市上黒谷	3020150	152	135° 15′ 56″	34° 16′ 12″	20090302	3.72	開発に伴う 遺跡確認
むそたいせき 六十谷遺跡 (調査一覧110、市教委⑪)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	84	135° 12′ 34″	34° 15′ 31″	20090327	7.07	開発に伴う 遺跡確認
かなべいせき 川辺遺跡 (調査一覧10、財団①)	わかやまけんわかやましさと 和歌山県和歌山市里	3020150	145	135° 16′ 09″	34° 15′ 29″	20080501 ～20080529	90.00	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだにいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧17、財団②)	わかやまけんわかやましくろだ 和歌山県和歌山市黒田	3020150	327	135° 11′ 49″	34° 13′ 47″	20080522 ～20080606	40.00	開発に伴う 遺跡確認
とりいせき 鳥井遺跡 (調査一覧41、財団③)	わかやまけんわかやましふちゅう 和歌山県和歌山市府中	3020150	92	135° 13′ 33″	34° 15′ 37″	20080821 ～20080911	40.00	開発に伴う 遺跡確認
こうぎきいせき 神前遺跡 (調査一覧44、財団④)	わかやまけんわかやましこうぎき 和歌山県和歌山市神前	3020150	307	135° 12′ 35″	34° 12′ 20″	20080910 ～20081009	50.00	開発に伴う 遺跡確認
かまやまこふん 釜山古墳 (調査一覧98、財団⑤)	わかやまけんわかやましうめはら・きのもと 和歌山県和歌山市梅原・木ノ本	3020150	44- 1	135° 08′ 18″	34° 15′ 32″	20090310 ～20090327	46.00	遺跡確認

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六十谷遺跡 (調査一覧1、市教委①)	散布地	弥生時代 鎌倉時代	ピット	弥生土器・瓦器	
要 約	弥生時代から鎌倉時代のピットを1基確認。				
宇田森遺跡 (調査一覧12、市教委②)	集落跡	中世	落ち込み	土師器	
要 約	中世の落ち込みを確認。遺構から焼土塊・炭が出土し、周辺に鍛冶関係遺構が展開する可能性を想定。				
鳥井遺跡 (調査一覧21、市教委③)	散布地	古墳時代 奈良時代	土坑	土師器	
要 約	古墳時代から奈良時代の土坑を1基確認。土坑から土師器7点出土。				
太田城水攻め堤跡 (調査一覧29、市教委④)	堤跡	戦国～ 江戸時代	大溝・石垣	なし	堤構築に伴う可能性のある大溝を確認。
要 約	堤構築以前の石垣、堤構築に伴う可能性のある大溝を確認。				
川辺遺跡 (調査一覧34、市教委⑤)	集落跡	古墳時代	なし	土師器・土人形	
要 約	古墳時代の希薄な包含層を確認。				
宇田森遺跡 (調査一覧52、市教委⑥)	集落跡	古墳時代・奈良時代・ 鎌倉時代	落ち込み	弥生土器・土師器・須恵器・ 瓦器	
要 約	古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の落ち込み地形を確認。				
平の下遺跡 (調査一覧56、市教委⑦)	散布地	鎌倉時代	なし	土師器・瓦器・瓦	
要 約	中世の遺物包含層を確認。集落の縁辺部と推定。				
有功遺跡 (調査一覧64、市教委⑧)	散布地	鎌倉時代	落ち込み・溝・土坑・ ピット	弥生土器・土師器・瓦器	
要 約	弥生時代前期の落ち込み、鎌倉時代の溝・土坑・ピットを確認。周辺に遺構が展開している可能性を推定。				
高井遺跡 (調査一覧90、市教委⑨)	散布地	奈良時代 鎌倉時代	土坑	土師器・須恵器・瓦器・近 世陶磁器	
要 約	中世の土坑を検出。直川小学校敷地内で検出された遺構が東側にも展開している状況を確認。				
上黒谷遺跡 (調査一覧95、市教委⑩)	散布地	古墳時代～ 奈良時代	なし	須恵器・土師器・瓦	
要 約	古墳時代後期から奈良時代の遺物包含層を確認。遺構は対象地の北側に展開している可能性を推定。				
六十谷遺跡 (調査一覧110、市教委⑪)	散布地	古墳時代 奈良時代	土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・ 瓦器	
要 約	古墳時代初頭の遺物包含層、7世紀前半と推定される遺構を確認。				
川辺遺跡 (調査一覧10、財団①)	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	溝・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・ 須恵器・黒色土器・瓦器・ 中世陶器・近世陶磁器・ 瓦・土製品・石器・金属器	弥生時代、古墳～奈良時代、 平安～鎌倉時代の3面の遺 構面を確認。
要 約	第6・7区をのぞく7調査区で遺構を確認。そのうち谷状地形にあたる調査区では弥生時代、古墳～奈良時代、平安～鎌倉時代の3面の遺構面を確認。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧17、財団②)	集落跡	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代	竪穴住居・井戸・ ピット・溝・土坑・ 落ち込み	弥生土器・土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦器・国産陶磁器・ 瓦・土製品・石器・石製品	高密度で遺構を確認。調査地周辺における遺構分布の中心は北及び北西に展開する可能性を想定。
要 約	弥生時代中期初頭から前葉、弥生時代中期前葉から奈良時代及び鎌倉時代、鎌倉時代以降の3面の遺構面を確認。第1～3区は遺構が高密度で分布。				
鳥井遺跡 (調査一覧41、財団③)	散布地	平安時代 鎌倉時代	ピット・溝・土坑	土師器・須恵器・黒色土器・ 瓦器・輸入陶磁器・国産陶磁器	平安時代・鎌倉時代の集落域を確認。鳥井遺跡における集落の様相が判明。
要 約	平安時代、鎌倉時代の2面の遺構面を確認。調査地南半では水田耕土とみられる堆積を確認。				
神前遺跡 (調査一覧44、財団④)	散布地	弥生時代～ 鎌倉時代	外堤・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦器・中世陶器・ 輸入陶磁器・国産陶磁器・ 瓦・石器	微高地に展開する集落域を確認。
要 約	弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構面を確認。調査地北西方向に微低地が展開。				
釜山古墳 (調査一覧98、財団⑤)	古墳	古墳時代	集積遺構・外堤葺石	土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・ 国産陶磁器・土製品・瓦・石器・埴輪	外堤葺石、推定古墳周濠底面の標高及び残存周濠上端幅を確認。
要 約	外堤葺石、推定古墳周濠底面の標高及び残存周濠上端幅を確認し、築造時の古墳復元案を提示。				

平成22年3月31日

和歌山市内遺跡発掘調査概報

－平成20年度－

発行 和歌山市教育委員会
(和歌山市七番丁23)

印刷 白光印刷株式会社

© 和歌山市教育委員会 2010